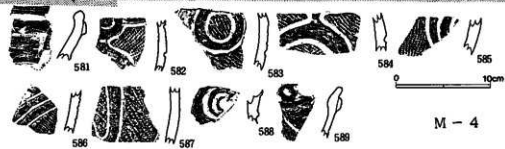
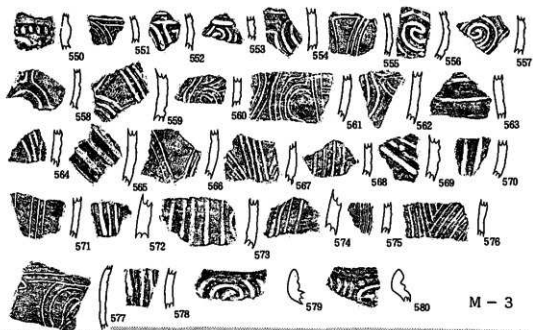


M - 2



M - 3

第182図 グリッド出土縄文後期前葉土器 (1:4) (11)



第183図 グリッド出土縄文後期前葉土器 (1:4) <12>

第189表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	部位	法量	形状および文様	調整 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
							外面	内面		
1	灰鉢	口縁部	---	底縁部平直でキドーナツ状。口縁部から器下する8字状隆帯。隆帯向わきに斜行沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 5/1	灰白色 10YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期後葉
2	灰鉢	口縁部	---	円孔を持つ突起と端部に円形刺突と沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
3	灰鉢	口縁部	---	小突起から長楕円状の沈線。その下に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色色 2.5YR 5/6	明褐色色 2.5YR 5/6	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
4	灰鉢	口縁部	---	端部に横引き沈線。以下に円形沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい藍色 7.5YR 6/4	褐色色 7.5YR 6/1	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
5	灰鉢	口縁部	---	胴部に洪巻き状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色色 7.5YR 7/2	明褐色色 7.5YR 7/1	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
6	灰鉢	口縁部	---	内面に円形刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色色 7.5YR 5/2	灰白色 10YR 7/1	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
7	灰鉢	口縁部	---	端部に点形連続刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい藍色 5YR 7/4	灰白色 5YR 8/1	つ-10G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
8	灰鉢	胴部	---	8字状突起下に各2個の円形刺突。そこから2条の横引き沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色色 7.5 YR/2	褐色色 7.5 YR/2	た-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
9	灰鉢	口縁部	---	胴部を待つ器下隆帯を8字状突起で連結。突起向わきの横引きの沈線。下に斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい藍色 5YR 6/4	にぶい藍色 5YR 7/4	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
10	灰鉢	口縁部	---	端部に横引きの沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい藍色 5YR 7/4	にぶい藍色 5YR 7/4	た-10G	後期前葉 堀之内1式
11	浅鉢	口縁部	---	口縁部褐色き・灰・楕円状の沈線と円形刺突。胴部弧状の斜行沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色色 10YR 5/1	褐色色 10YR 6/1	た-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
12	灰鉢	口縁部	---	隆帯上に円形刺突と沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	洗黄褐色 10YR 8/3	洗黄褐色 10YR 8/3	つ-10G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
13	灰鉢	口縁部	---	円形刺突から沈線。区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	洗黄褐色 10YR 8/3	つ-10G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
14	灰鉢	口縁部	---	胴部上位の2条の横引き沈線間に隆帯。以下縄文。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色色 10YR 4/1	明褐色色 7.5 YR/2	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
15	灰鉢	口縁部	---	横引きの沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色色 7.5YR 7/2	灰白色 7.5YR 8/2	つ-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
16	灰鉢	口縁部	---	端部に横引きの沈線。以下斜行と洪巻き沈線の組み合わせ。縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
17	灰鉢	胴部	---	斜行沈線と縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	褐色色 10YR 6/1	ち-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
18	灰鉢	胴部	---	矩形の沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい藍色 7.5YR 7/4	明褐色色 7.5YR 7/1	つ-10G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
19	灰鉢	胴部	---	斜行沈線上に縄文L.R.	ナテ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 7/1	た-10G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式

第190表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	群 集	部 位	法 量	遺物および文様	調 査 (内容)	土 器	色 調		出 土 位置	備 考
							外 面	内 面		
20	深 鉢	胴部	— — —	横引きの沈線下に渦巻き状の沈線。その後、 縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	5-10G III区	後期前葉 堀之内1式
21	深 鉢	胴部	— — —	横引き沈線下に斜行沈線。その後、縄文L R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰白色 10YR 6/1	褐灰色 7.5YR 4/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内1式
22	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 6/4	褐灰色 10YR 6/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内1式
23	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 6/3	褐灰色 7.5YR 6/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内1式
24	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 6/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内1式
25	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰白色 10YR 6/1	にぶい・褐色 10YR 7/2	5-10G III区	後期前葉 堀之内1式
26	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	5-10G II区	後期前葉 堀之内1式
27	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 6/1	つ-10G III区	後期前葉 堀之内1式
28	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	灰白色 10YR 7/1	て-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
29	深 鉢	胴部	— — —	弧状沈線。その後、縄文L.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 2.5YR 6/6	つ-10G	後期前葉 堀之内1式
30	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	褐灰色 7.5YR 4/1	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
31	深 鉢	胴部	— — —	渦巻き状の沈線。その後、縄文L.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	灰白色 10YR 8/1	つ-10G III区	後期前葉 堀之内1式
32	深 鉢	胴部	— — —	沈線区部内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 8/1	そ-10G III区	後期前葉 堀之内1式
33	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
34	深 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。その後、縄文L.L.	不明。	白色磁子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	灰黄褐色 10YR 6/2	て-10G	後期前葉 堀之内1式
35	深 鉢	胴部	— — —	隆帯下に沈線。縄文L.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	にぶい・褐色 5YR 7/4	灰白色 7.5YR 8/2	つ-10G II区	後期前葉 堀之内1式
36	深 鉢	胴部	— — —	横引きの沈線下に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
37	深 鉢	口縁部	— — —	弧状の隆帯。	ヨコ方向の丁 字ナデ。	白色磁子 角閃石	褐灰色 7.5YR 4/1	褐灰色 7.5YR 5/1	5-10G III区	後期前葉 堀之内1式
38	深 鉢	胴部	— — —	渦巻き状の沈線と縄文L.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色磁子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶい・褐色 7.5YR 7/3	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式

第191表 グリッド出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘 番号	部 類	部位	法 量	器形および文様	調 整 (内径)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
39	深 鉢	胴部	---	横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰白色 10YR 8/1	つ-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
40	深 鉢	胴部	---	斜行沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
41	深 鉢	胴部	---	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 6/3	と-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
42	深 鉢	胴部	---	横引き沈線間に連続斜線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	黒褐色 10YR 3/1	褐灰色 10YR 4/1	て-10G IV区	後期前葉 堀之内1式
43	注 口 土 器	胴部	---	線字状比喩区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	褐灰色 10YR 4/1	そ-10G III区	後期前葉 堀之内1式
44	深 鉢	胴部	---	細い幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 5/1	灰白色 10YR 7/1	ち-10G III区	後期前葉 堀之内2式
45	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	洗賢褐色 10YR 6/3	褐灰色 10YR 6/1	つ-10G IV区	後期前葉 堀之内2式
46	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰白色 7.5YR 8/2	た-10G IV区	後期前葉 堀之内2式
47	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	灰白色 10YR 7/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
48	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	タテ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	灰褐色 5YR 6/2	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
49	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	にぶい褐色 5YR 6/3	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
50	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上にL.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 5/1	褐灰色 7.5YR 6/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
51	注 口 土 器	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	灰白色 10YR 7/1	つ-10G III区	後期前葉 堀之内2式
52	注 口 土 器	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
53	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 4/3	灰黄褐色 10YR 6/2	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
54	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	と-10G	後期前葉 堀之内2式
55	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	明褐色 7.5YR 7/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式
56	深 鉢	胴部	---	横引き沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰白色 10YR 8/1	つ-10G I区	後期中葉 加曾利B1式
57	深 鉢	胴部	---	幾何学的沈線文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	褐灰色 10YR 6/1	た-10G III区	後期前葉 堀之内2式

第192表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

種別 番号	器種	部位	法長	器形および文様	割 割 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
58	深 鉢	胴部	-- --	割みを持つ隆帯の下に幾何学的沈線文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	明褐色 7.5YR 7/2	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式 58-61回-100枚
59	深 鉢	口縁 - 胴部	-- --	割みを持つ隆帯下に幾何学的沈線文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	明褐色 7.5YR 7/2	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式 58-61回-100枚
60	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 7.5YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式 58-61回-100枚
61	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	灰白色 10YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式 58-61回-100枚
62	深 鉢	胴部	-- --	渦巻状と幾何学的文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	灰白色 10YR 8/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
63	深 鉢	胴部	-- --	渦巻状と幾何学的文様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 7.5YR 8/2	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
64	深 鉢	胴部	-- --	歪三角状の細い沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	褐灰色 10YR 5/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
65	深 鉢	胴部	-- --	歪三角状の細い沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	褐灰色 10YR 6/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
66	深 鉢	胴部	-- --	重要形状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	褐灰色 5YR 6/4	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
67	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的沈線文様に縄文。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	褐灰色 7.5YR 5/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
68	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的沈線文様に縄文。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/1	褐灰色 10YR 5/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
69	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的沈線文様に縄文。	タテ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	褐灰色 10YR 4/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
70	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的文様に縄文。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	褐灰色 10YR 5/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
71	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的沈線文様に縄文。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	褐灰色 10YR 5/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
72	深 鉢	胴部	-- --	幾何学的沈線文様に縄文。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	褐灰色 10YR 6/1	た-10G Ⅲ区	後期前斎 堀之内2式
73	深 鉢	口縁 部	-- --	小突起下に2個の円形刺突。そこから横引 きの沈線。内面も同様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 7/3	し-11G Ⅲ区	後期前斎 堀之内1式
74	深 鉢	口縁 部	-- --	円孔のある小突起。その両わきに横引きの 沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	褐灰色 10YR 4/1	す-10G Ⅰ区	後期前斎 堀之内1式
75	深 鉢	口縁 部	-- --	円孔を持つ小突起。両わきに縦位沈線。刺 突。さらに横引きの沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 7/6	灰白色 7.5YR 8/2	て-11G Ⅲ区	後期前斎 堀之内1式
76	深 鉢	口縁 部	-- --	円孔を持つ小突起。円孔周囲を巡る沈線。 内面も円形刺突。	ナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	す-11G Ⅳ区	後期前斎 堀之内1式

第193表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

標目 番号	器種	部位	法量	器形および文様	調整 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
							外面	内面		
77	甕鉢	口縁部	--	小突起下の円孔から比喩着下。その両わき に横凹区画状の沈線。円形刺突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/2	て-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
78	甕鉢	口縁部	--	円形刺突を軸点として着下する筋みを持つ 隆帯。両わきの比喩区画上に横文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 8/4	淡黄褐色 7.5YR 8/3	し-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
79	甕鉢	口縁部	--	横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 8/4	灰白色 7.5YR 8/2	す-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
80	甕鉢	口縁部	--	小突起下に円形刺突。両わきから横引きの 沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 6/3	て-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
81	甕鉢	口縁部	--	小突起下に2個の円形刺突。そこから横引 きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰白色 7.5YR 8/2	し-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
82	甕鉢	口縁部	--	横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	て-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
83	甕鉢	口縁部	--	横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	灰白色 7.5YR 8/2	す-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
84	甕鉢	口縁部	--	隆部に縦引き沈線と円形刺突。そこから横 引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 5YR 6/4	し-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 未定
85	甕鉢	口縁部	--	小突起下の円孔周囲に二重の沈線が通る。 その両わきから横引きの沈線。内面も同様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	明褐色 7.5YR 7/3	し-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
86	甕鉢	口縁部	--	小突起下に8字状隆帯。そのわきに3本の 縦沈線。横引き沈線。内面も同様。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 7.5YR 8/2	灰白色 7.5YR 8/2	ろ-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
87	甕鉢	口縁部	--	円孔を持つ小突起。内面、円形刺突を持つ 円形突起。	ナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 8/4	褐色 7.5YR 7/8	つ-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
88	甕鉢	口縁部	--	内外面に斜行する沈線が並ぶ。内面小突起 部に円形刺突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	て-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
89	甕鉢	口縁部	--	小突起下の円孔周囲に沈線が通る。さらに その両側に縦沈線の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰白色 7.5YR 8/1	す-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
90	甕鉢	口縁部	--	斜行する沈線と横引きの沈線。その上に粘 土凝結片で小突起をつくる。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	淡黄褐色 7.5YR 8/4	し-11G	後期前葉 堀之内1式
91	甕鉢	口縁部	--	褐色き斜と斜行する沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 7.5YR 8/1	し-11G	後期前葉 堀之内1式
92	甕鉢	胴部	--	褐色き沈線帯下に沈線によるなぞりと中央 に円形刺突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 10YR 8/3	淡黄褐色 7.5YR 8/3	て-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
93	甕鉢	胴部	--	横状帯下部の円孔を中心として沈線が通 り、上、横に円形刺突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 8/3	明褐色 7.5YR 7/2	て-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
94	甕鉢	胴部	--	沈線区画と横文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	と-11G	後期前葉 堀之内1式 古段階
95	甕鉢	胴部	--	8字状隆帯を沈線でなぞり、その上にドーナ ツ状の突起を貼付。	--	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	淡黄褐色 7.5YR 8/4	す-11G IV区	後期前葉 堀之内1式 古段階

第194表 グリッド出土遺物一覧表 <縄文土器>

標本 番号	部 類	部位	注 記	器形および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位置	備 考
							外 面	内 面		
96	深 鉢	口縁部	— — —	横引きの沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 5YR 6/4	つ-11G II区	後期前葉 堀之内1式 古段層
97	深 鉢	口縁部	— — —	小突起下のこぶ状突起帯内に沈線と円形刺突。突起下から筋みを持つ隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	にぶい褐色 7.5YR 6/4	て-11G II区	後期前葉 堀之内1式 古段層
98	深 鉢	口縁部	— — —	隆帯を沈線でなぞる。内面に小突起に円形刺突。	ヨコ方向の丁寧なナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	灰白色 7.5YR 8/2	た-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
99	深 鉢	口縁部	— — —	小突起下に円形刺突。その下に円形刺突と沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 10YR 4/1	灰褐色 7.5YR 6/2	ち-11G II区	後期前葉 堀之内1式
100	深 鉢	胴部	— — —	褐色き状の沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/1	た-11G II区	後期前葉 堀之内1式
101	深 鉢	胴部	— — —	筋みを持つ隆帯下に横引き沈線。その上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 6/3	て-11G II区	後期前葉 堀之内1式
102	深 鉢	口縁部 - 胴部	— — —	2個の円形刺突を中心に展開する沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	褐色 7.5YR 4/1	す-11G I区	後期前葉 堀之内1式
103	深 鉢	胴部	— — —	8字状突起から3条の横引き沈線と垂下する筋みを持つ隆帯。隆帯間わきに弧状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 10YR 7/3	た-11G II区	後期前葉 堀之内1式
104	深 鉢	胴部	— — —	幅広く重ぶ沈線沈線のみと縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 7.5YR 8/2	し-11G I区	後期前葉 堀之内1式
105	深 鉢	胴部	— — —	重弧状の沈線と縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 6/2	灰白色 10YR 8/1	し-11G III区	後期前葉 堀之内1式
106	深 鉢	胴部	— — —	多条の縦位沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/3	にぶい褐色 5YR 6/3	し-11G I区	後期前葉 堀之内1式
107	深 鉢	胴部	— — —	斜行する沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 4/1	灰白色 10YR 8/2	し-11G I区	後期前葉 堀之内1式
108	深 鉢	胴部	— — —	2条の筋みを持つ隆帯間に8字状の突起帯付。以下に沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/3	にぶい褐色 5YR 7/3	て-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
109	深 鉢	胴部	— — —	隆帯の連結部に円形刺突。	ナナ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	にぶい褐色 5YR 6/3	て-11G I区	後期前葉 堀之内1式
110	深 鉢	胴部	— — —	円形刺突を中心に重弧状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	明褐色 7.5YR 7/1	て-11G I区	後期前葉 堀之内1式
111	深 鉢	胴部	— — —	垂下する円形突起刺突あわきの楕円区画内に円形突起刺突。その下は重三角状の沈線。突起下は褐色き状沈線。縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	明褐色 7.5YR 7/2	し-11G II区	後期前葉 堀之内1式
112	深 鉢	胴部	— — —	褐色き状と斜行する沈線の区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/2	灰白色 7.5YR 8/2	と-11G I区	後期前葉 堀之内1式
113	深 鉢	口縁部 - 胴部	— — —	横引き沈線下に斜行する沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 5YR 6/4	す-11G IV区	後期前葉 堀之内1式
114	深 鉢	胴部	— — —	横引き沈線下に斜行する沈線。その後縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰褐色 10YR 6/2	て-11G I区	後期前葉 堀之内1式

第195表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	器 種	部 位	注 記	器形および文様	調 査 (内 容)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
115	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 7.5YR 8/2	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
116	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 8/2	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
117	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行沈線。その後、縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	純灰色 7.5YR 6/1	L-11G	後期前葉 層之内1式
118	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 7.5YR 8/3	L-11G IV区	後期前葉 層之内1式
119	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 8/4	淡黄褐色 7.5YR 8/3	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
120	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に連続の渦み。下に重環状の 沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 7.5YR 8/2	〒-11G II区	後期前葉 層之内1式
121	埴 鉢	胴部	—	斜行沈線上に縄文L R。	タテ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	にぶい褐色 7.5YR 7/3	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
122	埴 鉢	胴部	—	斜行沈線間に円形刻痕。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	褐色 7.5YR 7/6	〒-11G	後期前葉 層之内1式
123	埴 鉢	胴部	—	渦みを持つ隆帯下に斜行沈線。その後、縄 文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	灰白色 7.5YR 8/2	〒-11G I区	後期的葉 層之内1式
124	埴 鉢	胴部	—	隆帯下を沈線でなぞり、その区画内に縄文 L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	褐色 7.5YR 4/1	〒-11G	後期前葉 層之内1式
125	埴 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行沈線。その後、縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 5YR 5/6	にぶい褐色 5YR 5/4	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
126	埴 鉢	胴部	—	渦巻き状沈線。その後、縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 7.5YR 5/2	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
127	埴 鉢	胴部	—	弧状沈線内に縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	褐色 5YR 7/6	L-11G 埋蔵付	後期前葉 層之内1式
128	埴 鉢	胴部	—	多量の縦位沈線の後、縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	灰白色 7.5YR 8/2	〒-11G 埋蔵付	後期前葉 層之内1式
129	埴 鉢	胴部	—	弧状の沈線区画外に縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/1	〒-11G	後期前葉 層之内1式
130	埴 鉢	胴部	—	矩形の沈線区画内に縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶい褐色 10YR 7/2	〒-11G IV区	後期前葉 層之内1式
131	埴 鉢	胴部	—	弧状と横位の沈線区画内に縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 2.5YR 8/2	灰褐色 7.5YR 4/2	〒-11G I区	後期的葉 層之内1式
132	埴 鉢	胴部	—	弧状沈線面に縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 5YR 6/4	〒-11G	後期前葉 層之内1式
133	埴 鉢	胴部	—	渦みを持つ隆帯下に連続する沈線縄文の みと縄文L R。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰褐色 7.5YR 5/2	〒-11G IV区	後期的葉 層之内1式

第196表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探区 番号	探検 部	探検 部位	法 量	器形および文様	調 整 (内蓋)	新 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 周	内 周		
134	探検	胴部	-- --	柄目を持った下縁帯を貼り付け後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	淡褐色 5YR 8/3	て-11G 1区	後期前葉 壺之内1式
135	探検	胴部	-- --	柄目を持った下縁帯に並走する沈線並文の あと縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	す-11G IV区	後期前葉 壺之内1式
136	探検	胴部	-- --	縦位沈線を並べたあと縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい褐色 7.5YR 5/3	す-11G	後期前葉 壺之内1式
137	探検	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	灰白色 2.5YR 7/1	す-11G	後期前葉 壺之内1式
138	探検	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/4	灰白色 10YR 7/1	す-11G	後期前葉 壺之内1式
139	探検	胴部	-- --	数珠の帯引き沈線下に縄文L。	不明。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	褐色 5YR 7/6	す-11G	後期前葉 壺之内1式
140	探検	胴部	-- --	横位沈線上に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 6/4	にぶい褐色 10YR 7/2	す-11G	後期前葉 壺之内1式
141	探検	胴部	-- --	縦位沈線と横帯を沈線外に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/1	す-11G	後期前葉 壺之内1式
142	探検	胴部	-- --	縦位沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 7/3	し-11G III区	後期前葉 壺之内1式
143	探検	胴部	-- --	斜行沈線上に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	褐灰色 10YR 5/1	す-11G	後期前葉 壺之内1式
144	探検	胴部	-- --	斜行沈線上に縄文L。	不明。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰白色 10YR 7/1	11-G III区	後期前葉 壺之内1式
145	探検	胴部	-- --	横位沈線下に斜行沈線、その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/1	し-11G	後期前葉 壺之内1式
146	探検	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L。	ヨコ方向の丁 帯をナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/1	し-11G	後期前葉 壺之内1式
147	探検	胴部	-- --	弧状沈線区間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	褐灰色 7.5YR 5/1	た-11G IV区	後期前葉 壺之内1式
148	探検	胴部	-- --	弧状沈線区間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	明褐灰色 7.5YR 7/1	た-11G I区	後期前葉 壺之内1式
149	探検	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	灰褐色 7.5YR 6/2	つ-11G II区	後期前葉 壺之内1式
150	探検	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	灰白色 2.5YR 7/1	ち-11G I区	後期前葉 壺之内1式
151	探検	胴部	-- --	斜行沈線上に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	褐灰色 10YR 4/1	た-11G II区	後期前葉 壺之内1式
152	探検	胴部	-- --	横帯を沈線下に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	褐灰色 7.5YR 6/1	た-11G I区	後期前葉 壺之内1式

第197表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

種類 番号	形 状	部位	法 量	器形および文様	調 査 (内面)	色 調		出 土 位 置	備 考	
						外 面	内 面			
153	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線上に縄文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 7/3	L-11G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
154	楕 円	胴部	-- --	沈線区画のあと縄文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい褐色 10YR 6/3	T-11G	後期前葉 堀之内1式
155	楕 円	胴部	-- --	弧状の沈線区画内に縄文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	T-11G	後期前葉 堀之内1式
156	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線と渦巻き状沈線、その後縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	灰白色 7.5YR 8/2	T-11G	後期前葉 堀之内1式
157	楕 円	胴部	-- --	弧状の沈線区画外に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 10YR 6/1	T-11G	後期前葉 堀之内1式
158	楕 円	胴部	-- --	逆三角形の沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/3	梅灰色 10YR 6/1	T-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
159	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線と縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	にぶい褐色 7.5YR 7/3	T-11G	後期前葉 堀之内1式
160	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	T-11G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
161	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線間に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	灰褐色 7.5YR 6/2	L-11G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
162	楕 円	胴部	-- --	渦巻き状と斜行沈線の組み合わせ、空間に 縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 6/3	明褐色 7.5YR 7/1	L-11G 埋没付近	後期前葉 堀之内1式
163	楕 円	胴部	-- --	渦巻き状沈線区画外に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 6/2	T-11G	後期前葉 堀之内1式
164	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/3	灰白色 10YR 8/1	T-11G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
165	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線区画間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 7.5YR 8/2	T-11G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
166	楕 円	胴部	-- --	縦位沈線区画間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	梅灰色 7.5YR 5/1	明褐色 7.5YR 7/2	T-11G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
167	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線区画外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	T-11G Ⅳ区	後期前葉 堀之内1式
168	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線区画外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい赤褐色 5YR 5/3	T-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
169	楕 円	胴部	-- --	縄文L.L.を斜行沈線で切る。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 7.5YR 6/3	灰白色 7.5YR 8/2	T-11G Ⅱ区	?
170	楕 円	胴部	-- --	沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰褐色 5YR 5/2	T-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
171	楕 円	胴部	-- --	斜行沈線から渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	灰褐色 5YR 5/2	T-11G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式

第198表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	器種	部位	法量	器形および文様	調査 (内圖)	胎土	色 調		出土 位置	備 考
							外 面	内 面		
172	深鉢	胴部	—	渦巻き状の沈線から斜行沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 7/3	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
173	深鉢	胴部	—	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 5/1	明褐色 7.5YR 7/2	〒-11G	後期前遺 集之内1式
174	深鉢	胴部	—	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	明褐色 7.5YR 7/1	〒-11G	後期前遺 集之内1式
175	深鉢	胴部	—	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
176	深鉢	胴部	—	斜行沈線と直線状沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 6/3	〒-11G	後期前遺 集之内1式
177	深鉢	胴部	—	斜行沈線間に直線状沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 7/2	灰白色 10YR 7/1	〒-11G I区	後期前遺 集之内1式
178	深鉢	胴部	—	渦巻き状の沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
179	深鉢	胴部	—	渦巻き状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 5YR 7/4	〒-11G	後期前遺 集之内1式
180	深鉢	胴部	—	斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 5YR 5/2	〒-11G I区	後期前遺 集之内1式
181	深鉢	胴部	—	斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 7/3	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
182	深鉢	胴部	—	多条の斜行沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	淡黄褐色 7.5YR 6/3	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
183	深鉢	胴部	—	多条の縦位沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	にぶい褐色 7.5YR 7/3	〒-11G	後期前遺 集之内1式
184	深鉢	胴部	—	多条の縦位と斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 4/1	灰白色 10YR 6/1	〒-11G	後期前遺 集之内1式
185	深鉢	胴部	—	多条の縦位沈線間に縦文R L。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 10YR 6/3	灰白色 10YR 6/1	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
186	深鉢	胴部	—	多条の縦位沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	褐灰色 7.5YR 5/1	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
187	深鉢	胴部	—	縦位沈線が並ぶ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 7/6	〒-11G I区	後期前遺 集之内1式
188	深鉢	胴部	—	縦位の沈線が並ぶ。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	明褐色 7.5YR 7/2	〒-11G IV区	後期前遺 集之内1式
189	深鉢	胴部	—	多条の斜行沈線間に連続斜文。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 5YR 6/4	〒-11G II区	後期前遺 集之内1式
190	深鉢	胴部	—	縦位沈線間に連続斜文。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	褐灰色 10YR 5/1	〒-11G No 1	後期前遺 集之内1式

第199表 グリッド出土遺物一覧表 <縄文土器>

発掘 番号	器種	部位	産 所	器形および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
191	深鉢	胴部	—	肩突を持つ隆帯下に垂走する沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	す-11G	後期前葉 堀之内1式
192	深鉢	胴部 ～ 底部	—	網代底。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 4/1	褐灰色 7.5YR 4/1	す-11G 1区	後期前葉 堀之内1式
193	深鉢	底部	—	網代底。	ナナ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 5YR 5/1	褐灰色 5YR 6/1	す-11G IV区	後期
194	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	肩部内形肩突と横引きの沈線。以下逆三角 形の沈線区画内に縄文L R。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 10YR 7/1	す-11G	後期前葉 堀之内1式
195	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	肩部横引きの沈線。以下斜行沈線区画外に 縄文R L。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	にぶい褐色 7.5YR 7/4	す-11G W区	後期前葉 堀之内1式
196	深鉢	胴部	—	縦位沈線間に縄文R L。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	にぶい褐色 5YR 7/4	せ-11G	後期前葉 堀之内1式
197	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	肩部内形肩突と横引きの沈線。以下縦位沈 線が差ぶ。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰白色 7.5YR 8/2	す-11G	後期前葉 堀之内1式
198	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	肩部横引きの沈線。以下直線状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	褐灰色 7.5YR 5/1	し-11G III区	後期前葉 堀之内1式
199	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	小突部下に2条の弧状沈線。そこから円形 肩突と横引きの沈線。内面も同様。以下斜 行する沈線間に縄文L R。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	灰白色 2.5YR 7/1	す-11G W区	後期前葉 堀之内1式
200	深鉢	胴部	—	弧状沈線と縄文R L。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰白色 7.5YR 8/2	す-11G N区	後期前葉 堀之内1式
201	深鉢	胴部	—	直線と蛇行する沈線を交互に施文。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	明褐灰色 7.5YR 7/2	褐灰色 10YR 6/1	と-11G	後期前葉 堀之内1式
202	深鉢	胴部	—	多条の斜行沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	灰褐色 7.5YR 5/2	し-11G II区	後期前葉 堀之内1式
203	深鉢	胴部	—	多条の斜行沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	灰白色 10YR 8/2	す-11G	後期前葉 堀之内1式
204	深鉢	胴部	—	斜行沈線。	ナナ。ヨコ方 向のナナ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 7/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	し-11G 標準付注	後期前葉 堀之内1式
205	深鉢	胴部	—	縦位とわらび手状の沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 10YR 7/1	て-11G W区	後期前葉 堀之内1式
206	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	肩部横帯部下に2個の円形肩突。その間 わきに褐色を帯び弧状沈線と横円区画沈 線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶい褐色 10YR 7/2	て-11G II区	後期前葉 堀之内1式
207	深鉢	口縁 部	—	肩部に弧状の沈線。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 5YR 7/3	す-11G	後期前葉 堀之内1式
208	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	口縁部下に圧痕を持つ隆帯。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/1	と-11G	後期前半
209	深鉢	口縁 ～ 胴部	—	口縁部下に圧痕を持つ隆帯。	ヨコ方向のナ ナ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	にぶい褐色 7.5YR 7/3	て-11G 1区	後期前半

第200表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	形 状	部位	法 量	形状および文様	開 窓 (内面)	新 土	色 調		出 土 位置	備 考
							外 面	内 面		
210	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	底部に浅い横引き沈線。胴部4条の横引き沈線間に連続の刻みとも字状突起。以下筋線形の多条沈線区画。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/2	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
211	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	底部小突起下の円形刻みを囲む沈線。刻み下から刻みを持つ隆帯隆下。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 5YR 7/4	灰白色 10YR 7/1	て-11G 3区	後期前遺 堀之内2式
212	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	2条の刻みを持つ横線隆帯下に矩形の沈線区画。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	と-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
213	深 鉢	胴部	-	横引き沈線下の横線凹凹区画外に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	褐色 5YR 7/6	灰白色 5YR 8/2	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
214	深 鉢	胴部	-	斜行沈線区画外に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	灰白色 7.5YR 8/2	と-11G	後期前遺 堀之内2式
215	深 鉢	口縁 帯	-	刻みを持つ垂下隆帯。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい褐色 10YR 7/2	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
216	深 鉢	胴部	-	横引きと弧状の沈線区画。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土	明褐色 7.5YR 7/2	褐色 7.5YR 6/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
217	深 鉢	胴部	-	斜行沈線。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	褐色 7.5YR 6/1	淡黄褐色 10YR 6/3	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
218	深 鉢	胴部	-	斜行沈線。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 7/4	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
219	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	幾何学的沈線文様。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
220	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	底部と胴部上位に横引きの沈線。その間にJ字状の沈線。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 7.5YR 6/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
221	深 鉢	口縁 - 胴部	- -	横引きの沈線間に横文L.R。内面に1条の横引き沈線。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 10YR 7/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
222	深 鉢	胴部	-	横引き沈線下に斜行沈線。	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	褐色 5YR 5/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
223	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	明赤褐色 2.5YR 5/6	褐色 2.5YR 6/6	て-11G 2区	後期前遺 堀之内2式
224	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	褐色 10YR 5/1	褐色 10YR 5/1	て-11G 2区	後期前遺 堀之内1式
225	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ナズ方向のナズ。	白色粘土 角閃石 多	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰白色 10YR 7/1	と-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
226	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石 多	灰褐色 5YR 4/2	にぶい褐色 5YR 7/4	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式
227	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 7/3	て-11G 3区	後期前遺 堀之内2式
228	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線文様に横文L.R.	ヨコ方向のナズ。	白色粘土 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	明褐色 7.5YR 7/1	て-11G 1区	後期前遺 堀之内2式

第20表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

押器 番号	器 種	部位	注 量	器形および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
229	深 鉢	胴部	--	幾何学的沈線文様上に縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 4/1	灰褐色 7.5YR 5/2	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
230	深 鉢	胴部	--	幾何学的沈線文様上に縄文しR。2本の割 突を持つ突起あり。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ-赤褐色 5YR 4/4	相褐色 10YR 4/1	て-11G N区	後期前葉 堀之内2式
231	深 鉢	胴部	--	幾何学的沈線文様上に縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい-褐色 5YR 6/3	にぶい-褐色 5YR 7/3	ち-11G II区	後期前葉 堀之内2式
232	深 鉢	胴部	--	帯引き沈線区画内に縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	つ-11G I区	後期前葉 堀之内2式
233	深 鉢	胴部	--	帯状沈線区画内に斜行沈線。帯内区画内に 連続割突。その後、縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
234	深 鉢	胴部	--	斜行沈線。その後、縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	灰白色 10YR 7/1	ち-11G II区	後期前葉 堀之内2式
235	深 鉢	胴部	--	弧状の沈線。その後、縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい-褐色 5YR 6/4	灰褐色 5YR 6/2	十-11G	後期前葉 堀之内2式
236	深 鉢	口縁 部	--	口縁部下に刻みを持つ隆帯。以下帯引きの 沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
237	深 鉢	口縁 部	--	隆帯に帯引きの沈線。以下重下する連続割 突に重なる沈線と帯引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい-褐色 7.5YR 5/3	灰白色 7.5YR 8/1	つ-11G II区	後期前葉 堀之内2式
238	深 鉢	口縁 部	--	刻みを持つ隆帯下に帯引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	淡黄褐色 10YR 8/3	にぶ-黄褐色 10YR 7/2	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
239	浅 鉢	口縁 部	--	帯引き沈線間に帯長の帯状沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 4/1	灰白色 10YR 8/1	て-11G II区	後期前葉 堀之内2式
240	注 口 土 器	胴部	--	褐色さを基本とした幾何学的沈線区画上に 縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 4/1	褐灰色 10YR 6/1	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
241	注 口 土 器	胴部	--	褐色さを基本とした幾何学的沈線区画上に 縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 4/1	褐灰色 10YR 6/1	て-11G I区	後期前葉 堀之内2式
242	注 口 土 器	注口 部	--	幾何学的沈線区画上に縄文しR。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 7.5YR 8/2	灰白色 10YR 8/1	十-12G II区	後期前葉 堀之内2式
243	深 鉢	口縁 部	--	隆帯に帯引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 2.5YR 6/6	せ-12G	後期前葉 堀之内1式
244	深 鉢	口縁 部	--	隆帯に帯引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ-赤褐色 5YR 5/4	灰白色 10YR 7/1	ち-12G	後期前葉 堀之内1式
245	深 鉢	口縁 部	--	隆帯に2本の帯引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/4	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	つ-12G III区	後期前葉 堀之内1式
246	深 鉢	口縁 部	--	円形割突を持つ円盤おきに帯状沈線区 画。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 7/1	ち-12G	後期前葉 堀之内1式
247	深 鉢	口縁 部	--	隆帯と隆帯直下に各1本の帯引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 7/1	十-12G I区	後期前葉 堀之内1式

第202表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

検出 番号	器 種	部位	法 量	形状および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
248	深 鉢	口縁部	---	円孔を持つ突起下に楕円形刺突を持つ垂下隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 4/1	褐灰色 10YR 6/1	8-12G	後期前葉 堀之内1式
249	深 鉢	口縁部 胴部	---	口縁部下を横引きと斜行沈線で区画。その上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 5YR 4/1	褐灰色 5YR 4/2	せ-12G	後期前葉 堀之内1式
250	深 鉢	口縁部	---	縁部部に垂走する沈線。	ヨコ方向のナデ。	黒帯帯 透明岩片	淡黄褐色 7.5YR 8/4	灰白色 2.5YR 8/1	8-12G H区	後期前葉 堀之内1式 古漆器
251	深 鉢	胴部	---	8字状突起わきの矩形区画隆帯下を沈線でごさる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	9-12G	後期前葉 堀之内1式 古漆器
252	深 鉢	胴部	---	8字状突起から2条の隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 7.5YR 8/2	9-12G	後期前葉 堀之内1式 古漆器
253	深 鉢	胴部	---	8字状突起から2条の隆帯。隆帯下を沈線でごさる。	斜方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	褐灰色 7.5YR 6/1	8-12G H区	後期前葉 堀之内1式 古漆器
254	深 鉢	胴部	---	8字状突起から縄文を持つ縦位隆帯。隆帯下を沈線でごさった後、弧状沈線。さらに縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 2.5YR 8/2	灰白色 2.5YR 8/2	し-12G	後期前葉 堀之内1式 古漆器
255	深 鉢	胴部	---	2条の縦位隆帯上に環状隆帯。隆帯下を沈線でごさる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 6/2	8-12G H区	後期前葉 堀之内1式
256	深 鉢	胴部	---	2条の沈線下に褐色き状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/3	9-12G	後期前葉 堀之内1式
257	深 鉢	胴部	---	円形刺突を持つ円盤から沈線。その下の沈線区画内には縄文L.R.	不明。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 6/4	8-12G	後期前葉 堀之内1式
258	深 鉢	胴部	---	褐色き状沈線と縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 7.5YR 8/1	9-12G	後期前葉 堀之内1式
259	深 鉢	胴部	---	横引き沈線下に重弧状の沈線。その中に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	褐灰色 7.5YR 5/1	8-12G H区	後期前葉 堀之内1式
260	深 鉢	胴部	---	弧状の沈線内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	赤色粒子 白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	褐灰色 7.5YR 6/1	8-12G	後期前葉 堀之内1式
261	深 鉢	胴部	---	結線状の沈線下に縄文L.R.	不明。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	褐灰色 10YR 4/1	し-12G	後期前葉 堀之内1式
262	深 鉢	胴部	---	多角の斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	褐灰色 10YR 4/1	8-12G	後期前葉 堀之内1式
263	深 鉢	胴部	---	縄文L.R.を持つ沈線区画間に垂下する連続刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰白色 7.5YR 6/1	せ-12G	後期前葉 堀之内1式
264	深 鉢	胴部	---	矩形の沈線区画。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	8-12G	後期前葉 堀之内1式
265	深 鉢	胴部	---	斜行沈線と矩形区画の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰白色 10YR 8/1	9-12G	後期前葉 堀之内1式
266	深 鉢	胴部	---	斜行沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	灰白色 10YR 8/1	9-12G	後期前葉 堀之内1式

第203表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

種類 番号	器種	部位	法目	図形および文様	調査 (内面)	色調		出土 位置	備考	
						外面	内面			
267	深鉢	胴部	-	斜行沈線間に連続斜突。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	褐色 5YR 7/6	ト-12G	後期前葉 層之内1式
268	深鉢	胴部	-	斜行隆帯の一部に円形斜突。隆帯下を沈線 でなぞる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰白色 7.5YR 8/2	ト-12G	後期前葉 層之内1式
269	深鉢	胴部	-	斜行沈線上に縦文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 赤色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/2	セ-12G	後期前葉 層之内1式
270	深鉢	胴部	-	斜行沈線上に縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	シ-12G	後期前葉 層之内1式
271	深鉢	口縁 - 胴部	-	チェーン状の隆帯。横引きの沈線上に縦文 L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ト-12G	後期前葉 層之内2式
272	深鉢	口縁 部	-	幾何学的沈線文線上に縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰白色 10YR 8/1	セ-12G 1区	後期前葉 層之内2式
273	深鉢	胴部	-	幾何学的沈線文線上に縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 5YR 5/3	灰褐色 5YR 6/2	セ-12G 1区	後期前葉 層之内2式
274	深鉢	胴部	-	幾何学的沈線文線上に縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/3	灰褐色 5YR 6/2	セ-12G	後期前葉 層之内2式
275	深鉢	胴部 - 底部	-	幾何学的沈線文線上に縦文L.R。底部網代 肌。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰白色 10YR 7/1	セ-12G	後期前葉 層之内2式
276	深鉢	口縁 - 胴部	-	正面・背面に円孔。円形斜突を持つ突起。 隆帯横引きの沈線。突起下道三角状沈線と 8字状突起。内面3個の円形斜突。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 2.5YR 7/1	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
277	深鉢	口縁 部	-	2個の円孔と多数の円形斜突を持つ突起 (内面も同様で沈線も追加)。隆帯横引き沈 線。以下円形・矩形の沈線区画。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	淡黄褐色 10YR 8/4	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
278	深鉢	口縁 部	-	円孔と3個の円形斜突を持つ突起。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	灰白色 7.5YR 8/2	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
279	深鉢	口縁 部	-	隆帯中に太い沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	淡黄褐色 10YR 8/4	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
280	深鉢	胴部	-	隆帯2条の横引き沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	フ-13G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
281	深鉢	口縁 - 胴部	-	隆帯最長の横凹区画。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	灰白色 10YR 7/1	セ-13G	後期前葉 層之内1式
282	深鉢	口縁 部	-	隆帯に1条の横引き沈線。その下に1条の 横位隆帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ホ-13G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
283	深鉢	口縁 部	-	口縁部下に横引きの沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 7/4	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
284	深鉢	口縁 部	-	小突起下に縦位の沈線。そこから横引きの 沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰白色 10YR 7/1	ホ-13G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式
285	深鉢	口縁 部	-	円形斜突を持つ円環に連続する隆帯。隆帯 下を沈線でなぞる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰褐色 10YR 6/1	シ-13G	後期前葉 層之内1式 古砂帯

第204表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

邦国 番号	器種	部位	注 記	形状および文様	調整 (内径)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
286	深鉢	口縁部	---	8字状突起から文意して垂下する2条の隆帯には凹形刺突あり。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	明褐色 7.5YR 7/1	し-13G	後期前葉 堀之内1式 古墳群
287	深鉢	胴部	---	8字状突起から垂下する隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	た-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
288	深鉢	胴部	---	8字状突起のおきに沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	た-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
289	深鉢	口縁部	---	刺突を持つ円形突起下に凹弧状の隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰白色 10YR 8/2	し-13G	後期前葉 堀之内1式 古墳群
290	深鉢	胴部	---	刺突を持つ円形突起間おきに凹形刺突と沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
291	深鉢	胴部	---	8字状突起下を沈線でおさめる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
292	深鉢	胴部	---	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 10YR 4/1	灰白色 2.5Y 8/1	ち-13G	後期前葉 堀之内1式 古墳群
293	深鉢	胴部	---	渦巻き状の沈線上に縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	つ-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
294	深鉢	胴部	---	斜行沈線と渦巻き状沈線の組み合わせ。各所に凹形刺突。その後縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 6/4	た-13G I区	後期前葉 堀之内1式 古墳群
295	深鉢	胴部	---	横引き沈線下に斜行沈線。その後、縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明褐色 2.5YR 5/6	灰褐色 2.5YR 4/2	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
296	深鉢	胴部	---	半円状沈線区間下に縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	浅黄褐色 10YR 8/4	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
297	深鉢	口縁部 - 胴部	---	環状沈線で囲まれた空間に縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
298	深鉢	口縁部 - 胴部	---	横引き沈線上に縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	た-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
299	深鉢	口縁部	---	端部に凹形刺突と横引き沈線。その下に連続の溝。縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 4/1	灰白色 7.5YR 8/2	た-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
300	深鉢	口縁部	---	端部に横引きの沈線。以下斜行沈線と縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ち-13G	後期前葉 堀之内1式
301	深鉢	口縁部	---	端部に横引き沈線。以下垂下する連続刺突と沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	褐色 7.5YR 5/1	ち-13G	後期前葉 堀之内1式
302	深鉢	口縁部	---	端部に横長の楕円区間沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 5/3	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
303	深鉢	口縁部	---	横引き沈線下に環状の沈線。その後、縄文LR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	ち-13G 甲区	後期前葉 堀之内1式
304	深鉢	口縁部 - 胴部	---	円形刺突を持つ円盤から斜行隆帯。隆帯に沿う沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	褐色 10YR 5/1	し-13G	後期前葉 堀之内1式

第205表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探検 番号	器 種	部位	法 景	器形および文様	調 査 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
305	深鉢	口縁 - 胴部	- -	縦線横引きの比喩。以下垂下する連続刺突と比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	た-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
306	深鉢	胴部	- -	垂下する連続刺突上に縄文L.L.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	褐色 7.5YR 7/6	せ-13G	後期前葉 堀之内1式
307	深鉢	口縁 - 胴部	- -	口縁部下の横引き比喩上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	ふ-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
308	深鉢	胴部	- -	斜行比喩上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/3	た-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
309	深鉢	胴部	- -	斜行比喩上に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/3	にぶい褐色 7.5YR 5/4	ふ-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
310	深鉢	胴部	- -	横引き比喩に垂下する連続刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/2	灰白色 10YR 8/1	せ-13G	後期前葉 堀之内1式
311	深鉢	胴部	- -	横引き比喩間に連続刺突。以下斜行比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい褐色 7.5YR 6/3	せ-13G	後期前葉 堀之内1式
312	深鉢	胴部	- -	連続の比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 10YR 4/1	にぶい黄褐色 10YR 6/3	ふ-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
313	深鉢	胴部	- -	狭長の四角区画比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 10YR 4/1	にぶい黄褐色 10YR 7/4	ふ-13G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
314	深鉢	口縁 部	- -	口縁部隆帯による格四区画。小突起下に四角刺突。以下隆帯下を比喩でなぞる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 10YR 8/3	ふ-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
315	深鉢	口縁 部	- -	口縁部現状突起。端部横引きの比喩。突起下溝き状の隆帯。内面突起下に四角刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	黄褐色 2.5Y 8/3	ふ-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
316	深鉢	口縁 部	- -	端部に2条の比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ふ-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
317	深鉢	口縁 部	- -	口縁部現状突起に四角刺突。以下垂下隆帯。内面突起下に四角刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 10YR 8/4	灰白色 2.5Y 8/2	ふ-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
318	深鉢	口縁 部	- -	突起の四角刺突から横引きの比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 5YR 6/3	にぶい褐色 5YR 5/4	ふ-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
319	深鉢	口縁 部	- -	端部に2条の比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	明赤褐色 10YR 7/6	ふ-14G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
320	深鉢	口縁 部	- -	小突起下に四角刺突を囲む弧状比喩。両おきに横引き比喩と連続の刻み。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	ふ-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
321	深鉢	口縁 部	- -	内面に四角刺突を得つ四角。2条の横引き比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 7.5YR 7/6	て-14G	後期前葉 堀之内1式 古段階
322	深鉢	口縁 部	- -	端部に連続刺突。その下に横引き比喩。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	ふ-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 古段階
323	深鉢	胴部	- -	小突起下に縦位比喩。そこから横引きの比喩。胴部縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 10YR 8/6	黄褐色 10YR 8/6	ふ-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古段階

第206表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

標本 番号	器 種	部位	注 意	形状および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
324	深鉢	胴部	---	底りのある8字状突起下に2本一組の隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	黄褐色 2.5Y 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
325	深鉢	胴部	---	8字状突起下と比喩でなせる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 7.5YR 6/1	黄褐色 7.5YR 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
326	深鉢	胴部	---	渦巻状隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
327	深鉢	胴部	---	8字状突起間おきに2条の横引き沈線。以下斜行沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶい褐色 10YR 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
328	深鉢	胴部	---	2個の円形突起間おきに3条の横引き沈線。斜行下に縦状沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 10YR 5/1	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
329	深鉢	胴部	---	円形突起を持つ円盤から横引きの比喩と隆下する隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	黒褐色 10YR 3/1	と-14G	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
330	深鉢	胴部	---	横状隆帯下と比喩でなせる。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/3	黄褐色 10YR 6/3	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
331	深鉢	胴部	---	横状隆帯下に縦状の隆帯。その下を沈線と成す。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 10YR 5/1	灰白色 10YR 8/1	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
332	深鉢	胴部	---	2本一組の環状隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	黄褐色 10YR 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
333	深鉢	胴部	---	斜行する沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	黄褐色 10YR 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
334	深鉢	胴部	---	2本一組の環状隆帯下と比喩でなせる。他斜行沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
335	深鉢	胴部	---	斜行隆帯の一部と沈線とでなせる。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	黄褐色 2.5Y 8/4	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
336	深鉢	胴部	---	2本一組の環状隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰白色 10YR 8/1	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
337	深鉢	胴部	---	斜行隆帯と沈線とでなせた区間に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
338	深鉢	胴部	---	3角状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
339	深鉢	胴部	---	渦巻状突起線区間に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 10YR 8/1	と-14G	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
340	深鉢	胴部	---	渦巻状突起線区間に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 10YR 6/4	黄褐色 10YR 6/3	5-14G II区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡
341	深鉢	胴部	---	環状と小突起を配した2本一組の隆帯下は縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	黄褐色 10YR 6/3	黄褐色 2.5Y 6/3	5-14G II区	時期?
342	深鉢	口縁部	---	3個の円形突起と比喩を持つ隆帯間おきに縦状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	5-14G I区	後期前遺 壺之内1式 古伎跡

第207表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	群 林	部位	注 記	形状および文様	調 整 (内径)	粘 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
343	窪 林	口縁部	--	杓凹区域の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/2	5-14G Ⅲ区	後期前葉 層之内1式 古段階
344	窪 林	口縁部	--	環状隆帯上に沈線。内面に円形刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式 古段階
345	窪 林	口縁部	--	円形刺突を囲む環状沈線。内面も同様。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 ナデ	赤褐色 5YR 4/6	赤褐色 5YR 4/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
346	窪 林	口縁部	--	2条の横引き沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
347	窪 林	口縁部	--	円形刺突と横引きの沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	褐色 7.5YR 7/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
348	窪 林	口縁部	--	小突起下に沈線。横引き沈線下に連続の刻み。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
349	窪 林	口縁部	--	小突起下に円形刺突。そのおきに横引き沈線。彫形沈線区内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
350	窪 林	口縁部	--	端部に横引きの沈線。刺形沈線区内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 4/3	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
351	窪 林	口縁部	--	口縁部下の2条の横引き沈線内に縄文L.R.。さらに円形刺突。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 2.5YR 5/6	淡黄褐色 2.5YR 5/6	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
352	窪 林	胴部	--	円形刺突と斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	赤褐色 7.5YR 3/1	にぶい黄褐色 10YR 7/2	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
353	窪 林	胴部	--	円形刺突と斜行沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
354	窪 林	胴部	--	溝巻き状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 5YR 7/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
355	窪 林	胴部	--	溝巻き状と斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	淡黄褐色 7.5YR 8/6	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
356	窪 林	胴部	--	溝巻き状の沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	褐色 7.5YR 7/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
357	窪 林	胴部	--	溝巻き状の沈線下に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	5-14G Ⅰ区 Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
358	窪 林	胴部	--	環状の沈線。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰白色 10YR 8/2	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
359	窪 林	胴部	--	斜行沈線下に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 層之内1式
360	窪 林	胴部	--	環状隆帯下の彫形沈線内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子	淡黄褐色 10YR 8/4	淡黄色 2.5Y 8/4	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
361	窪 林	胴部	--	横引き沈線区内に縄文L.R.	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	淡黄色 2.5Y 8/3	淡黄色 2.5Y 8/3	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式

第208表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探区 番号	器種	部位	法量	器形および文様	調整 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
							外面	内面		
362	深鉢	胴部	-- --	横引き比喩下に斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/5	にぶい褐色 7.5YR 7/4	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
363	浅鉢	胴部	-- --	楕円状の沈線区画内に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	5-14G B区	後期前葉 堀之内1式
364	浅鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 7/1	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
365	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G II区	後期前葉 堀之内1式
366	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	5-14G II区	後期前葉 堀之内1式
367	深鉢	胴部	-- --	斜行と横引きの沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 4/1	にぶい褐色 7.5YR 7/4	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
368	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	5-14G I区 B	後期前葉 堀之内1式
369	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	黄褐色 2.5Y 8/3	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
370	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい赤褐色 5YR 5/4	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
371	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/1	にぶい褐色 7.5YR 5/3	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
372	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
373	注口 土器	胴部	-- --	横引き比喩下に斜行する沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	暗褐色 7.5YR 3/4	にぶい褐色 7.5YR 5/4	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
374	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 10YR 5/1	灰白色 10YR 8/2	5-14G II区	後期前葉 堀之内1式
375	深鉢	胴部	-- --	斜行沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	5-14G B区	後期前葉 堀之内1式
376	深鉢	胴部	-- --	半円区画の沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	淡黄褐色 10YR 8/3	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
377	浅鉢	胴部	-- --	渦巻き状の沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	褐色 7.5YR 6/6	5-14G B区	後期前葉 堀之内1式
378	深鉢	胴部	-- --	刺突を持つ隆帯に並ぶ沈線。その後、縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式
379	深鉢	胴部	-- --	縦位置楕円状沈線区画内に縄文L。一部 円形斜突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 10YR 8/3	5-14G B区	後期前葉 堀之内1式
380	深鉢	胴部	-- --	弧状沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	5-14G I区	後期前葉 堀之内1式

第209表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	遺 跡	部 位	注 記	形状および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
381	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	横引き沈線下に斜行沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 7.5YR 8/6	にぶい褐色 7.5YR 5/3	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
382	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位長楕円区画の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	褐灰色 10YR 6/1	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
383	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	斜行沈線と渦巻き状沈線の組み合わせ。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	灰白色 10YR 8/2	5-14G Ⅱ区	後期の葉 堀之内1式
384	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	5-14G Ⅱ区	後期的葉 堀之内1式
385	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	横引き沈線下に渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/3	淡黄色 2.5Y 7/3	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
386	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	渦巻き状沈線。その後、縦文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 6/3	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
387	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	渦巻き状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰黄褐色 10YR 4/2	5-14G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
388	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/3	灰白色 10YR 8/2	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
389	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	灰褐色 7.5YR 5/2	5-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
390	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	褐色 5YR 6/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
391	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位沈線。その後、縦文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
392	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 5/2	にぶい褐色 5YR 6/3	5-14G Ⅰ区 Ⅱ	後期前葉 堀之内1式
393	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	垂下する沈線。その後、縦文R.L.。さらに 垂下する円形の連続刻突。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 7/6	5-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式
394	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	斜行沈線間に連続刻突。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
395	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	垂下沈線と斜行沈線間に縦文R.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	褐灰色 10YR6/1	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式
396	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	端部に2個一列の円形刻突を持つ小突起。 そこからさらに連続刻突。突起下からV字 状に垂下する刻突を持つ縁帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶい褐色 7.5YR 7/4	5-14G Ⅰ区	後期前葉 堀之内1式 古灰層
397	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	端部に円形刻突を持つ円盤と沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰白色 10YR 7/1	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 古灰層
398	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	沈線を持つ楕円状手回わきに楕円区画の縁 帯。帯内を持つ縁帯垂下。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	灰白色 10YR 8/2	5-14G Ⅲ区	後期前葉 堀之内1式
399	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	円形刻突を持つ円盤両わきに横引き沈線。 以下横引きの沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 6/3	5-14G Ⅱ区	後期前葉 堀之内1式 古灰層

第210表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	部位	法	形状および文様	調整 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
							外面	内面		
400	深鉢	胴部	---	環状突起周わきから横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 6/2	5-14G I区 Ⅱ区	後期前葉 層之内1式 古段階
401	深鉢	胴部	---	横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 5/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	た-14G II区	後期前葉 層之内1式
402	深鉢	胴部	---	小突起下の3本一組の縦位沈線周わきに円 形刺突。そこから横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 8/3	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
403	深鉢	胴部	---	小突起下の4本一組の縦位沈線周わきに円 形刺突。そこから横引きの沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・赤褐色 2.5YR 5/4	褐色 5YR 7/6	5-14G Ⅱ区	後期前葉 層之内1式
404	深鉢	胴部	---	胴部に円孔を持つ円盤と横位隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	灰白色 10YR 8/1	た-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
405	深鉢	口縁部	---	折みを持つ部下隆帯下に横引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 5/3	褐灰色 10YR 6/1	5-14G I区	後期前葉 層之内1式 古段階
406	深鉢	胴部	---	8字状突起周わきに横引きの沈線。以下溝 巻き状沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい・褐色 7.5YR 7/3	5-14G I区	後期前葉 層之内1式 古段階
407	深鉢	胴部	---	部下隆帯下に円孔を持つ円盤。その下に環 状の沈線。その後、縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰白色 10YR 7/1	5-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
408	深鉢	胴部	---	8字状、隆帯の下に8字状沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 8/4	灰黄褐色 10YR 8/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
409	深鉢	胴部	---	中央に刺突を持つ円盤と隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	た-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
410	深鉢	胴部	---	中央に円窪を持つ円盤と隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	5-14G II区 Ⅱ区	後期前葉 層之内1式 古段階
411	深鉢	胴部	---	環状隆帯周わきから、横引き沈線。以下、 斜行沈線区に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	灰黄褐色 10YR 8/4	た-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
412	深鉢	胴部	---	横引き沈線区外に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	た-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
413	深鉢	胴部	---	斜行沈線区区内に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 5/5	灰黄褐色 10YR 6/2	つ-14G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
414	深鉢	胴部	---	斜行沈線区外に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
415	深鉢	胴部	---	斜行沈線区区内に円形刺突、外に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	褐色 7.5YR 6/6	た-14G II区	後期前葉 層之内1式
416	深鉢	胴部	---	斜行沈線区区内に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 4/1	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	5-13G II区	後期前葉 層之内1式
417	深鉢	胴部	---	沈線区区内に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・赤褐色 5YR 5/3	にぶい・褐色 5YR 6/4	5-14G I区	後期前葉 層之内1式 尖あり
418	深鉢	胴部	---	沈線区外に縦文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・赤褐色 5YR 5/4	にぶい・褐色 5YR 6/4	た-14G II区	後期前葉 層之内1式

第211表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	部 類	部 位	法 量	形状および文様	調 査 (内容)	色 調		出 土 位 置	備 考	
						外 面	内 面			
419	陶 器	胴部	--	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
420	陶 器	胴部	--	斜行沈線の組み合わせ。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	灰褐色 7.5YR 5/2	5-14G III区	後期前葉 層之内1式
421	陶 器	胴部	--	斜行沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	赭灰色 7.5YR 5/1	灰白色 2.5Y 7/2	5-14G III区	後期前葉 層之内1式
422	陶 器	胴部	--	斜行沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/6	にぶ・黄褐色 5YR 6/4	5-14G I区	後期前葉 層之内1式
423	陶 器	胴部	--	楕円状沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	にぶ・褐色 7.5YR 7/3	と-14G	後期前葉 層之内1式
424	陶 器	胴部	--	楕円状沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 6/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
425	陶 器	胴部	--	斜行沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	にぶ・黄褐色 10YR 5/3	5-14G 風刺木	後期前葉 層之内1式
426	陶 器	胴部	--	斜行沈線区画。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 5/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
427	陶 器	胴部	--	斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G IV区	後期前葉 層之内1式
428	陶 器	胴部	--	縦位沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	5-14G I区 風	後期前葉 層之内1式
429	陶 器	胴部	--	縦位沈線下に褐色点状の沈線。その後、縄 文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
430	陶 器	胴部	--	斜行沈線上に縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	褐色 7.5YR 7/6	5-14G II区 風	後期前葉 層之内1式
431	陶 器	胴部	--	斜行沈線。一部縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	淡黄褐色 10YR 8/3	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
432	陶 器	胴部	--	垂下沈線間に連続斜線。他斜行する沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 7/4	明褐色 7.5YR 7/2	と-14G II区	後期前葉 層之内1式
433	陶 器	胴部	--	褐色点状と斜行沈線。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶ・黄褐色 7.5YR 7/4	5-14G 風刺木	後期前葉 層之内1式
434	陶 器	胴部	--	垂下する蛇行沈線と縄文L.R.	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶ・褐色 7.5YR 7/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
435	陶 器	胴部	--	褐色点状の沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 10YR 8/4	5-14G II区	後期前葉 層之内1式
436	陶 器	胴部	--	褐色点状の沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	明褐色 10YR 3/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	と-14G III区	後期前葉 層之内1式
437	陶 器	口縁 部	--	端部に円形斜線。以下斜行沈線。	ヨコ方向のナ テ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 6/4	にぶ・褐色 7.5YR 5/4	と-14G III区	後期前葉 層之内1式

第212表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

種別 番号	器種	部位	法	量	器形および文様	調査 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
								外面	内面		
438	深鉢	口縁部	--	--	帯引き沈降下に逆漏斗状の沈積。その後、周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	灰紫色 2.5Y 7/2	せ-14G	後期前期 堀之内1式
439	深鉢	口縁部	--	--	端部帯引きの沈積。以下、斜行沈積区画内に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/2	深紫色 2.5YB/4	つ-14G II区	後期前期 堀之内1式 古漆器
440	深鉢	口縁部	--	--	端部小突起上に円形刺突と隆帯。以下溝帯と反隆帯を沈降でなぞり周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	浅黄褐色 10YR 8/4	灰白色 2.5Y 8/2	ち-14G II区	後期前期 堀之内1式 古漆器
441	深鉢	口縁部	--	--	端部に円形刺突と沈積。以下斜行沈積。その後、周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/4	浅黄褐色 10YR 8/4	ち-14G II区	後期前期 堀之内1式 古漆器
442	深鉢	胴部	--	--	孤状の隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶ-褐色 5YR 6/4	ち-14G I区	後期前期 堀之内1式 古漆器
443	深鉢	胴部	--	--	斜行沈積上に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	灰紫色 2.5YB/2	た-14G II区	後期前期 堀之内1式
444	深鉢	胴部	--	--	溝帯状の沈積。	ナテ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-褐色 7.5YR 7/3	灰白色 10YR 8/2	た-14G II区	後期前期 堀之内1式
445	深鉢	胴部	--	--	淡色帯状の沈積と斜行沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-褐色 7.5YR 5/4	褐灰色 10YR 4/1	た-14G II区	後期前期 堀之内1式
446	深鉢	胴部	--	--	帯引きの沈降下に多量の斜行沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	灰黄褐色 10YR 6/2	ち-14G II区	後期前期 堀之内1式
447	粗厚鉢	口縁部	--	--	半円状の跡みを持つ隆帯。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	褐灰色 10YR 5/1	つ-14G I区	後期前期 堀之内1式
448	浅鉢	口縁部	--	--	端部に8字状突起と平行区画沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	た-14G II区	後期前期 堀之内1式
449	深鉢	口縁部	--	--	8字状突起を持つ隆帯下に帯引きの沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-褐色 7.5YR 5/3	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	ち-14G II区	後期前期 堀之内2式
450	深鉢	口縁部	--	--	帯引きの沈降区画内に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	灰白色 2.5Y 8/1	ち-14G II区	後期前期 堀之内2式
451	深鉢	口縁部	--	--	端部に一部逆行する帯引きの沈積。以下斜行沈積上に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	灰黄褐色 10YR 5/2	ち-14G II区	後期前期 堀之内2式
452	深鉢	口縁部	--	--	平行区画の沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/2	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	た-14G II区	後期前期 堀之内2式
453	深鉢	胴部	--	--	斑本状沈積上に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	明褐灰色 7.5YR 7/2	た-14G II区	後期前期 堀之内2式
454	深鉢	胴部	--	--	跡みを持つ狭帯隆帯下に横位と斜行沈積。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	にぶ-黄褐色 10YR 7/2	にぶ-黄褐色 10YR 7/3	ち-14G II区 つ-14G I区	後期前期 堀之内2式
455	深鉢	胴部	--	--	幾何学的沈降区画内に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/5	灰白色 2.5Y 8/1	ち-14G I区	後期前期 堀之内2式
456	深鉢	胴部	--	--	幾何学的沈降区画内に周文しR。	ヨコ方向のナデ。	角閃石	にぶ-褐色 7.5YR 5/3	明褐灰色 7.5YR 7/2	た-14G II区	後期前期 堀之内2式

第213表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

探出 番号	器 種	部位	法 量	形状および文様	調 査 (内圖)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
457	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線区画。	ナナ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	灰白色 2.5Y 8/2	淡黄色 2.5Y 8/3	5-14G II区	後期前葉 層之内2式
458	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線区画。	ナナ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 5YR 4/3	にぶい褐色 5YR 6/3	5-14G I区	後期前葉 層之内2式
459	深 鉢	胴部	-	幾何学的沈線区画。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 7/3	5-14G I区	後期前葉 層之内2式
460	深 鉢	胴部	-	多条の縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/4	5-14G II区	後期前葉 層之内2式
461	深 鉢	胴部	-	刻みを持つ渦巻き状隆帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 7/1	5-14G II区	後期前葉 層之内2式
462	深 鉢	胴部	-	刻みを持つ斜行隆帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	褐色 7.5YR 4/1	5-14G I区	後期前葉 層之内2式
463	深 鉢	胴部	-	斜行沈線を縦線状に組み合わせる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	褐色 10YR 4/1	5-14G I区	後期前葉 層之内2式
464	深 鉢	胴部	-	斜行沈線を縦線状に組み合わせる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	褐色 7.5YR 4/3	にぶい褐色 7.5YR 5/4	5-14G I区	後期前葉 層之内2式
465	深 鉢	胴部	-	斜行沈線を縦線状に組み合わせる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	淡黄色 10YR 8/4	灰白色 10YR 8/4	5-14G II区	後期前葉 層之内2式
466	深 鉢	口縁部	-	突起わきに凹形刺突を囲む沈線。そのわきに凹形刺突。さらに横引きの沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/3	7-14G III区	後期前葉 層之内1式 古段階
467	深 鉢	口縁部	-	端部隆帯上またはその下の隆帯間を沈線でなぞる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 5YR 5/4	褐色 10YR 4/1	5-15G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
468	深 鉢	口縁部	-	ラッパ状の突起に弧状の沈線。その間わきに横引き沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-15G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
469	深 鉢	胴部	-	8字状突起上に沈線を持つ縦位隆帯。突起間わきに沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-15G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
470	深 鉢	口縁部	-	8字状突起。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	淡黄色 10YR 8/4	5-15G I区	後期前葉 層之内1式 古段階
471	深 鉢	胴部	-	凹形刺突を持つ凹帯から横位隆帯。その下も隆帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	灰黄色 10YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 6/3	5-15G I区	後期前葉 層之内1式 古段階
472	深 鉢	胴部	-	横位・縦位の隆帯を下を沈線でなぞる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	灰白色 10YR 6/2	5-15G II区	後期前葉 層之内1式 古段階
473	深 鉢	胴部	-	横位隆帯上下を沈線で区画。その上を縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	5-15G III区	後期前葉 層之内1式 古段階
474	深 鉢	口縁部	-	刻みを持つ横位隆帯下に斜行する沈線。	ナナ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	褐色 7.5YR 5/1	5-15G III区	後期前葉 層之内1式
475	深 鉢	胴部	-	渦巻き状沈線区画外に縦文L.R.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粘土 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	5-15G II区	後期前葉 層之内1式

第214表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

押印 番号	器種	部位	法 員	器形および文様	調査 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
476	深鉢	胴部	-	渦巻き状波線区面に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	にぶい褐色 7.5YR 7/4	た-15G II区	後期前 縄文之内1式
477	深鉢	胴部	-	渦巻きに連続する斜行波線。その後、縄文 L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい黄褐色 10YR 7/3	ち-15G II区	後期前 縄文之内1式
478	深鉢	胴部	-	渦巻き状の波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	ち-15G II区	後期前 縄文之内1式
479	深鉢	胴部	-	渦巻き状の波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	灰黄褐色 10YR 5/2	つ-15G III区	後期前 縄文之内1式
480	深鉢	口縁部	-	端部に横引き波線。重弧状の波線上に縄文 R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	灰黄色 2.5Y 7/2	ち-15G I区	後期前 縄文之内1式
481	深鉢	胴部	-	淵みを持つ部下隆帯に並走する波線と重弧 状の波線。その後、縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	灰黄褐色 10YR 5/2	た-15G II区	後期前 縄文之内1式
482	深鉢	胴部	-	多条の重弧状波線上に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 7.5YR 4/1	にぶい黄褐色 10YR 6/3	ち-15G I区	後期前 縄文之内1式
483	深鉢	胴部	-	矢印状隆帯をなぞるように並走する波線。 ナデ。	ナデ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶい黄褐色 10YR 7/4	ち-15G I区	後期前 縄文之内1式
484	深鉢	胴部	-	端部に円形刺突と横引き波線。底部下に 円孔。垂下隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	にぶい黄褐色 10YR 6/3	ち-16G	後期前 縄文之内1式
485	深鉢	胴部	-	斜行波線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 5YR 5/8	褐色 5YR 6/6	ち-17G	後期前 縄文之内1式
486	深鉢	胴部	-	垂下波線と矩形区面波線内に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰白色 10YR 8/1	ち-17G	後期前 縄文之内1式
487	深鉢	口縁部	-	口縁部下に横引きの波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	灰黄褐色 10YR 6/2	ち-17G	後期前 縄文之内1式
488	深鉢	胴部	-	斜行波線と渦巻き状の波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	た-17G I区	後期前 縄文之内1式
489	深鉢	胴部	-	横引き波線下に渦巻き状の波線。	不明。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	ち-17G	後期前 縄文之内1式
490	瓶 胴部	口縁部	-	口縁部下に横位の隆帯。円形刺突。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明褐色 7.5YR 7/2	灰白色 10YR 8/1	ち-17G	後期前
491	深鉢	口縁部	-	小突起下に弧状の隆帯が並び、そのお よびに円形刺突。さらに横引き波線。突起下 から垂下隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 8/1	灰白色 10YR 8/1	M-2 V区	後期前 縄文之内1式
492	深鉢	口縁部	-	V字状に並下する2条の淵みを持つ隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰黄色 2.5Y 7/2	M-2 V区	後期前 縄文之内1式
493	深鉢	胴部	-	数条の横引き波線の上に8字状突起。以下多 条の斜行波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 10YR 6/2	M-2 V区 I層	後期前 縄文之内1式
494	深鉢	胴部	-	渦巻き状と斜行波線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/3	灰黄褐色 10YR 5/2	M-2 III区	後期前 縄文之内1式

第215表 グリッド出土遺物一覧表 <縄文土器>

探出 番号	部 類	部 位	法 量	形状および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
495	陶 鉢	胴部	—	溝巻き状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 5/4	にぶ・褐色 7.5YR 6/4	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
496	陶 鉢	胴部	—	斜行沈線上に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄色 2.5Y 7/2	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
497	陶 鉢	胴部	—	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
498	陶 鉢	胴部	—	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 5/4	にぶ・褐色 7.5YR 5/4	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
499	陶 鉢	胴部	—	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
500	陶 鉢	胴部	—	多条の斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
501	陶 鉢	胴部	—	斜行隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内1式
502	陶 鉢	胴部	—	横引きの沈線間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 6/1	褐灰色 10YR 5/1	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内2式
503	陶 鉢	胴部	—	三角を基本とする沈線区間に縄文L。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶ・褐色 7.5YR 5/3	M-2 V区 1層	後期前葉 塚之内2式
504	陶 鉢	口縁 部	—	逆三角状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 5YR 5/4	灰褐色 5YR 6/2	M-2 田区 1層	後期前葉 塚之内2式
505	陶 鉢	口縁 部	—	横引きの沈線下に半円区画等の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	淡黄褐色 10YR 8/4	M-2 V区 1層	後期前葉 塚之内2式
506	陶 鉢	胴部	—	幾何学的沈線上に縄文。	不明。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-2 N区 1層	後期前葉 塚之内2式
507	陶 鉢	口縁 部	—	小突起下に円孔と2個一組の円形刺突。そこから横引き沈線とおみを持つ垂下隆帯。内面円形刺突。横引き沈線。縦位沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 N区 1層	後期前葉 塚之内1式
508	陶 鉢	口縁 部	—	突起下に円形刺突と横引き沈線。おみを持つ垂下隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 H区 1層	後期前葉 塚之内1式
509	陶 鉢	口縁 部	—	環状突起おみに横引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	M-3 N区 1層	後期前葉 塚之内1式
510	陶 鉢	口縁 部	—	小突起下の円形刺突をとりまく沈線。そこから横引き沈線とおみを持つ垂下隆帯。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子	灰黄褐色 10YR 6/2	褐灰色 10YR 6/1	M-3 I区 1層	後期前葉 塚之内1式
511	陶 鉢	口縁 部	—	小突起下に円形刺突。そこから横引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区 1層	後期前葉 塚之内1式
512	陶 鉢	口縁 部	—	刺突を持つ円盤と横引き沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 5/2	M-3 I区 1層	後期前葉 塚之内1式
513	陶 鉢	口縁 部	—	肩部に横引きの沈線。その下に横位隆帯をなせる沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	M-3 I区 1層	後期前葉 塚之内1式

第216表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

発掘 番号	器種	部位	注 記	形状および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位置	備 考
							外 面	内 面		
514	甕 鉢	口縁部	—	端部に横引きの沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 5/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
515	甕 鉢	口縁部	—	端部に横引きの沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	灰褐色 7.5YR 5/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
516	甕 鉢	口縁部	—	端部に横引きの沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	淡黄褐色 10YR 8/4	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
517	甕 鉢	口縁部	—	小突起下に円形刺突を囲む縦位沈線と罫目を 持つ浅下隆帯。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	黄灰色 7.5YR 4/1	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
518	甕 鉢	口縁部	—	端部円形刺突向きに横引き沈線。以下矩形 区画の沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・褐色 7.5YR 6/3	灰白色 10YR 8/1	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
519	甕 鉢	口縁部	—	端部に2条の横引き沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 5YR 5/4	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
520	甕 鉢	口縁部	—	端部に横位円形刺突が深み。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-3 I区	後期前葉 層之内1式
521	甕 鉢	胴部	—	横引き沈線下に斜行する沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	M-3 I区	後期前葉 層之内1式
522	甕 鉢	胴部	—	端部に横引き沈線。以下、縦位の沈線が深 に並ぶ。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
523	甕 鉢	胴部	—	円形刺突と沈線を持つ隆帯。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	明黄褐色 2.5YR 5/6	褐色 7.5YR 7/6	M-3	後期前葉 層之内1式
524	甕 鉢	口縁部	—	浅下隆帯先端に円形刺突。その下に横引き の沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
525	甕 鉢	胴部	—	罫めを持つ隆帯と沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	黄灰色 10YR 6/1	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
526	甕 鉢	胴部	—	環状隆帯両向きに横引き沈線。以下、環状 の沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
527	甕 鉢	胴部	—	環状隆帯内側に並ぶ沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	明黄褐色 5YR 5/6	にぶ・褐色 7.5YR 6/4	M-3 I区	後期前葉 層之内1式
528	甕 鉢	胴部	—	環状隆帯をなす沈線。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰白色 7.5YR 8/1	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
529	甕 鉢	胴部	—	円形刺突を持つ円盤から斜行隆帯。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	淡黄褐色 10YR 8/4	M-3 I区	後期前葉 層之内1式
530	甕 鉢	胴部	—	3条の横引き沈線。以下斜行沈線。その後、 縄文L.R。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
531	甕 鉢	胴部	—	罫めを持つ環状隆帯下に斜行沈線。その後、 縄文L.R。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	M-3 N区	後期前葉 層之内1式
532	甕 鉢	胴部	—	罫めを持つ環状隆帯下に矩形区画の沈線。 その後、縄文L.R。	ヨコ方向のナテ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 4/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 層之内1式

第217表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

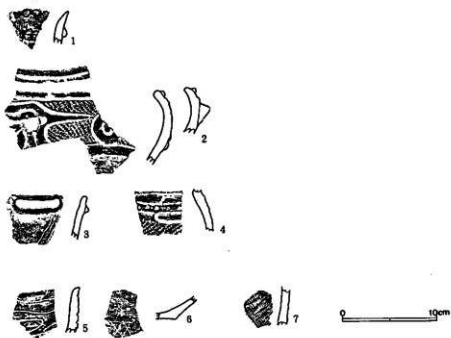
種類 番号	器 種	部位	状況	形状および文様	調査 (内図)	胎土		出土 位置	備考	
						外 面	内 面			
533	深鉢	胴部	— — —	弧状と斜行沈線間に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
534	深鉢	胴部	— — —	溝下沈線。その後、縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	暗灰色 10YR 5/1	灰黄褐色 10YR 5/2	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
535	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に横位沈線と縄文R.L.で埋め る。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	にぶい褐色 7.5YR 7/3	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
536	深鉢	胴部	— — —	数本の横引き沈線下に斜行沈線。その後、 縄文L.R.	斜 方 向 の ナ デ。	白色粒子 角閃石	暗灰色 7.5YR 4/1	にぶい黄褐色 10YR 7/3	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
537	深鉢	胴部	— — —	縦行沈線区画内に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 6/4	にぶい黄褐色 10YR 7/3	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
538	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線区画内に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
539	深鉢	胴部	— — —	円形刻突。斜行沈線と渦巻き状沈線輪文後、 縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
540	深鉢	胴部	— — —	横引き沈線下に彫行する沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 5YR 7/4	暗灰色 10YR 6/1	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
541	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に連続斜突。その後、縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 5YR 5/3	にぶい黄褐色 5YR 5/3	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
542	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
543	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 7/4	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
544	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰白色 10YR 8/1	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
545	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文L.R.	ナ 方 向 の ナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい黄褐色 10YR 6/4	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
546	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明暗灰色 7.5YR 7/2	灰白色 10YR 7/1	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
547	深鉢	胴部	— — —	弧状の沈線間に縄文L.R.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 7.5YR 8/2	M-3 B区	後期前葉 層之内1式
548	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	M-3	後期前葉 層之内1式
549	深鉢	胴部	— — —	斜行沈線間に縄文R.L.	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 5YR 6/4	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
550	深鉢	胴部	— — —	底面を持つ縁帯下に弧状の沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/4	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 1区	後期前葉 層之内1式
551	深鉢	胴部	— — —	横引き沈線下に弧状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 5YR 4/3	にぶい褐色 7.5YR 6/4	M-3 B区	後期前葉 層之内1式

第218表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

押出 番号	器種	部位	法 量	器形および文様	調 査 (内期)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
552	陶 鉢	胴部	— — —	横引き沈線下に斜行する沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 7/3	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
553	陶 鉢	胴部	— — —	横引きの沈線下に渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 5/3	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
554	陶 鉢	胴部	— — —	横引きと渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/2	にぶい黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
555	陶 鉢	胴部	— — —	横引きと斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 5/3	灰黄褐色 10YR 5/2	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
556	陶 鉢	胴部	— — —	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 6/6	にぶい褐色 7.5YR 6/3	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
557	陶 鉢	胴部	— — —	渦巻き状の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 6/4	にぶい褐色 5YR 6/4	M-3 I区	後期前葉 墓之内1式
558	陶 鉢	胴部	— — —	2本の環状沈線と器下沈線が連続。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい黄褐色 10YR 7/3	にぶい黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
559	陶 鉢	胴部	— — —	数本の弧状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	明赤褐色 2.5YR 5/6	明赤褐色 2.5YR 5/6	M-3 II区	後期前葉 墓之内1式
560	陶 鉢	胴部	— — —	弧状と斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 5/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
561	陶 鉢	胴部	— — —	弧状と斜行沈線。一部連続斜行。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 7/4	にぶい褐色 7.5YR 7/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
562	陶 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 6/2	にぶい褐色 5YR 6/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
563	陶 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。	ナナ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	明褐色 7.5YR 7/2	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
564	陶 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい褐色 7.5YR 6/4	M-3 I区	後期前葉 墓之内1式
565	陶 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 5YR 7/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
566	陶 鉢	胴部	— — —	斜行沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	灰白色 10YR 8/1	M-3 I区	後期前葉 墓之内1式
567	陶 鉢	胴部	— — —	斜行多量沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にぶい赤褐色 5YR 5/3	灰褐色 5YR 5/2	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
568	陶 鉢	胴部	— — —	多量の縦位沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	にぶい褐色 7.5YR 6/4	にぶい赤褐色 5YR 5/3	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
569	陶 鉢	胴部	— — —	多量の斜行沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	にぶい褐色 5YR 6/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式
570	陶 鉢	胴部	— — —	多量の縦位沈線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	にぶい褐色 5YR 7/4	M-3 N区	後期前葉 墓之内1式

第219表 グリッド出土遺物一覧表 (縄文土器)

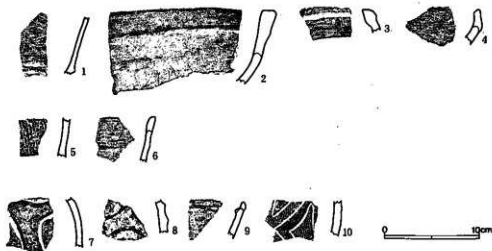
調査 番号	器 種	部 位	法 量	形状および文様	調 査 (内図)	色 調		出 土 位 置	備 考	
						外 面	内 面			
571	深 鉢	胴部	-- --	多条の縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・暗褐色 5YR 5/3	褐色 5YR 6/6	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
572	深 鉢	胴部	-- --	多条の縦位沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 5/2	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
573	深 鉢	胴部	-- --	多条の縦位沈線と弧状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
574	深 鉢	胴部	-- --	多条の斜行沈線。	不明。	白色粒子 角閃石	灰褐色 7.5YR 5/2	にぶい・灰色 7.5YR 7/3	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
575	粗 製 深 鉢	胴部	-- --	樽脚状工具による磨下沈線。	ナメ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	暗褐色 7.5YR 3/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
576	深 鉢	胴部	-- --	多条の縦斜状沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	褐色 7.5YR 7/6	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	M-3 1区	後期前遺 堀之内1式
577	浅 鉢	胴部	-- --	2条の横引き沈線下に弧状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	灰褐色 7.5YR 6/2	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
578	深 鉢	胴部	-- --	縦位沈線上に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	灰黄褐色 10YR 6/2	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
579	浅 鉢	口縁 部	-- --	弧状沈線を囲む弧状の沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・暗褐色 5YR 4/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	M-3 1区	後期前遺 堀之内1式
580	深 鉢	口縁 部	-- --	縦位、斜行状の沈線と円形刺突。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 6/4	にぶい・灰色 10YR 7/2	M-3 N区	後期前遺 堀之内1式
581	深 鉢	口縁 部	-- --	端部に横引き沈線。磨下する隆帯。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子	灰黄褐色 10YR 5/2	淡黄褐色 10YR 6/3	M-3 1区	後期前遺 堀之内1式
582	深 鉢	胴部	-- --	二段の縦状隆帯下を沈線でなぞり、その後 縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・暗褐色 5YR 5/3	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	M-4 J-3	後期前遺 堀之内1式
583	深 鉢	胴部	-- --	2条の縦状沈線内外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	M-4 J-3	後期前遺 堀之内1式
584	深 鉢	胴部	-- --	2条の縦状沈線内外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 7/3	にぶ・黄褐色 10YR 7/4	M-4 J-3	後期前遺 堀之内1式
585	深 鉢	胴部	-- --	弧状沈線外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶ・黄褐色 10YR 6/4	淡黄色 2.5Y 8/3	M-4 J-3	後期前遺 堀之内1式
586	深 鉢	胴部	-- --	弧状の沈線。その後、縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 7.5YR 6/4	にぶ・黄褐色 10YR 7/2	M-4 N区	後期前遺 堀之内1式
587	深 鉢	胴部	-- --	磨下する2条の沈線区内外に縄文L.L.	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	にぶい・褐色 5YR 5/3	にぶい・褐色 7.5YR 7/4	M-4 N区	後期前遺 堀之内1式
588	深 鉢	胴部	-- --	弧状隆帯下を沈線でなぞる。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	暗褐色 7.5YR 5/6	にぶい・灰色 7.5YR 6/4	M-4	後期前遺 堀之内1式
589	深 鉢	口縁 部	-- --	円形刺突を持つ円盤を貼付した突起下に斜 行沈線。	ヨコ方向のナ ズ。	白色粒子 角閃石	暗褐色 10YR 3/1	にぶ・黄褐色 10YR 6/3	M-4 J-3	後期前遺 堀之内1式



第184図 グリッド遺構出土土器 (1:4)

第220表 グリッド遺構出土遺物一覧表 <縄文土器>

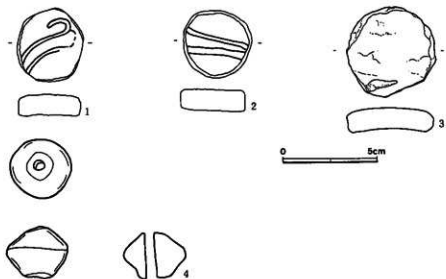
押領 番号	器 種	部位	法 量	器形および文様	調 整 (内面)	胎 土	色 調		出 土 位 置	備 考
							外 面	内 面		
1	深 鉢	口縁部	—	端部に横位の貼付帯帯上に跡象保証痕文。	ランダムなナ デ。	白色粒子	にふい褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 4/2	表掘	早期末? 倉庫跡
2	深 鉢	口縁部	—	キャリパー形で細部無文。口縁部は縄文R の上に横位褐色き状の薄沈線。菊光状の文 が付加される。	ヨコ方向のナ デ。	砂粒 角閃石	灰白色 7.5YR 6/2	褐色 7.5YR 5/1	表掘	中期後半 大木8 b 式
3	深 鉢	口縁部 胴部	—	端部に横位箱内区画の跡。以下、斜行比 線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	灰褐色 5YR 4/2	にふい褐色 5YR 6/3	5-14G II区	後期末
4	鉢	胴部	—	横位連続刺状の上下に工字文状の比線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にふい褐色 7.5YR 6/3	灰褐色 7.5YR 6/2	4-12G	晩期
5	深 鉢	口縁部 胴部	—	横位の沈線。	ヨコ方向のナ デ。	角閃石	灰褐色 7.5YR 4/2	褐色 7.5YR 6/6	6-14G	後期の期 東北系
6	?	胴部 底部	—	底部に格子目状の比線。	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子 角閃石	にふい褐色 5YR 7/3	褐色 7.5YR 4/3	5-14G	時期不明
7	深 鉢 ?	胴部	—	跡象保証痕文?	ヨコ方向のナ デ。	白色粒子	にふい褐色 7.5YR 6/1	にふい褐色 7.5YR 7/3	J-15	時期不明



第185図 滝沢赤色塗彩土器 (1 : 4)

第221表 赤色塗彩土器一覧表 (縄文土器)

標記 番号	器種	部位	法目	器形および文様	別名 (内面)	胎土	色調		出土 位置	備考
							外面	内面		
1	洗鉢	口縁部	--	平縁竹筥凹面による波帯。連続研究。	ナ方向のナズ。	白色粒子	にぶ黄褐色 10YR 7/2	褐灰色 10YR 4/1	4-17G Ⅱ区	外周赤色塗彩 後期前半 分析試料28
2	洗鉢	口縁部	--	口縁部若干肥厚。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	灰白色 10YR 7/1	褐灰色 10YR 5/1	表段	内周赤色塗彩 中期中間 分析試料29
3	洗鉢	口縁部	--	口縁部若干肥厚。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	にぶ黄褐色 5YR 6/4	褐灰色 10YR 6/1	J-9 北	内周赤色塗彩 中期中間 分析試料30
4	洗鉢	口縁部	--		ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 5YR 4/1	にぶ黄褐色 10YR 7/2	J-8 Ⅱ区	外面赤色塗彩 中期中-後葉 分析試料31
5	深鉢	胴部	--	縄文しR。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	灰褐色 7.5YR 5/2	J-9 付産	内周赤色塗彩 中期 分析試料32
6	深鉢	口縁部	--	ヨコ方向の彫板。	ヨコ方向の彫板。	白色粒子 角閃石	灰黄褐色 10YR 6/2	褐灰色 10YR 4/1	J-9 付産	内周赤色塗彩 中期 分析試料33
7	深鉢	胴部	--	頸縁起線下をなぞる。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	にぶ黄褐色 5YR 4/3	灰褐色 7.5YR 5/2	4-18G Ⅱ区	内周赤色塗彩 後期前半-前期 分析試料34
8	深鉢	胴部	--	頸縁起線。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	褐灰色 10YR 5/1	褐色 10YR 2/1	J-10G Ⅱ区	内周赤色塗彩 後期前半-前期 分析試料35
9	深鉢	口縁部	--	内面に縁付の隆帯。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	褐色 5YR 6/6	褐色 5YR 6/6	4-14G Ⅱ区	内周赤色塗彩 後期前半 分析試料36
10	深鉢	胴部	--	波帯区画内に縄文しR。	ヨコ方向のナズ。	白色粒子 角閃石	にぶ黄褐色 10YR 7/3	褐灰色 10YR 5/1	J-9 Ⅱ区	内周赤色塗彩 後期前半 分析試料37

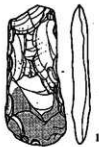


第186図 グリッド出土土製品 (1 : 4)

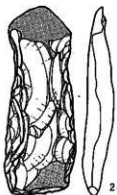
第222表 グリッド出土石器一覧表

押番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	押番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	打製石斧	頁岩	11.0	4.7	1.4	84.24	き-12G	31	磨製石斧	閃緑岩	13.5	5.7	2.6	317.54	た-15G 1区
2	打製石斧	頁岩	14.8	5.6	2.1	213.47	き-12G	32	打製石斧	安山岩	13.2	8.3	2.7	335.87	ち-10G 1区
3	打製石斧	安山岩	10.8	4.7	2.4	108.69	き-12G	33	打製石斧	安山岩	12.5	4.9	1.8	115.22	ち-11G 1区
4	打製石斧	安山岩	8.1	4.0	1.7	59.92	き-16G	34	打製石斧	安山岩	9.6	5.8	1.4	111.83	ち-11G 1区
5	打製石斧	頁岩	12.5	5.2	2.2	182.96	し-11G	35	打製石斧	安山岩	6.8	7.5	2.3	138.95	ち-13G 1区
6	磨製 器	ガラス質 黒色安山岩	7.4	4.5	1.8	47.39	し-11G	36	打製石斧	頁岩	5.3	6.0	1.4	58.39	ち-14G 1区
7	磨製 器	ヒスイ	2.2	1.9	0.7	5.19	し-13G	37	打製石斧	安山岩	11.3	7.1	1.1	53.78	ち-14G 1区 溝
8	打製石斧	安山岩	8.9	5.5	1.7	71.08	し-14G	38	打製石斧	頁岩	13.8	7.0	1.7	185.88	ち-15G 1区
9	打製石斧	安山岩	11.5	5.8	2.8	219.19	し-14G	39	磨製 器	ヒスイ	1.9	1.3	0.7	2.76	つ-10G 1区
10	打製石斧	頁岩	9.5	6.9	1.6	132.01	す-11G 1区	40	打製石斧	頁岩	7.4	4.5	1.2	33.58	つ-10G 1区
11	打製石斧	安山岩	7.7	5.0	1.6	82.87	す-11G 1区	41	打製石斧	頁岩	11.8	4.5	2.5	385.17	つ-10G 1区
12	打製石斧	安山岩	12.0	5.6	1.3	100.61	す-12G	42	打製石斧	安山岩	9.5	6.0	1.3	108.16	つ-10G 1区
13	打製石斧	頁岩	9.0	4.6	2.2	77.39	す-12G	43	打製石斧	安山岩	9.7	7.5	2.8	252.18	つ-10G 1区
14	打製石斧	安山岩	13.9	6.3	2.2	215.09	す-17G	44	打製石斧	頁岩	9.5	6.4	1.1	85.47	つ-15G
15	打製石斧	頁岩	8.8	6.5	2.4	140.83	せ-12G	45	石 棒	緑泥片岩	7.8	2.9	3.1	137.26	つ-14G 1区
16	打製石斧	頁岩	8.1	4.3	1.7	80.21	せ-12G	46	石 杖	ガラス質 黒色安山岩	8.0	6.2	2.5	123.88	て-10G 1区
17	打製石斧	頁岩	9.2	5.4	2.3	136.85	せ-12G	47	磨製石斧	蛇紋岩	9.7	6.8	4.2	460.6	て-11G 1区
18	打製石斧	安山岩	14.3	5.0	2.0	174.25	せ-12G	48	石 錘	安山岩	16.6	15.4	11.5	1,623.5	44-2
19	打製石斧	頁岩	10.5	4.8	1.8	77.99	そ-12G 1区	49	打製石斧	安山岩	11.3	7.7	2.5	210.19	M-3 1区
20	打製石斧	頁岩	5.2	5.0	1.7	74.29	そ-12G 1区	50	打製石斧	安山岩	11.3	7.8	2.3	271.84	M-3 1区
21	打製石斧	頁岩	10.6	5.6	1.3	90.05	た-11G 1区	51	打製石斧	安山岩	10.0	6.3	1.2	304.70	M-3 1区
22	打製石斧	安山岩	8.6	7.0	2.4	192.30	た-11G 1区	52	打製石斧	頁岩	11.3	4.8	2.7	147.45	表跡
23	石 棒	硬質頁岩	13.8	9.8	7.0	517.60	た-11G 1区	53	石 錘	硬質頁岩	6.1	7.6	1.0	30.09	表跡
24	石 匙	下島石	4.4	8.5	1.0	24.41	た-13G 1区	54	打製石斧	頁岩	12.7	5.7	3.4	259.94	表跡
25	打製石斧	安山岩	9.7	7.8	1.4	128.28	た-14G 1区	55	打製石斧	安山岩	20.5	8.1	3.7	672.7	表跡
26	打製石斧	安山岩	7.2	4.7	1.4	43.18	た-14G 1区	56	石 棒	緑石	6.6	5.7	5.7	412.13	て-11G
27	磨製石斧	緑泥片岩	14.1	4.7	2.7	256.78	た-16G 1区 No.2	57	石 棒	緑石	5.4	4.9	2.8	203.43	す-11G
28	磨製 器	頁岩	10.5	6.6	2.0	136.50	た-15G 1区	58	石 錘	安山岩	13.8	10.6	5.1	812.55	ち-14G
29	打製石斧	頁岩	11.5	5.3	1.4	109.07	た-15G 1区	59	石 匙	チャート	4.3	5.1	0.4	148.05	表跡
30	打製石斧	頁岩	14.0	6.0	2.4	178.34	た-15G 1区								

(単位cm, g)



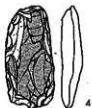
1



2



3



4

ホ-16グリッド

ホ-12グリッド



5



6

レ-11グリッド



7

レ-13グリッド

0 3cm



8



9

レ-14グリッド



10



12

ナ-12グリッド



13



14

ナ-17グリッド



11

ナ-11グリッド



15



16

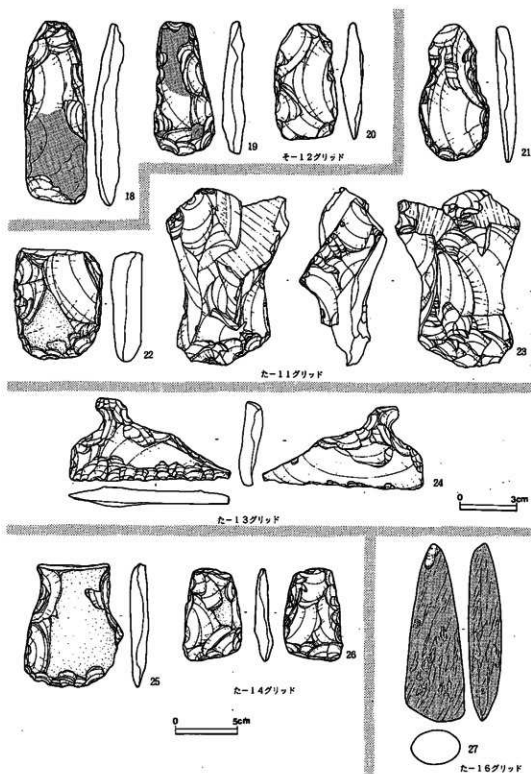
セ-12グリッド



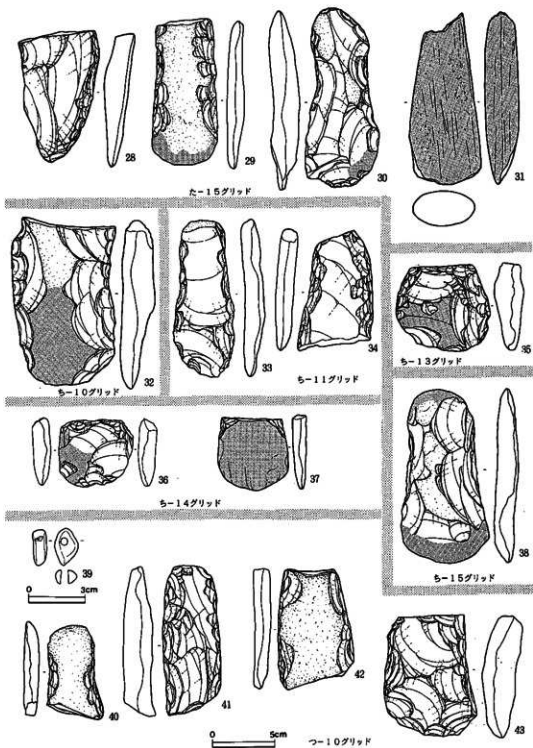
17

0 5cm

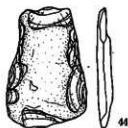
第187図 グリッド出土石器 (7のみ1:2,ほか1:3)



第188図 グリッド出土土器 (24のみ1:2, ほかに1:3)



第189図 グリッド出土石器 (39のみ1:2, ほか1:3)



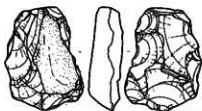
44

フ-15グリッド



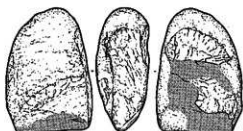
45

フ-14グリッド



46

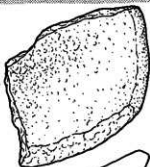
フ-10グリッド



47

0 5cm

フ-11グリッド



48

M-2号溝状遺構

0 10cm



49



50



51



52

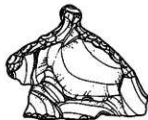


53

M-3号溝状遺構



54



53

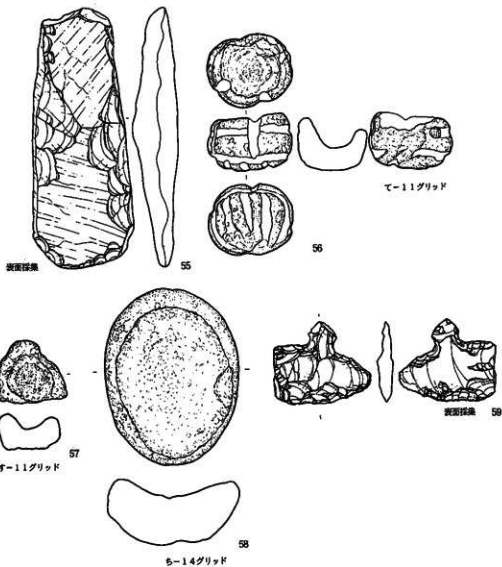
0 3cm

砂層



54

第190図 グリッド出土石器 (53のみ1:3, ほか1:2)



第191図 グリッド出土石器 (59のみ 1 : 2, ほか 1 : 3)

IV

総括

Ⅰ 縄文土器について

綿田弘実

(1) 縄文土器の時期区分

今回の調査で出土した縄文土器は、前期初頭から断続的に後期末葉にわたっている。それらの土器群を次のとおり10期に大別する。

- 滝沢Ⅰ期：前期初頭 塚田式、中道式などの縄文尖底土器
- 滝沢Ⅱ期：前期中葉 関山式、神ノ木式などの羽状縄文土器
- 滝沢Ⅲ期：前期後葉 踏磯 a・b・c 式、北白川下層Ⅱ式など
- 滝沢Ⅳ期：中期前葉 五領ヶ台Ⅱ式後半期の土器
- 滝沢Ⅴ期：中期中葉 勝坂式、阿玉台式、焼町土器
- 滝沢Ⅵ期：中期後葉 加曾利 EⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式、曾利式、唐草文系、佐久系土器など
- 滝沢Ⅶ期：後期初頭 称名寺式、三十稲場式、加曾利 EⅤ式など
- 滝沢Ⅷ期：後期前葉 堀之内 1・2 式
- 滝沢Ⅸ期：後期中葉 加曾利 B 1 式
- 滝沢Ⅹ期：後期末葉

以上の土器群は時期によって出土量に差が大きく、Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ期が主体を占める。これに次ぐのがⅢ・Ⅳ期で、他は少量である。本項ではこれらの土器群について、別項で考察されるⅣ期の土器群を除き、時期を迫って通観してみる。なお資料が充実しているⅦ・Ⅷ期については長野県の同時期の土器変遷を概観したのち、本遺跡出土土器を対比していくことにする。

(2) Ⅰ期の土器

この時期の遺構には J-1・2 号住居址があり、出土土器の大部分がこの 2 軒に属す。第 9・12 図はほとんどが 0 段多条を含む縄文 RL で、第 9 図 5・6 は条が縦走る。13・15 は条痕文である。16 は口縁部? に低い隆帯がめぐり、14 には沈線文を施す。グリッド出土の第 146 図 51・52 は口縁部の低隆帯の上下に鋸歯状に沈線文を施し、塚田式に比定できる。菱形羽状縄文の第 145 図 10、内面を条痕調整する 20、口縁部に肥厚部のある 34・48、撚糸文の 40・41 も前期初頭である。口唇部と隆帯に絡条体圧痕文を施す第 184 図 1 は本期に先行する可能性がある。

(3) II期の土器

第145・146図に示したグリッド出土資料のほか、遺構に混入したものが少数見られる。この時期に特徴的な文様として、関山II式にはコンパス文(第60図19、第145図2)、半截竹管による沈線文(第145図18、第146図55)、多段ループ文(同4・5・7・33)、正反の合(第145図17・44、第146図62)、組紐(第53図64)の縄文、神ノ木式には連続刺突文(第145図6、第53図65)、東の縄文(第146図83、第60図22)が見られる。縄文のみの資料は単節の異原体による横位羽状構成のものが多い。いずれも胎土に繊維を含む。

(4) III期の土器

D-9号土坑はこの時期の唯一の遺構である。第100図2は平縁の深鉢で、口縁部と頸部を爪形文列で横位区画し、この間に入組木葉文を描き円形刺突文を配す。胴下部には結節縄文RLを施す。1は波状口縁で同種の文様である。3は浅鉢と思われ、平縁に沿って爪形文列がめぐり、口頸部は無文である。これらは諸磯a式である。グリッド出土では、第147図123、第150図272~292・297~300、第151図325~327・331などは第100図1・2と同種の文様である。第149図225~227は木葉文である。原体には篩齒状工具と半截竹管がある。第146図86~90、第149図239~256、第150図259~265などは肋骨文で、曲線的に描かれる。第150図269は菱形肋骨文である。第147図118、第148図184・205、第149図228~236は鋸齒状文、第148図181~183・185~第149図223などは波状文である。浅鉢には第146図91・93、第147図128、第152図386などの外反口縁、第152図385・387などの内湾口縁がある。これらは直線的な肋骨文や対角線文をほとんど含まず、入組木葉文と波状文が多数を占め、諸磯a式でも新しい部分である。

諸磯b式は第146図101~第147図112、第150図293~296・301~第151図315・317~323・330・335などで、爪形文で文様を構成する。爪形文間に短沈線や円形刺突文を施すものが多い。第151図324は扁平の浅鉢であろう。これらは諸磯b式の古い部分に限定され、第150図293など口縁部をめぐり刻みを施す隆帯は、a式の第150図269、第151図331などと変化がない。

諸磯c式は少量で、半截竹管による集合沈線文を稜形状や斜位に充填する第148図176~180、ボタン状貼付文を施す同164がある。

第147図129~145、第148図161~163・165~175、第151図341~第152図381は諸磯a・b式の深鉢の縄文施文部分と思われ、RLが多い。結節や付加条も見られる。

第151図338~340は北白川下層IIc式で、諸磯b式に並行する。

以上のように、III期の土器群の大部分は諸磯a式の新しい部分からb式の古い部分に限られて近接する時期を交えず、まとまりの良い資料である。詳細な分析が望まれる。

(5) V期の土器

中期中葉は遺構が検出されず、散発的な出土状態を示す。勝坂式系では井戸尻編年の猪沢式(第164図483)、新道式(第53図78、第67図40、第161図325)、藤内II式のミズク把手(第141図4・8)、井戸尻式(第50図165、第53図81、第60図49、第157図148)がある。第53図67は阿玉台Ib式、66はII式である。焼町土器はやや多く、第53図109・110、第60図30～33・36・37、第141図5、第160図266・272、第161図326・327などがあり、時期差がある。

(6) VI期の土器

加曾利EⅠ～Ⅳ式に並行する時期であるが、本遺跡の資料は前半と後半では質量ともに大差がある。Ⅰ・Ⅱ式期は遺構がほとんど検出されず、小破片がグリッドや遺構に混在して出土している。一方Ⅲ・Ⅳ式期には住居址や土坑があり、にわかには活況を呈するようになる。

加曾利EⅠ・Ⅱ式並行と思われる土器を列挙すると、遺構では第53図91～第54図128、第60図39～48・50～58、第67図43～73、第71図32～41、第84図6～25、第101図63～71、グリッドでは第154図15～第155図73、第157図144～147・161・165、第160図258～265・273、第161図306～322・328～331、第163図415・428～433・436、第164図482などがある。これらには加曾利EⅠ式(第157図165、第161図312、第164図458)、Ⅱ式(第161図328、第163図415)、連弧文土器?(第101図63)、曾利Ⅰ式?(第164図460～462)、Ⅱ式(第60図51～53・57、第84図30・31、第155図72)、大木8b式と思われるもの(第184図2)が散見される。しかし圧倒的多数が地文に沈線を充填する土器であり、憶測ながら加曾利EⅡ式並行の部分が多いと思われる。断片的な資料から全体像を語り得ないが、口縁部に沈線を充填する楕円区画文と渦巻文を有し(第53図92、第54図123、第67図43・44など)、胴部を隆帯で縦区画するもの(第60図48、第84図13～16)、大柄の渦巻文を描くもの(第60図46、第67図51～53、第163図433・436など)が目立つ。縄文地文の例(第54図123・125～127、第67図69～73、第164図476～479)は少数である。第141図9～15は唐草文系土器の把手・突起で、これらが加曾利EⅡ式期を構成すると推測する。変化の趨勢としては胴部の区画文や意匠は沈線化し、地文は縦位や縞状から魚鱗状、蛇行など曲線的で多様なものになり、加曾利EⅢ式期に盛行する「佐久系土器」へ変遷する。

加曾利EⅢ式期の遺構には、J-10・13号住居址、D-59・86号土坑、Ⅳ式期にはJ-7(?)・8号住居址などがある。J-13号住居址出土の第83図56～58は口縁部文様帯を有する深鉢、59は沈線地文でいわゆる佐久系土器の両耳壺、第84図1・2は深鉢である。同32～34の条線文の鉢が伴う。これらは加曾利EⅢ式の古い段階にある。D-86号土坑出土の第102図91は同じ時期の佐久系深鉢である。J-10号住居址の第65図79は口縁部に刺突文を施し、胴上部にJ字状の渦巻文を

描く深鉢、同78は逆U字文を描く両耳壺、第65図80は深鉢の橋状把手で、これらは加曾利EⅢ式の新しい時期にある。D-59号土坑の第120図1は胴上部のJ字文間に缺状の文様を描き、同じ時期である。

J-8号住居址は加曾利EⅣ式に属し、逆U字文を描く深鉢(第50図164)、微隆帯文(第51図1-21)と沈線文(同22-35・37-第52図53)の土器を出土した。第53図86-90はこれに伴う唐草文系あるいは曾利式終末の土器である。J-7号住居址は遺物が少なく時期決定に迷う。このほか加曾利EⅣ式は他時期の住居址に混入した資料も少なくないが、グリッド出土量は中期の他時期の資料を上回り、加曾利EⅢ式がほとんど遺構から出土したと対照的である。列举すれば第154図3-13・30・31、第155図81-第156図111・114-124・126-133・135-143、第157図180-第158図235・238・239・241-第159図256、第160図275-279・281・282・284・286-305、第161図332-347、第162図366-369・380-386、第163図396-411・434・435・437・439、第164図489-493、第165図496-513などである。これらの文様には微隆帯と沈線の二者があり、口縁部の隆帯に付着して渦巻文やU字文を描くものが多い。また小破片では識別できないためか、この時期に多い微隆帯による縦位方形区画を交互に縄文充填する類が少ない。器種には、深鉢のほか両耳壺(第156図122-124、第159図256、第160図302、第163図405)、注口付浅鉢?(第141図17)が見られる。これらには後述のように、Ⅶ期に下るいわゆる加曾利EⅤ式が含まれている可能性を考慮する必要がある。また縄文のみの土器は前後の時期に及ぶ。

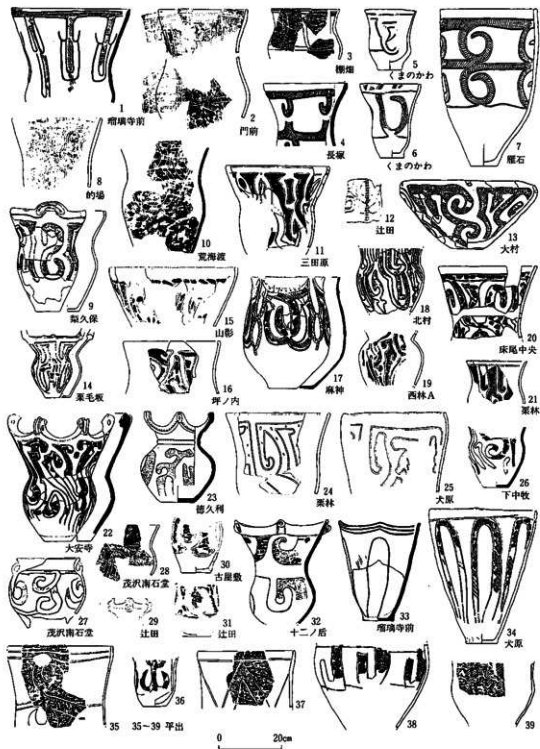
(7) 長野県の称名寺式、堀之内1・2式期土器群

本遺跡は、後期初頭(Ⅶ期)と前葉(Ⅷ期)の資料が充実している。このため、長野県の同時期の土器を第192-196図によって概観し、次項で本遺跡出土土器をそれに対比しながら考察してみたい。この時期の土器については多くの先行研究があり、本稿もそれに導かれて草したものであるが、報告書の総括という性格からそれらすべてを参考文献として掲載したものではない。また本来なら註をつけるべき部分も省略した。大方の御寛恕を請う次第である。

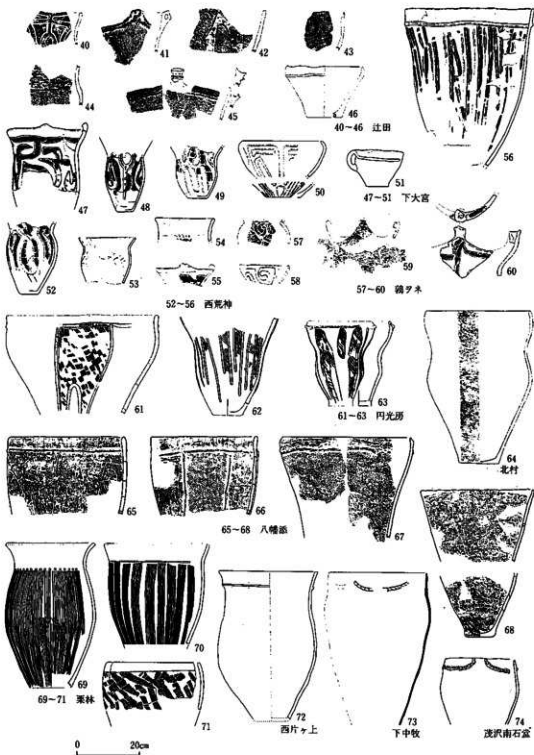
今日、称名寺式は7段階、堀之内1・2式はそれぞれ5段階程度の変遷が論じられている。長野県でも徐々に資料が増加しているが、いまだ関東地方の細分に対応させるだけの蓄積はない。そこでそれぞれ古・中・新3段階程度の区分とし、可能な部分については細分につとめる。

① 称名寺式期 (第192-193図)

第193図40の口縁部に窓枠状区画を有し、胴部に紡錘文を描く例は古段階前半に属し、県内では希少である。第192図1の不完全な帯縄文による懸垂文も古段階である。同2・3・5・6の1段の大柄なJ字文の下端を連結するもの、同4・7・35・38の2段のJ字文を横位連絡するものの諸例は古段階後半頃である。横位連絡のない2段J字文の類は、構成の不明瞭なものも含めると



第192図 長野県の称名寺式期土器 (1) (1:12, 7は1:16)



第193図 長野県の称名寺式期土器(2)(1:12)

資料が多い。第192図15・20・26、第193図49・52は主文様を縄文部、第192図13・14・21・24は無文部で表現する。第192図25と第193図53は地文を充填しない。第192図9～11・18・19・22などは2段J字文の変形であろう。これらのうち、文様の下端を開放したり（第192図10・14、第193図49・52）、主文様以外の意匠を充填して複雑な構成をとるもの（第192図18・19・22）は中段階でも新相を示し、刺突文を施したり地文を欠く第192図24・25、下部文様が分離した同26は新段階に下る。

第192図12、第193図48の2例は垂下隆帯を有し、中段階後半頃であろう。第193図47の胴部屈曲部で文様帯が分断された例は同時期である。第192図27・28は上部文様を省略して下部文様1帯構成の鉢形を呈し、新段階に属す。同23・32はいわゆる関沢類型の口縁部を有する。23は頸部無文の鉢形土器で、胴部に称名寺式の文様を描く。32は微隆帯で区画した無文部で中段連結の2段J字文を描く。関沢類型に近似する土器群から生成したものであろうが、大木10式の文様表現とも通ずる。第192図17は関沢類型の口縁部形態をとり、垂下隆帯を併せもつ。胴部文様は1段J字文の変化であろうが、同36の火の字状文とも通ずる複雑な脈絡が推定される。中段階を下らない時期であろう。このほか第193図59は文様が乱れるもの、同60は口唇上に縄文を施す西日本的な例である。いずれも新段階である。

いわゆる関沢類型には、胴下部に無文地のJ字文を隆帯で描く第192図30、沈線で描く同31、口縁部以下の文様を省略した同29などの例がある。関沢類型は東信でかなり資料が増えているが、上伊那地方など県南まで広く分布するらしい。

加曾利EⅣ式から変化したいわゆる加曾利EⅤ式は、関沢類型とともに出土例が増えている。第193図40に伴ったのはすべて加曾利EⅤ系土器（同41～46）で、本来の形態とほとんど変化がない。第192図1に伴った同33も口縁部に沈線が1条加わるのみである。第193図61～63と65～68は称名寺式を交えない住居址一括例である。61は縄文部の縦区画に別の意匠が加わり、63・65はU字文が変形している。62は隆帯を密に垂下する新たな例、66は口縁部が外反きみである。第192図34・37は、本来図柄であるU字文やV字文の狭い間隙に縄文を施して帯縄文化する。

これらに伴う粗製の土器は、比較的古い段階には第192図39、第193図64・67・68など、縦区画の全面縄文の土器が見られる。中段階後半以降には、第193図54・56・69・70などの条線土器、同72～74などの無文土器がある。同56・72の微隆帯、70の横沈線と条線文は加曾利EⅢ・Ⅳ式、74の押圧を施す隆帯は丘痕隆帯土器に由来する装飾で、中期末土器群から粗製土器が生成する過程が窺える。ただし後者については、網取式や三十稲場式との関連も考えられる。69の列点文や73の弧線文には、北陸など他地域の影響が想定される。

以上の土器群のうち、遺構共伴資料を段階別に列挙しておく。古段階では東部町辻田遺跡27号土坑（第193図40～46）、高森町瑞瑞寺前遺跡3号住居址（第192図1・33）、後出的な塩尻市平出

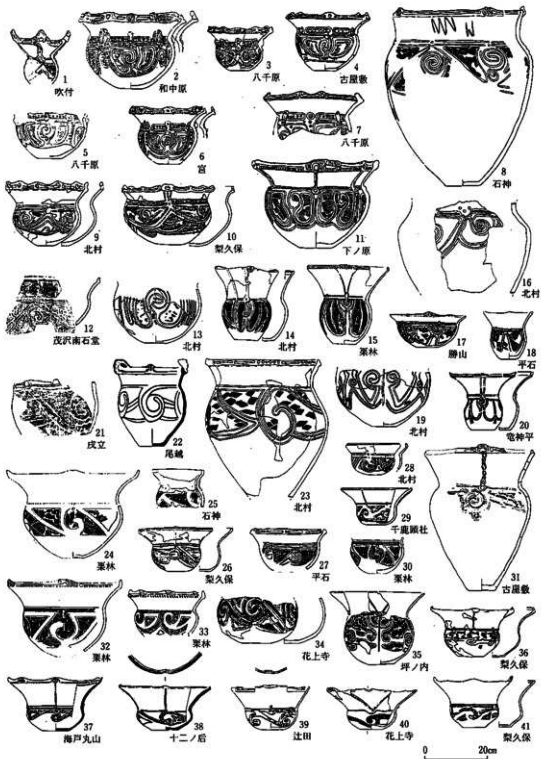
遺跡13・16・30トレンチJ-5号住居址(同35-39)がある。中段階の新しい部分では御代田町西荒神遺跡J-2号住居址(第193図53-56)、同下大宮遺跡D-5号土坑(同47-51)がある。新段階後半では佐久市鶴ヲネ遺跡2号住居址(同57-60)がある。称名寺式を伴わない戸倉町円光房遺跡1号住居址(同61-63)は古段階、高山村八幡添遺跡8号住居址(同65-68)、中野市菜林遺跡1号住居址(同69-71)はさらに新しい時期が想定される。

② 堀之内1・2式期 (第194-196図)

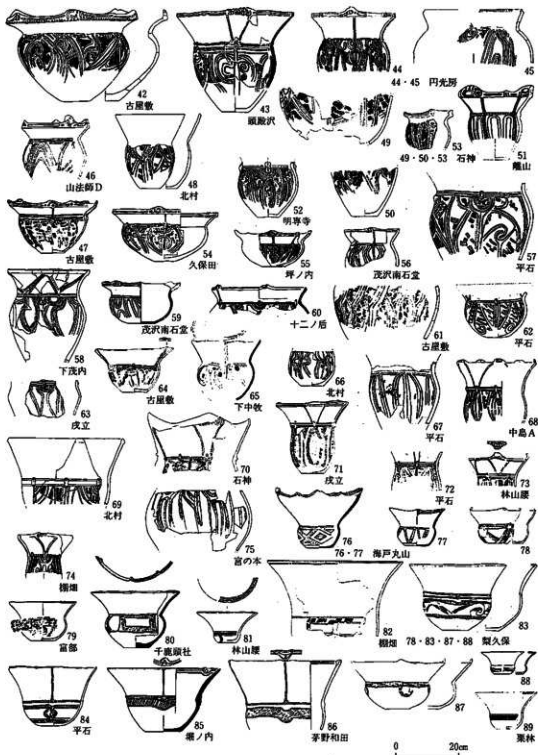
長野県の後期前葉土器群は堀之内式の範疇で把握されているが、関東地方と異なる地域色もち、土器組成に占める鉢形土器の多さは際立っている。この一群は外反する口縁部が無文、屈曲部の横位区画文から下胴部が文様帯となり、底部付近が無文となる点で共通する。口縁部文様帯は1式期には一般的に見られ、2式期には消失していく。これらは長野県では他の群と異なって堀之内1・2式のほぼ全般にわたって変遷するため、土器編年の機軸となる。この鉢形土器を胴部文様によって分類し、その消長をたどってみる。なお、以下の群別の呼称は固定的なものではなく、本稿に限った暫定的なものである。また本遺跡の継続時期に準じて、第196図に示した堀之内2式期の朝顔形深鉢については、後半段階の資料をほとんど省略した。

A群：上記の鉢形土器である。第194図は渦巻文を意匠の中心に配し、磨消縄文の文様下端を横位に連結する群である。1-20は渦巻文を両側から抱き込むように三角状の縄文部を配する意匠を描く(A1群)。2は装飾的な口縁部の小突起間に沈線がめぐり、屈曲部には列点帯と大きな貼付文を配す。4単位の主渦巻文の下端は弧状を呈し、隣接単位との接点に副渦巻文を配す。2-5は斉一的な個体である。これらの祖型となるのが1と思われ、有孔突起を備えた口縁部をめぐる沈線や口縁部の貼付文、下端を弧状に描く胴部文様が2に変化すると推定される。胴部文様下端に沈線を加えた6には主渦巻文下部が分離する兆候が見え、11に変化する。13に至ると集合沈線の表現になり、主渦巻文から縄文が欠落する。14-15は渦巻文が痕跡的になり、口縁部文様帯の萎縮・消失や、刻みを施す隆帯の付加など2式的な姿態に変化する。17-20などが終末的な段階であろう。一方、2の副渦巻文下に沈線を付加した9・10は連弧状の意匠になり、別の変遷過程があろうが、いまだ資料は少ない。

第194図21-34・37-41は隣接する渦巻文間を千鳥掛状に斜位に連結する(A2群)。意匠を無文部で表現する伝統が強く、時期が異なっても意匠の変化に乏しい特徴がある。沈線3条単位で意匠を描く例が少数あるが(22・23・27)、多条化する例はほとんど見られない。渦巻文下端が閉じた同21-23などが前出で、これが開放して三角形状の縄文部が遊離したように見える同24-28・30・32-34などに変化する。器形全体の扁平化に伴って萎縮した下胴部に、幅をせばめた渦巻文が帯状文風に描かれる同29・37-41などは、口縁部文様帯の消失と隆帯の付加から2式段階に位置するであろう。なお、A1・2群の胴部のみ有文浅鉢(第196図134-138)がある。



第194図 長野県の堀之内1・2式土器(1)(1:12)



第195図 長野県の堀之内1・2式期土器(2)(1:12)

第195図42～75は胴部文様に下端開放の懸垂文を描く（A3群）。頸部に隆帯を有するものが多く、これが胴部まで垂下して縦位区画線となったり（43・44・51・54～56・65・66）、屈曲部の8字状貼付文が文様の起点となる。42～67は数本単位の集合沈線、68～75は沈線間隔が均等な磨消縄文による文様表現で、前者はおおむね堀之内1式の新しい部分、後者は2式前半に伴うが、両者の境界は明確ではない。意匠の一部に渦巻文をもつ42・45・57・62、対弧状文の52・54～56・64・67・68・71・73、それらに斜行文などが加わるバリエーションがある。これらにはA1群の第194図11～15などの渦巻文下端開放によって発生するものもあろうが、東北南部から関東地方の懸垂文構成をとる土器群の影響を被った一群であろう。

第195図79～82・84～89は棒状や帯状の磨消縄文を配すものである（A4群）。これらは扁平な器形で口縁部文様帯を欠き、隆帯を付加する例が多いなど、A2群の第194図37～41と共通点が多い。胴部文様は堀之内2式段階の朝顔形深鉢から採用したものであろう。第195図76～78・83の三角文や菱形文の例も同様で、第194図35・36などととも、類型化する必要があるだろう。

B群：胴下部が屈曲して底部まで無文となり、外反する胴上半部が文様帯となる一群である（第196図90～106）。丈の高い深鉢（90・91・93・95・96）と鉢がある。堀之内1式新段階には千曲川下流域に米字状文を配する例（90・91）が見られ、2式前半に増加するらしい。文様意匠は、垂下隆帯を有する例（93～95）には曲線的なものが見られるが、菱形文、三角文、二段三角文など幾何学的な図形が選ばれ、渦巻文（96）は少ない。朝顔形深鉢と同じく、沈線を重ねるものから帯状の磨消縄文へと変化するだろう。

C群：朝顔形深鉢である。堀之内1式の新しい段階に現れ（第196図127～130）、2式に有文土器の主体を占める（同107～123・125）。関東地方で変遷が明らかになっているため特に言及しないが、A群等の編年位置の指標となる。

第194～196図に掲げた土器群のうち次に遺構共伴資料を示すが、共時性に疑問の余地もある。堀之内1式期では栗林遺跡5号住居址（15・24・32）、72号貯蔵穴（30・128）、円光房遺跡14号住居址（44・45・127）、小諸市石神遺跡J-3号住居址（49・50）、J-33号住居址（8・25・53）が新段階であろう。堀之内2式期では、東部町成立遺跡2号住居址（63・122）、望月町平石遺跡15号住居址（57・62）、16号住居址（72・107）、石神遺跡J-25号住居（70・99）、佐久町宮の本遺跡敷石住居址（75・113）、明科町北村遺跡SB102号住居址（19・25）、塩尻市御堂垣外遺跡3号住居址（104・110・111）の諸例が、多少時間幅はあるが古段階であろう。松本市林山腰遺跡4号住居址（73・81・117～119）が中段階、石神遺跡J-25号住居址（122～124）が新段階である。以上の堀之内1式の新しい部分から2式の古い部分の遺構共伴資料は、破片資料まで含めるとこれらが混在して出土した例が大半で、A群の編年を不明確にしている。また、1式の古い部分には遺構共伴例がない。



第196図 長野県の堀之内1・2式期土器(3)(1:12)

(8) VII期の土器

この時期の遺構としては、J-9号住居址？、D-8・45号土坑がある。J-9号住居址は異時期の土器がかなり混入しているが、第58図144・145、第60図64・65・68・69・71～第61図76・88～102は称名寺式中段階の新しい部分、第61図109～112は新段階である。関沢類型及び関連土器（第61図77～80）、微隆帯でJ字文？（第60図66・67、第61図103～106）を描く土器が伴う。J-11号住居址も同時期の土器（第71図57～第72図80）を比較的多く出土したが、他時期の土器が上回るため、土器からは時期を決めがたい。D-8号土坑に正位埋設されていた大型深鉢（第106図1）は粗製土器の部類で、口縁部に加曾利EIV式由来の隆帯がめぐり4カ所の小突起を有す。胴部には間隔を開けて条線文を施す。同4は口縁部が強く内屈し、5は屈曲部に隆帯がめぐり、頸部に楕円文を描く。D-45号土坑は垂下隆帯をもつ土器（第107図2）を出土し、いずれも称名寺式中段階の新しい部分に属す。

グリッド出土土器も帯縄文（第166図24～31・34～48、第167図68～73・81～85、第168図120～129、第169図144～158・160～170、第171図232～242・257～259・269など）が多く、地と図の幅が等しく複雑な意匠らしい。第166図9、第167図52～58、第168図103～113、第170図196・199・200などは刺突文地文、第169図177～192は地文を欠く。第166図4は口縁部が内屈し、列点を施す。第143図41は把手である。第142図20～26・28・30、第167図49～51・80・96～第168図102、第169図175・176などは関沢類型及び関連土器である。第22図228は口縁部に隆帯と突起をもつ無文の個体であるが、関沢類型の省略化された例であろう。第143図36～40は4単位の把手を有し注口部を備えた浅鉢で、内屈する肩部が文様帯となる。粗製土器には、押圧隆帯（第166図10～14、第168図137～139、第170図205～223、第171図244～246・256など）、隆帯（第168図116～119など）、条線文（第166図17～20、第171図248～255など）がある。三十稻場式（第24図9、第167図59、第168図136）はこの時期に伴うのであろう。

VII期の土器群は下大宮遺跡D-5号土坑、西荒神遺跡J-1・2号住居址に並行し、若干新しい部分を含む。ただし（6）で加曾利EIV式として扱った土器群のうち、口縁部に微隆帯を有し縄文を多用する一群が、ここで指摘した称名寺式より古い段階に存続している可能性がある。

(9) VIII期の土器

この時期の遺構にはJ-4～6号住居址、J-3号竪穴遺構、D-53～55・57・58号土坑がある。J-3号竪穴遺構出土土器のうち、第17図1～17の破片資料はVII期、19～22は新しい時期の混入であろうが、他は堀之内1式古段階に属すと見られる。第16図30、第17図31はA1・2群の鉢形土器で、口縁部の有孔突起間をめぐる沈線、ボタン状貼付文を組み合わせた類部の貼付文、

無文部表現の胴部文様は第194図1に共通する。23～28は同種の胴部破片で、18・31は沈線の片側が微隆帯状になる。32は把手と一体の短い注口部がつく壺形土器である。33は口縁部に小形の橋状把手がつく球形の土器で、微隆帯でJ字状の文様を描く。第194図1は佐久市吹付遺跡第2地点で、遺構共伴ではないものの称名寺式終末期の土器とともに出土した。また群馬県仁田遺跡08号住居址、内匠上之宿遺跡112号土坑、白倉遺跡A区97号住居址、埼玉県明戸東遺跡28号住居址、北塚屋遺跡SK107号土坑など類例として指摘できるが、いずれも称名寺式終末期の土器を伴う。このため30・31の編年位置が問題となるが、基本的に口縁部の沈線が全周すること、頸部の無文化、帯縄文とは異質な無文地による渦巻状の胴部横帯文の確立を指標として、本例を堀之内1式初頭と考えたい。ほかにこの時期の資料としては、第144図42～54、第173図92～97、第176図250～254、第177図285～294、第178図314～344、第179図396・397・399・400、第180図404～413・439～442、第181図466～473などがあり、浅鉢も見られる。

J-4～6号住居址は堀之内1式新段階から2式古段階である。J-4号住居址は遺物量が多い。第25図49～51、第26図52～65、第27図94～103などはA1群と思われ、沈線が多条化した新しい段階が多い。第21図218～220、第26図66～第28図183はA3群と思われ、沈線はより細く、さらに多条化している。この群は相当量2式段階と思われるが、1式と明確に分離できない。第29図184～198は1式段階のC群、第21図226、第23図233・234・238・239は2式段階である。第29図195は山ノ内町伊勢宮遺跡の第196図90と関連するかもしれない。第29図201・204・206は胴部無文の注口付浅鉢で、1式段階であろう。同207～213は押圧を施す隆帯がめぐる粗製土器であるが、第24図1～19が混入しているため、堀之内1式に伴うか否か明らかではない。J-6号住居址は遺物量が少ないが、第40図92のA3群、93のA1群？、第41図1～12のC群と無文粗製土器から構成され、J-4号とともに蓋が見られる。J-5号住居址には第35図69、第36図1・3のA群、第35図71・73、第36図4～20・22のB群（C群を含むか）、第36図24・75・76の注口土器がある。第35図70は東関東に多い縄文施文の粗製土器で、県内では石神遺跡J-33号住居址のほかに完形例は乏しい。第36図21は第176図220と同一個体で、類例を知らない。

D-53～55・57・58号土坑は上記の住居址と同時期と見られる。第118図1は堀之内1式段階のC群、第113図2はA1群、第113図1、第117図1・2はA3群である。D-56号土坑の第111図1は縦位の燃糸文で、後期前葉に属するならば三十稲場式か網取式に伴うものであろうか。

グリッド出土資料は住居址に準じた内容であるため、再述しない。これらのうち第174図111はA1群の中でも第192図5～7に共通し、住居址・土坑に先行する。第172図111は称名寺式後半から続く注口付浅鉢で、胴部が有文の例は少ない。第184図5は東北系土器であろうか。

VIII期の土器群全体で、B群またはC群の口縁部に隆帯がめぐるものが数点にすぎず、住居址資料には皆無である。このことから、土器群の下限は堀之内2式の古い段階と思われる。

(10) IX期の土器

第172図56は加曾利B1式の鉢形土器である。本例1点のみ。

(11) X期の土器

第172図1は波頂部がU字状の突起となり、直下に縦位の隆帯と刺突文がある。波形に沿って細めの沈線文を施す。第184図3は口縁部に隆帯の楕円文を配し、胴部に稲妻状?の沈線文を施す。2点のみである。

参考文献（下記文献以外の挿図の出典については省略した）

- 石井 寛他 1982 『シンポジウム堀之内式土器資料集』市川考古博物館
- 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究集録』5 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石井 寛他 1990 「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」『調査研究集録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』9 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1994 「牛ヶ谷遺跡・華蔵台南遺跡」『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書』XIV
- 上野佳也・西田泰民他 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』
- 小林真寿他 1995 『青山遺跡』佐久市教育委員会
- 小山岳夫・下平博行他 1994 『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 小山岳夫他 1995 『東莞神遺跡・西莞神遺跡・下大宮遺跡・関屋遺跡・中屋原遺跡』御代田町教育委員会
- 鈴木徳雄 1984 「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』東海大学考古学研究会
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統」『土曜考古』16
- 鈴木徳雄 1992 「縄紋後期注口土器の成立」『縄文時代』3
- 鈴木徳雄 1994 「諸磯a式の文様帯と施文域」『縄文時代』5
- 谷井 彰他 1982 『縄文中期土器群の再編』『研究紀要1982』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 境 隆・費田 明他 1992 『城之腰遺跡』御代田町教育委員会
- 境 隆・費田 明 1994 『下弥堂遺跡』御代田町教育委員会
- 境 隆他 1995 『川原田遺跡 図版編』御代田町教育委員会
- 長崎元広他 1974 『中部高地縄文土器集成第1集』中部高地縄文土器集成グループ
- 花岡 弘・綿田弘実他 1994 『石神遺跡』小諸市教育委員会
- 平林 彰・綿田弘実 1988 「縄文後期の土器」『長野県史考古資料編全1巻（4）遺構・遺物』
- 平林 彰他 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』
- 百瀬忠幸他 1991 「吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』長野県埋蔵文化財センター
- 綿田弘実 1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター—紀要』2
- 綿田弘実 1989 「長野県東北信地方の中期末葉縄文土器群」『第3回縄文セミナー—縄文中期の諸問題』
- 綿田弘実 1990 「長野県の縄文後期前葉の土器群」『第4回縄文セミナー—縄文後期の諸問題』



J-1住 (第9圖)



(第146圖)

(第145圖)

(第145圖)

グリッド

滝沢I期の土器 (1:6)



(第60圖)

(第145圖)

(第145圖)

(第146圖)

(第145圖)

正反の合

組紐

連続刺突文

束の縄文

(第145圖)

(第146圖)

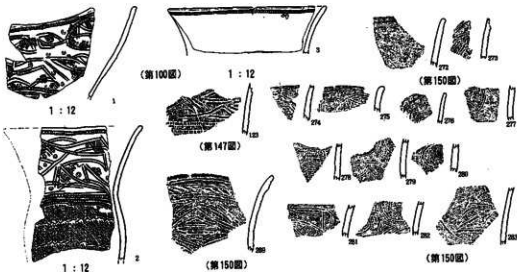
(第53圖)

(第145圖)

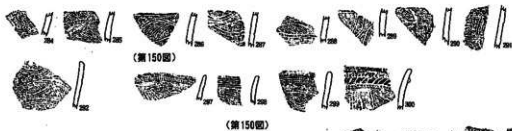
(第146圖)

(第60圖)

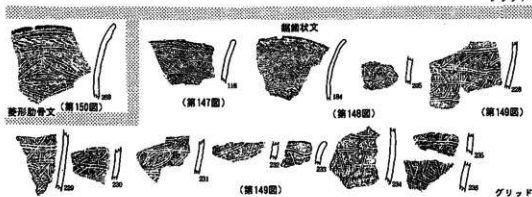
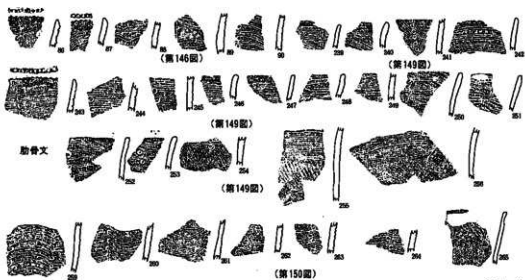
滝沢II期の土器 (1:6)



第197圖 滝沢III期の土器、器型a式 (1:6)



滝沢Ⅲ期の土器、踏破a式、入組木葉文



第198図 滝沢Ⅲ期の土器、踏破a式



(第148図)



(第148図)



(第149図)



(第149図)



(第149図)



(第149図)

グリッド 造状文



(第146図)

(第147図)

(第152図)

グリッド
遺跡

滝沢Ⅲ期の土器、甕破 a 式 (1 : 6)

1 : 12



(第146図)

(第146図)



(第146図)



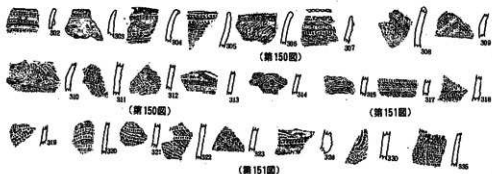
(第147図)



(第150図)

グリッド

第199図 滝沢Ⅲ期の土器、甕破 b 式 (1 : 6)



磁織b式



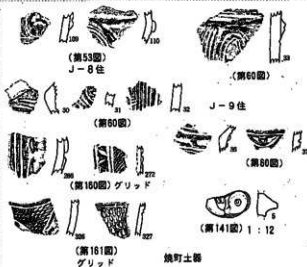
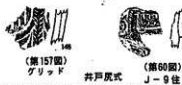
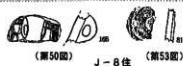
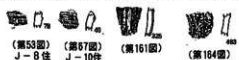
磁織c式



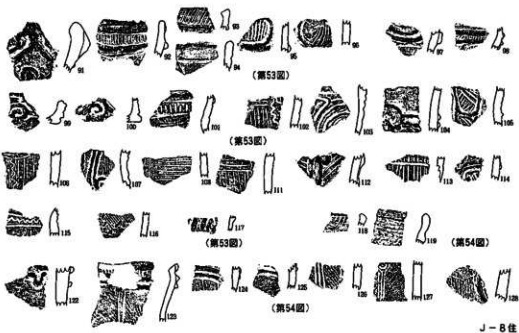
北白川下層IIc式

滝沢III期の土器 (1:6)

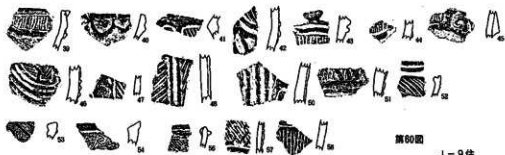
グリッド



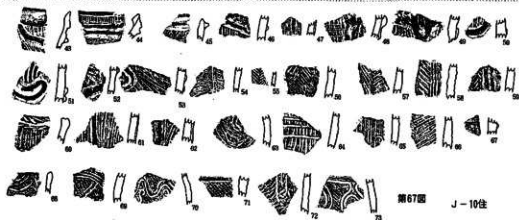
第200図 滝沢V期の土器 (1:6)



J-8住



J-9住



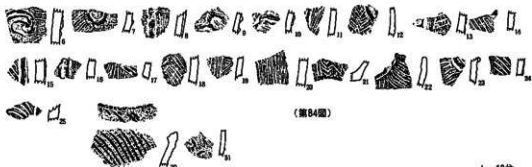
J-10住

第201図 滝沢VI期の土器、加曾利E I・II式並行(1:6)



(第71圖)

J-11住



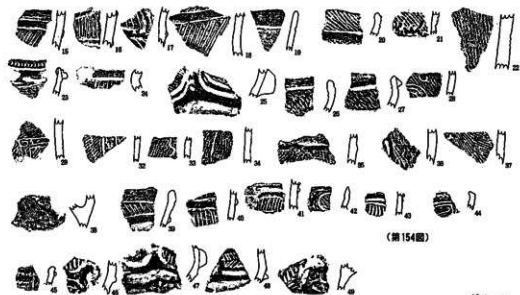
(第84圖)

J-13住



(第101圖)

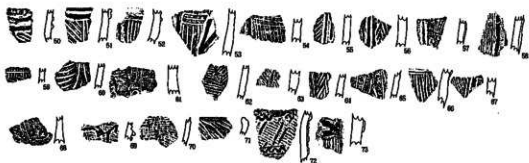
D-70土



(第154圖)

グリフ

第202圖 滝沢VI期の土器、加曾利E I・II式並行(1:6)



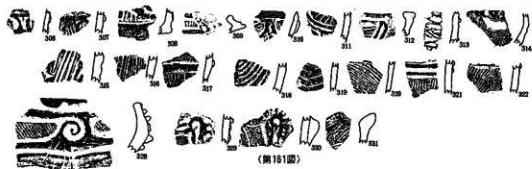
(第155圖)



(第157圖)



(第160圖)



(第181圖)



(第183圖)



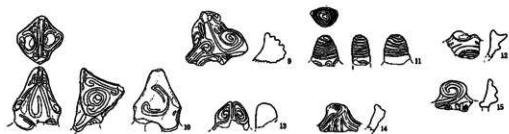
(第184圖)



大木8b式(第184圖)

グリッド

第203圖 滝沢VI期の土器、加曾利E I・II式並行(1:6)



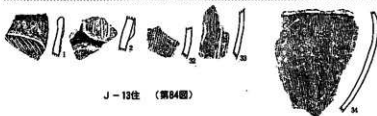
1 : 12

滝沢VI期の土器、加曾利E II式並行 (1 : 6)

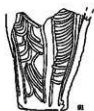
(第141圖) グリッフ



J-13住 (第83圖) 1 : 12



J-13住 (第84圖)



(第102圖) D-88土

1 : 12



J-10住 (第85圖) 1 : 12



(第120圖) D-58土

J-8住

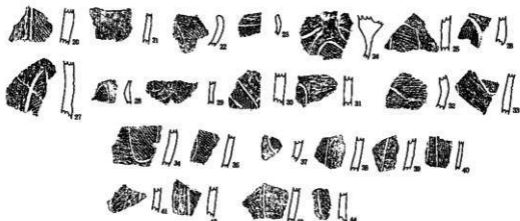


(第50圖)

1 : 12

(第51圖)

第204圖 滝沢VI期の土器、加曾利E III・IV式並行 (1 : 6)



(第51図)



(第52図)



(第53図)

J-8住

滝沢VI期の土器、加曾利E III・IV式並行 (1:6)



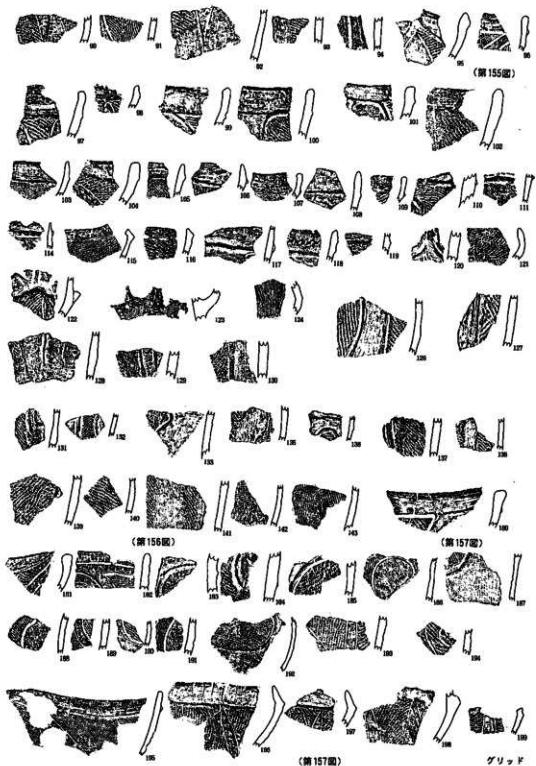
(第154図)



(第155図)

グリッド

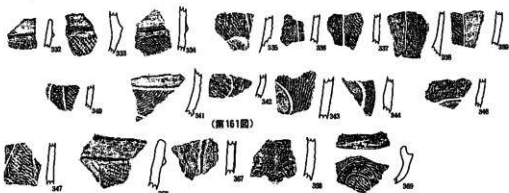
第205図 滝沢VI期の土器、加曾利E IV式 (1:6)



第206図 滝沢VI期の土器、加曾利EIV式 (1:6)



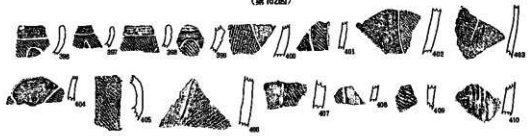
第207図 滝沢VI期の土器、加曾利EIV式 (1:6)



(第161図)



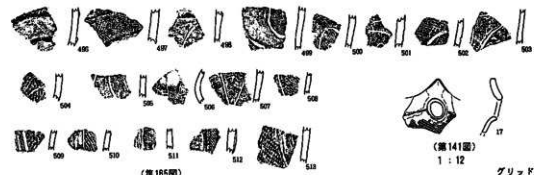
(第162図)



(第163図)



(第164図)



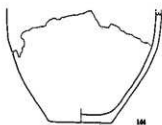
(第165図)



(第141図)
1 : 12

グリッド

第208図 滝沢VI期の土器、加曾利EIV式(1:6)



1 : 12

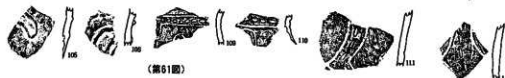


(第58圖)



(第60圖)

(第61圖)



(第61圖)

J-9住



(第71圖)



(第72圖)



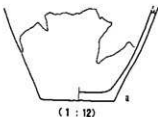
J-11住

第209図 滝沢VII期の土器 (1 : 6)



(1:12)

(第106圖) D-8±



(1:12)

(第107圖)

D-45±



(第108圖)



(第107圖)



(第108圖)

グリッド
帯縄文



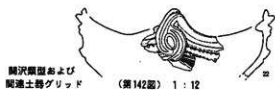
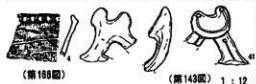
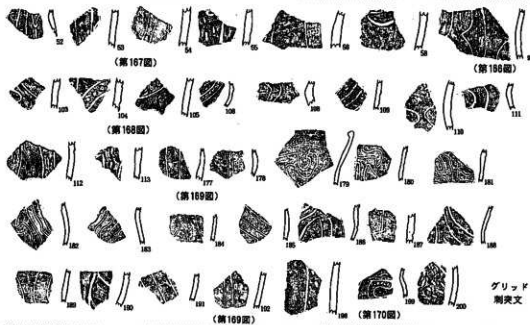
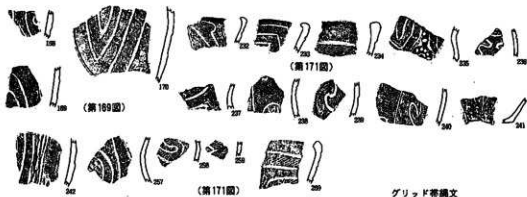
(第109圖)



(第109圖)

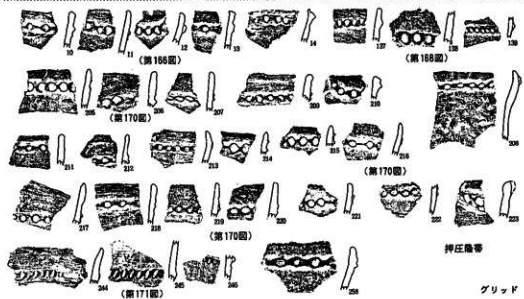
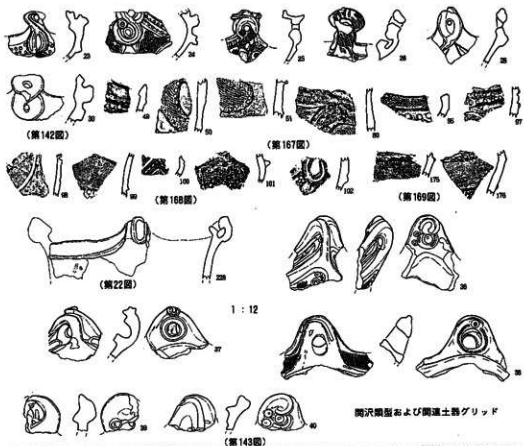


第210圖 滝沢VII期の土器 (1:6)



滝沢原型および
肥後土器グリッド

第211図 滝沢Ⅶ期の土器 (1 : 6)



第212図 滝沢VII期の土器 (1 : 6)



(第166図)

グリッド
隆帯



(第166図)

(第171図)



(第171図)

グリッド
条線文



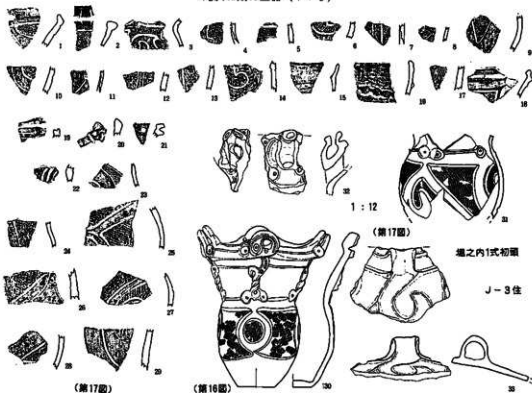
(第24図)

(第167図)

(第168図)

グリッド
三十番場式

滝沢VII期の土器 (1 : 6)



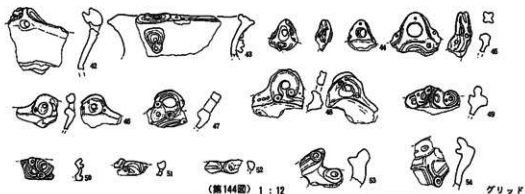
1 : 12

(第17図)

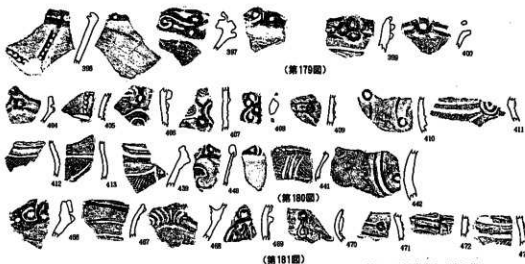
堀之内1式初瀬

J-3住

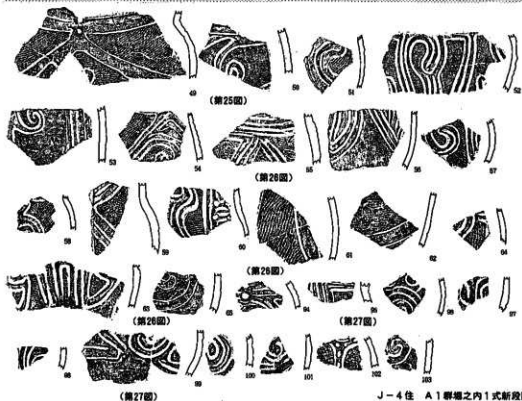
第213図 滝沢VII期の土器 (1 : 6)



第214図 滝沢中期の土器 (1 : 6)



グリッド場之内1式古段陶



J-4住 A1群場之内1式新段陶



第215図 滝沢Ⅶ期の土器(1:6)



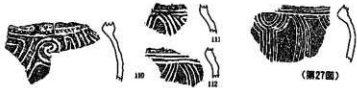
(第25圖)



(第26圖)



(第27圖)



(第27圖)



(第27圖)



(第28圖)



(第28圖)



(第28圖)

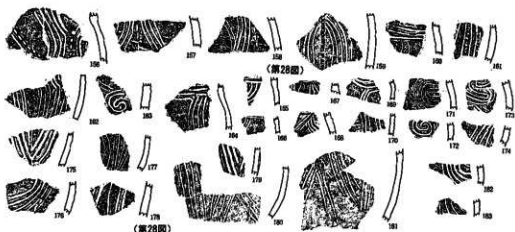


J-4住
(第21圖) 1:12



J-4住 A3群場之内1式新段降~2式古段降

第216圖 滝沢VIII期の土器 (1:6)



(第28圖)

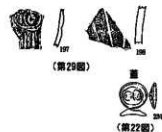
J-4住 A3群堀之内1式新段層(156-174)

2式古段層(175-183)



(第29圖)

J-4住 C群堀之内1式



(第29圖)



(第22圖)



(第21圖)

1:12



(第23圖)

J-4住 C群堀之内2式



J-4住 隆帯
堀之内1式?



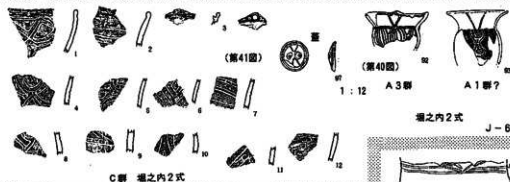
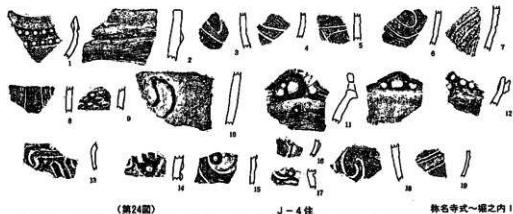
(第29圖)

J-4住 注口付浅鉢 堀之内1式

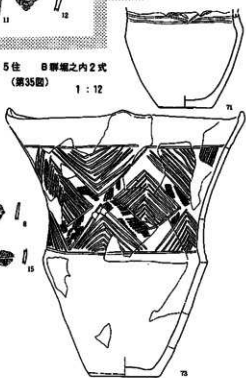


(第29圖)

第217圖 滝沢Ⅷ期の土器(1:6)



J-5住 B群堀之内2式 (第35圖) 1:12



第218圖 滝沢Ⅷ期の土器 (1:6)



第219図 滝沢Ⅷ期 堀之内1・2式、滝沢Ⅸ期 加曾利B1式、滝沢Ⅹ期の土器

2 御代田町滝沢遺跡出土の 縄文中期前葉（滝沢Ⅳ期）の土器について

師長野県埋蔵文化財センター
寺内 陸夫

はじめに

近年、御代田町および周辺地域での発掘調査により、縄文時代中期の土器資料が蓄積されてきた。中期中葉については、御代田町川原田遺跡や佐久市寄山遺跡群の調査によって、本地域独自の土器装飾の発展が明らかになりつつある。今回、滝沢遺跡からは、縄文中期前葉後半段階の資料が得られ、中期中葉の後沖式土器（寺内1996）や略称「焼町土器」（野村1984）が、どのような土器から成立したかを知る上で貴重な資料となろう。また、現在研究の進んでいない北信地域の土器である「深沢タイプ」が、他の土器を伴って出土した点、今後の研究に示唆を与えるであろう。

今回は、筆者の怠慢もあって充分な土器の検討ができていないため、1. 掲載された資料を再分類して私見を加え、2. 中期中葉の土器群成立前夜の特徴について触れ、3. 最後に「深沢タイプ」の位置づけについて、若干の検討を行うこととする。

（1） 時期の概略

今回の資料は、主にJ-12、J-14、J-15号住居から出土しており、その3軒が重複関係にある。しかし、J-14・15住については小破片のみであり、混入らしき土器も認められるため、J-12住の資料と同列に検討することは控えたい。

J-12住内での出土層位では、炉埋設土器と覆土中から出土した土器群に分離できる（第220図）。炉埋設土器（155）は、地文に縄文を施し、隆線による重三角形区画文の形状がくずれ、玉抱き三叉文も減少し形がくずれる段階。すなわち、五領ヶ台Ⅱ式後半の新しい段階に属する土器である。これを滝沢Ⅳ期1段階とする。覆土から出土している土器のうち、比較的住居中央の高位置から出土しているのが161と164である。これらが廃棄における時間差を示していると仮定すると、155よりも新しい時期に廃棄されたものととらえることができる。161については地文が失われ、隆線に沿って鋭角に密接施文された角押文（一部刺突）が見られるため、型式的にも新しく考えた方が好都合である。これを、滝沢Ⅳ期2段階とする。

J-14・15住の破片資料は、おおむね滝沢Ⅳ期1段階に含まれると考えられ、短期間のうちに住居が重複していることがわかる。

以上、滝沢遺跡では3軒の住居重複関係は認められたものの、必ずしも土器の型式変遷を補足

るもの

(4) 沈線による装飾が見られないもの

を基本に、隆線の特徴などの要素を加味した。

〈深鉢形土器〉

I a 2 類 いわゆる結節縄文を地文とし、単沈線で器面を飾る土器 (25ほか、49ほか、61)

25-33-37-52、29-32-53、71-73-75は接合し、34とは同一個体と考えられる。単沈線が垂下する隆線に沿って5条施されるなど、在地の土器の特徴を示している。

I b 1 類 単節縄文を地文とし、半載竹管による平行沈線文・半隆起線文で器面を飾る土器。

A (155、1~4、6~8) 1、4などの半載竹管は幅が狭く、施文も深くなされている。口唇部に波状突起、縄文帯を持ち、幅の狭い無文帯の下方に口頸部文様帯を配する。

B 2、3はAと同様の文様帯を持つが、他に比べ半載竹管の施文が浅くなり粗雑となる。

C (11、40、45、145) 破片資料の内、半載竹管の施文が浅いものをまとめた。

D (26、28、35、38、41、67、68) 沈線部分が比較的太くなる竹管を使用したものである。

E 44は施文が深いにも関わらず、竹管のハラの形状が器面にほとんど残らない土器である。

F (164、165、146~150、152、153) 「深沢タイプ」を一括した。半載竹管のハラの形状がきれいに残る深い平行沈線と、隆線を断面カマボコ形に整形している点が、他の土器と大きく異なる。

I c 1 類 (88、105) B字状文の部分に類似した装飾が見られるもの。無節縄文有り。

I b 2 類 単節縄文を地文とし、単沈線によって器面を飾るもの。

A (14~24、43、58、60、63、156) 在地の土器から関東地域の土器など幅広く含んでいる。156は東北地域の影響を受けた土器と考えられる (後述)。

B (42、135、136) 縄文、沈線文ともに施文が浅く、粗雑になる。

I b 1 + 2 類 単節縄文を地文とし、単沈線と平行沈線を併用するもの。

A (159、160) 文様帯の分帯や体部の装飾には半載竹管による平行沈線を用い、口縁部文様帯の縦位沈線のみが単沈線となる。

B 9は体部隆線脇の2条のみが平行沈線で、他は単沈線である。単沈線内は一気に施文しておらず、結節沈線化の兆しが見える。また、縄文も浅くわずかに残っているのみである。

I 3 類 縄文を地文に押し引き文を施すもの。56の沈線装飾の内の一部に角押文が見られる。

II 1 類 地文に縄文を持たず、半載竹管による平行沈線や半隆起線文で器面を飾る。

A (81、85、100、101) 比較的幅の狭い竹管を使用し、深い施文を行うもの。

B (87、92、95) 沈線部が太くなる平行沈線。断面がカマボコ状にならず、半載竹管ではなく先端の鋭利な棒状工具を2本一対にして施文した可能性もある。

C (13、17、76、103) 浅い施文にもかかわらず、半載竹管のハラの形状 (断面カマボコ形) が

明瞭に認められるもの。

II 2類 地文に縄文を持たず、単沈線で器面を飾る土器

- A (47, 83, 84, 90, 99, 128) 本地域に比較的多く見られる斜行する沈線を有する一群である。
- B (30, 125) 沈線が同一方向に密接施文されるのも本地域の特徴である。
- C 接合関係にある112-114-115, 118-123, 131-134と46, 111-124, 126, 127, 129, 132-134は同一個体である。単沈線で器面を充填して行く手法も本地域に多く見られる類型である。
- D その他の沈線装飾土器、77, 78, 79, 91, 102, 107, 107は鋭く深い沈線を使用しており、系統を異にする可能性がある。また、130に見られる沈線脇の斜方向からの連続刺突は関東地域につながりを持つ装飾である。

II 3類 縄文を持たず、押し引き文を主に、一部刺突に近い部分が残存している161と、本格的な角押文を施した104が認められる。

III 3類 縄文・沈線が施されず、隆線のみが器面を飾る (162)。

〈浅鉢形土器〉

口縁内側に角押文の施された109と、口唇部が内側に屈曲した110が認められる。

〈有孔鈎付土器〉

154 実測図では天地が逆になっている。小孔は鈎を付けた後、鈎の一部を削り取りながら、外から内に向かって穿孔されている。

(3) 施文技法に見られる問題点

前節で行ったJ-12住出土土器を装飾の描出技法の分類から、気づいた点をいくつか指摘しておきたい。

A. 縄文施文の問題

東信地域の五領ヶ台II式後半段階では、各遺跡ともに縄文施文土器と非縄文施文土器が存在し、いずれか一方が他を圧倒する状況は見られない。その意味では淹沢遺跡の状況も、この傾向からはずれるものではない。ただし、淹沢遺跡の前段階の資料が主体となる望月町上吹上遺跡・竹之城原遺跡や佐久市丸山遺跡に比べ、非縄文土器の割合が少ないように感じられる。これを時期差と考えるならば、五領ヶ台II式後半段階の中で、非縄文施文土器が多く見られる段階→縄文施文土器の増加する段階、に変化する可能性を持っている。いったん、増加傾向を見せる縄文施文土器は、この後の段階に激減し、J-12住161など非縄文施文土器がほとんどを占める段階へと移行する。

また、淹沢遺跡では非縄文施文土器のうち、46などに代表されるII 2類が少ない点も特徴といえるかも知れない。これらの土器は東信地域で中核をなす類型であり、五領ヶ台II式後半段階で盛行する。淹沢遺跡J-12住に一部平行する丸子町下久根遺跡では、縄文施文土器よりも非縄文

施土器が優位に立っている。これは、時期差ととらえるよりも、わずかな地域の隔たりによって、土器組成に差が現れると考えるべきであろう。

東信地域では、和田村細尾中道遺跡に見られるように重複する住居間で、全く異なる系統の土器が組成の主体を形成するなど、変化に富んでいる。これは頻繁に人や土器が動いていた証拠と考えられよう。そのため、現在の少ない発掘数では、1住居や1遺跡の個性に翻弄される可能性も持っている。細別時期での縄文施文の増減やII 2グループの小地域差についても、資料の増加を待って再検討すべきであり、今回は問題提起にとどめておきたい。

B. 半載竹管のハラとセ使用の問題

東信地域では半載竹管のセを利用した半沈線を執拗に施文する土器（II 2類）が多く見られる。これに対して、半載竹管のハラを利用した平行沈線や半隆起線も確実に伴出する。

後者には、半載竹管の幅の違い（選択する工具の違い）、竹管の切断割合の違い（工具の加工方法の違い）や施文の深さの違い（施文技法の違い）が認められる。これらは、偶然によるばらつきではなく、特定の類型との相関関係をおぼろげながらとらえることが可能である。

滝沢遺跡で半載竹管の違いと類型の違いが合致する典型的な例として、I b 1類A（155など）とI b 1類F（165など）を比べてみよう。

155は諏訪湖盆から本地域に多い類型であるが、その平行沈線は隆線に沿って径3.5mm前後の細い竹管を使用し、深くしっかりとした施文がなされ、シャープな印象を与える。これに対し、「深沢タイプ」（I b 1類F）では幅が7mm前後となり、前者に対して太い竹管を使用していることがわかる。また、竹管の肉厚が前者に比べてあるため、沈線部分がやや太くなり厚重な印象を与えている。滝沢遺跡では、これらの半載竹管が入れ替わって使用されることは皆無であり、竹管の選択から加工、施文にいたるまで各類型独自の規範が保持されていたものと考えられる。

このほかにも、各々特徴的な竹管の使い方をしている破片が存在しており、今後の検討が期待される。

C. 隆線の形状の問題

隆線の形状も、各々の系統を示し、また、時期の特徴を示すものが存在する。例えば、隆線を半載竹管のハラで断面カマボコ状に整形するのは主に「深沢タイプ」である。

また、155の隆線の一部に見られるように、隆線を指で押さえる際、断面が三角形になるようにした例が散見される。これは、次々期である阿玉台式1類に見られる隆線形状であり、この時期に部分的にでも出現していることは、沈線装飾の押し引き化現象とともに注目される点である。

（4） J-12住出土器の出自系統について

前節では、土器装飾を描く上での技法について、滝沢遺跡の特徴を見てきた。技法のみでもそ

の土器の系統をある程度は知ることができるが、ここでは、さらに技法以外の面も加味して、代表的な土器の出自系統を見ていく。中期前葉から中葉に移行する時期では、新たな装飾体系が確立するまでにさまざまな動きが見られる。それは、在地の土器装飾だけの変化にとどまらず、他地域の土器装飾の受容や排除となって現れてくる。そのため、この時期においては、系譜の追求は特に重要な課題の一つとなる。ただし、ここでは製作地の絞り込みは不問にする。

A. 千曲川流域に系統の多くを追える土器

① I b 1・2類A 159・160 (図221)

比較的なだらかな波状口縁を示し、口縁部文様帯に縦位の沈線文を配する。文様帯を分帯する沈線は、半截竹管のハラを利用した平行沈線を用い、先述の縦位沈線などには単沈線を用いる。千曲川流域に見られる類型である。三木村上赤塩例と比較すると口縁部文様帯内の縦位沈線がまばらとなり、体部の垂下文が蛇行を始めている。

② II 2グループC 46ほかの同一個体 (図221)

千曲川流域では、縄文を持たずに単沈線を多用する土器が多く見られる。46ほか (図221) に見られる沈線装飾は、そのほとんどが千曲川流域で盛んに用いられる装飾でもある。I-1文様帯上半の斜行沈線、I-2文様帯やII-1文様帯の縦位と横位の集合沈線、II文様帯の同心円状や陰線に沿って沈線を多用する手法、I-3文様帯に見られる間隔を置いて施文される縦位沈線など、いずれもが千曲川流域で一般的に見られる装飾である。前段階の資料として武石村上平遺跡があり、斜行沈線は本来、格子目になっていたことがわかる。また、和田村細尾中遺跡などには、体部の縦位と同心円状の集合沈線装飾の組み合わせが見られる。

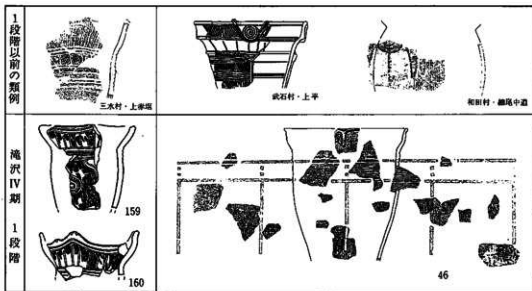
B. 諏訪湖盆地域から千曲川上流域に多く見られる土器

I b 1類A 155など (図221)

縄文を地文に持つ系統の内、口頸部文様帯の上部に縄文帯 (I-1文様帯) と幅の狭い無文帯を持ち、下部に重三角形 (半楕円形+三角形) 区画文 (I-2文様帯) を配する類型は、中部山岳地域に広く分布する。

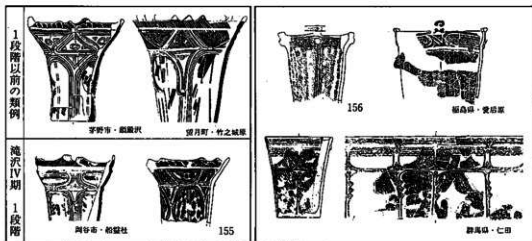
諏訪湖盆地域の岡谷市船雲社遺跡では、上述の縄文帯+幅狭無文帯を有する土器が多量に出土しており、周辺地域で系譜を追うことも可能である。一方、本地域でも、望月町竹之城原遺跡などに系譜を求めることができる。さらに、今回、滝沢遺跡では本類型の口縁部が比較的多く出土しており、半截竹管の使い方がきっちりとした土器 (1、155など) から粗雑なもの (2、3) へと、同一遺跡内で変遷を追うことができる。こうした点から、この類型については八ヶ岳の西側だけでなく、本地域でも定着していることがうかがえる。

図221に示した通り、滝沢遺跡例より古い段階の土器は、重三角形区画文がきっちりとしており、区画文内には玉抱き三叉文が配置されている。玉抱き三叉文が、区画の中央部から脱落して



I b 1 + 2 類 A 系列

II 2 類 C 系列



I b 1 類 A 系列

156に見られる装飾要素の系譜

第221図 滝沢遺跡J-12住出土土器の系統

いく傾向は、五領ヶ台式土器が解体していく段階の特徴の一つである。重三角区画文がくずれていく点とあわせ、滝沢遺跡例は本類型の新しい段階の土器であることがわかる。

C. 北信地域～新潟県境地域に出自を迫るもの

① I b 1 類 F

「深沢タイプ」の土器である(図223)。口縁部がやや外反する筒形165は、文様帯の分帯をはじめ、口縁部の長方形区画、体部の連結部を有する継ぎ手隆線とそれに沿う半隆起線など、本場の

「深沢タイプ」(図4、県史16)に類似している。

一方、164は文様帯の分帯方法、2本セットの隆線とそれが継ぎ手状の連結部を有する点、隆線脇に半隆起線が沿う点、半隆起線脇に連続刻み(刺突)が伴う点などは、「深沢タイプ」と共通する。しかし、大きくキャリバー形に広がる口縁部を持つ器形、あるいは継ぎ手状隆線の使い方は大きく異なっている。特に、体部継ぎ手状隆線が横方向に展開するあり方は、この地域で中期中葉段階に発展する「焼町土器」古段階(新巻段階)につながるものである。こうした点から、164は在地化の進みつつある「深沢タイプ」と言えそうである。ただし、胎土・色調は在地の土器と大きく異なっており、今後、その点を解明する必要があるだろう。

② III3類 162

本来、隆線が継ぎ手状に連結する特徴は、「深沢タイプ」に見られたものである。しかし、この時期「深沢タイプ」の主体的な地域では装飾がより充実して行く段階であり、⁽³⁾体部が無文化する例は阿玉台式を模倣した土器以外皆無と言ってよい。五領ヶ台式の終末段階から中期中葉の初期にかけて無文化傾向を示すのは、関東から長野県中・南部の特徴であり、この土器も、「深沢タイプ」として見るよりは、すでに在地化した土器と考えるべきであろう。

D. 東北地域などの影響を受けた土器 156 (図221)

口縁部文様帯に輪にならない円形の突起がつく点。突起間をつなぐ波状沈線や長軸が長い楕円形区画文、など個々の要素は東北地域の大木式土器に求めることが可能である。ただ、この土器自体が大木式そのものかと言うと、いくつかの問題が生じる。例えば口唇部に配された突起上端の円文+三叉文である。これは、日本海側の地域に多く見られる装飾要素と考えられる。また、体部の垂下沈線の脇に描かれた三叉文を伴う波状沈線も、東北地域に求めるよりも隣県の群馬県などに多くみられる。こう見てくると、この土器は大木式土器の装飾が東北地域から本地域に伝わってくる間に、中間地域の装飾要素を取り込みながら変化してきたものと言えよう。

E. 関東地域の影響を受けた土器 161

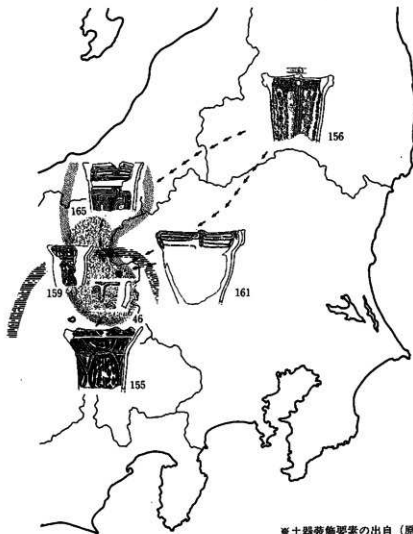
縄文を失い、刺突から押し引き文へ沈線系の装飾が変化する段階の土器で、他の土器よりは、新しい段階に属する。類例が少なく検討の余地が多いが、一応五領ヶ台式の直後、阿玉台式直前段階に平行する土器としておく。

本地域で主流を形成する類型では、中期前葉から中葉への移行期に押し引き文の発達は見起らない。隆線に沿う押し引き文の位置には、沈線が用いられ、押し引き文の効果を表現するものとしては、沈線内に連続刻みを施すのが一般的である。刺突が押し引き文へ変化していく流れは、本地域の主体となる系列からは逸脱しており、在地で製作されたとしても、関東地域の土器を意識しているものと考えられる。特に、口縁部文様帯の一部刺突化している工具の使い方は、五領ヶ台式か五領ヶ台式の強い影響を受けた土器にしか見られない刺突手法(J-12住では130にしか

ない)で、阿玉台式か勝坂式土器へ変化していく土器に多く見られる手法である。

また、口縁部文様帯を上下2段に分帯し、長軸の長い楕円区画文を配置する方法は、在地にないとは言えないが、阿玉台式か大木式に比較的多く見られるものであり、ここでの区画文の隆線の貼り付け手法を見るならば、より阿玉台式に近いと言えよう。

ただし問題も残る。貼付文そのもののあり方、器形、口縁部文様帯の下段に見られる隆線による渦巻き文や棒状貼付文の上端の渦巻き文の存在などは、直接関東地域に類例を見いだせない。類例の増加を待ちたい土器の一つである。



※土器裝飾要素の出自(原郷)を示すもので、製作地を示してはいない。

第222図 滝沢遺跡J-12住出土土器の出自概念図

以上、J-12住出土土器の主だった土器の系統を見て行く(図222)と、在地のもの、南信と関係あるもの、北信と関係あるもの、関東や東北と関係するものなど、多様な系統の土器が混在していることがわかる。次節では、こうした状況を中期中葉への流れの中でとらえてみたい。

(5) J-12住出土土器の多様性と中期中葉への変化

前節で見てきたように、J-12住に廃棄されていた土器には、多様な系統の土器が混在していることがわかる。こうした傾向は、縄文時代のどの時期にも見られることではあるが、この時期の、この地域の多様性の特徴としては、どれか一つの類型が土器組成の中で多数派を占めるのではなく、いくつかの類型が渾然としている点にある。また、いくつかの類型の分布域がほぼ重なることによって一つの型式(あるいは様式)を形成するのではなく、各々の類型がそれぞれ独自の分布域を持っている点である。

ここでは、多種多様な系統の同居が中期中葉へ移る段階で、どのような役割をはたしていくのを見ていきたい。

A. 在地系列の土器の変化と後沖式土器へ

五ヶ台II式後半段階で、東信地域の主体的な類型であったII 2類c(46など)の土器群は、滝沢遺跡では必ずしも主体とはなっていない。この間、斜格子目となることの多かった沈線装飾が、一方向への斜行沈線へと簡略化の道をたどる。滝沢遺跡の段階では施文も粗雑化し、このまま土器組成の主流から脱落しかねない状況であった。しかし、関東や北信地域の異系統の土器装飾の流入が増大する中期前葉終末をへて、中期中葉に入ると再び盛行する。特に、斜行沈線文は、阿玉台式土器や勝坂式土器の押し引き文に対する在地土器の特徴として、多用されるようになる。在地の伝統的な装飾要素が、後沖式土器の重要な装飾要素として引き継がれていくのである。

B. 無文化の波と阿玉台式土器の影響

縄文や多くの沈線装飾が脱落していく無文化の傾向は、土器型式群の交代する過渡期に現れる現象の一つとされる。滝沢遺跡J-12住においても、161・162といった土器でその傾向を見ることができる。

滝沢遺跡の次の段階である中期前葉末期には、さらにその傾向が強まる。と同時に関東地域の阿玉台式装飾要素が大挙流入し、在地化してゆく。例えば、口縁部文帯帯を上下2段に分帯すること、長軸方向に長い楕円区画文を持つこと、体部に左右対称となる蛇行懸垂文を持つこと、地文に指頭瓦痕文が見られること、などである。滝沢遺跡J-12住161の土器は、阿玉台式土器流入直前段階の土器であるが、すでに上記の要素のいくつかを見ることができる。

こうした関東系の装飾要素の流入によって、在地の土器は新たな装飾の基本形を生み出していく。阿玉台式に類似した文帯帯の分帯や懸垂文を採用していくのである。場合によっては、寄山

遺跡群例のように、阿玉台式土器を模倣しながら、在地製作の証として一部分に斜行沈線を描く土器さえも現れてくる。

こう見てくると、滝沢遺跡の土器群は、大きな土器装飾変化の大波を受ける直前の状況を示していることがわかる。

C. 「深沢タイプ」の影響と「焼町土器」への系譜

「深沢タイプ」は同じ千曲川水系の土器と言うこともあり、安定的に本地域に入り込んでいる。ただし、中期前葉から中葉への変動期においては、阿玉台式土器ほどの影響力を及ぼしてはいない。しかし、継ぎ手状の連結部を有する隆線と平行する半隆起線文は、164体部に見られるように、しだいに在地化してゆく。そして、阿玉台式土器や勝坂式土器の強い影響を受けた後沖式土器装飾が衰退する段階に至って、ようやく表舞台に登場することになる。それが「焼町土器」古（新巻）段階のことである。その下地は、滝沢遺跡164・162の土器にすでに見ることができる。

以上、多様な系統を含む滝沢遺跡J-12住の土器群が、その後、この地域の土器文化に、どのように継承されていくかを見てきた。そこには、斜格子目文から斜行沈線文につながる長い在地の伝統装飾を保ちながら、それぞれの時期によって、関東や北信地域の装飾を大幅に取り入れていく状況を見ることができる。滝沢J-12住の段階は、どの系統の土器が次代の主流につくかはっきりとしない混沌とした時期に入っていく段階の土器群であると言えよう。

(6) 「深沢タイプ」の土器について

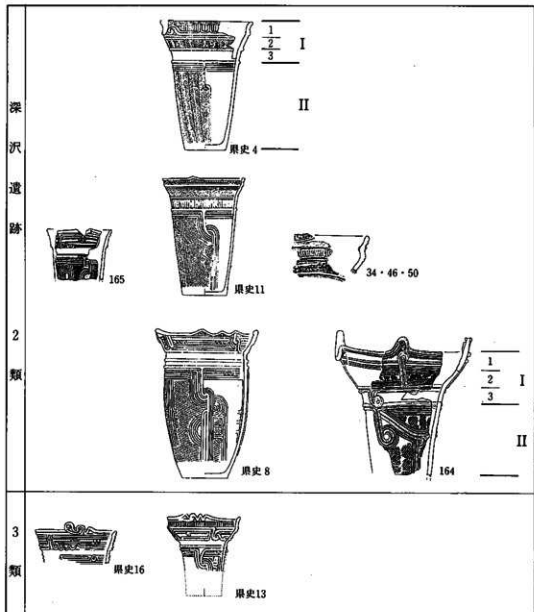
前節でも触れたように、今回、J-12住から他の土器群に伴って「深沢タイプ」が出土したことは、東信地域の中期中葉の「焼町土器」成立を考える上で重要な資料である。と同時に、これまで細別時期が定まっていなかっただけに、伴出した土器から、細別時期を押さえられる資料としても貴重である。

A. 研究略史

飯山市深沢遺跡出土の土器は発掘以来、北陸地域との関係を知る上で重要な資料と見られてきた。1982年、西沢隆治氏が3段階に分類され、中期初頭から中葉にかけて1類から3類へと変遷することを示した。このうち2類(図223)については「前葉から中葉にかけて……」の時期とされ、その後も良好な資料がなかったために、細別時期の確定には至っていない⁽⁵⁾。一方、新潟県側でも研究が進展し、高橋保氏は2類を抽出し仮称“深沢式土器”を提唱している。編年の位置については、「五領ヶ台直後型式及びその前後……」とされている。

B. 住居址出土土器の伴出関係

このように、「深沢タイプ」2類については編年の位置づけが確定されないまま今日に至っている。その理由のひとつは、前後関係を保証するような良好な資料が見つかっていない点にある。



第223図 深沢遺跡出土「深沢タイプ」の変遷と滝沢遺跡出土土器

そのため、現時点では千曲川中・上流域で、五領ヶ台式土器との伴出関係を押さえることが重要になってくる。しかし、竪穴住居における伴出例の存在する更埴市屋代遺跡群、東部町桜畑遺跡、小諸市東丸山遺跡などは整理途上であり、現状では、和田村細尾中道遺跡と今回報告の滝沢遺跡だけが周知の資料となる。それだけに、滝沢遺跡の資料が重要な意味を持つてくる。

まず、図220を参考に、滝沢遺跡J-12住出土土器の時期を再確認しておきたい。

この出土状況から、165は五領ヶ台Ⅱ式後半の新しい段階に平行し、本来の「深沢タイプ」が変形を受けた164や162は、それに後続する可能性がある。ただし、中期中葉に属する土器はほとんどなく、最も新しく考えても中期中葉直前段階の161平行期である。これらの出土状況は、「深沢タイプ」2類が中期中葉段階までは新しくならないことを示していよう。

C. 滝沢遺跡の「深沢タイプ」から想定される変遷観

次に、想定される「深沢タイプ」の変遷について若干触れておこう。第1点は、縄文の消失についてである。この点は、関東～中部高地にかけての動きと連動していると考えられる。165の腰部に縄文が残存している点は、伴出する土器の時期を見てもわかるように、縄文の施文される最後の時期と考えられ、この後に縄文が失われていくものと思われる。縄文の有無は判然としなが、深沢遺跡出土の県史番号16は165に後出するものである。

県史番号16が165より後出する理由は、「深沢タイプ」の変遷のポイントの第2点目にある。それは、隆線の2本対化への動きである。五領ヶ台Ⅱ式前半期には一本であった隆線に、平行沈線（半隆起線）が多数沿うようになり、次段階には隆線が2本平行して貼付される傾向が生まれ、3類に至る（寺内1986）。こうして見てみると、165は一本隆線であり、県史16より古い段階の土器であるといえよう。

さらに164に目を転じると、この土器は二本隆線となっている点では165より後出と考えられるが、縄文が残存しており、「深沢タイプ」3類よりは古い段階の土器であると言えよう。

D. 「深沢タイプ」についての課題

以上、滝沢遺跡J-12住出土の「深沢タイプ」2類について、編年の位置づけと一部の装飾要素について変遷過程を想定してみた。今後、数年以内に刊行されると予想される屋代遺跡群、桜畑遺跡、東丸山遺跡ほかの伴出状況を加味して、五領ヶ台式との平行関係を確立して行くことは可能であろう。一方、「深沢タイプ」の中心地と目されている飯山市周辺では、「深沢タイプ」の編年確立にとって良好な遺跡の調査が進んでいない。今後、「深沢タイプ」が一つの型式として成り立つのか否かを判断する上でも、飯山市周辺での調査に期待したい。

おわりに

滝沢遺跡の資料は、縄文時代中期前葉から中葉へ移行する時期のうち、本地域では空白となっていた中期前葉後半の新しい段階の資料を補填することとなった。その資料には、様々の系統の土器が含まれており、この時期のダイナミックな人間の動きを読みとることができよう。また、「深沢タイプ」については、細別時期区分確立への良好な資料を提供することができた。

今回、筆者の怠慢もあって土器図版が刷り上がる段階での執筆となってしまった。そのため、個々の土器を検討する段階で、接合関係の再発見や拓本の上下が誤っている土器を見いだしたも

の、訂正する時間を失ってしまった。編集担当者にはご迷惑をかける結果となり、申し訳ない限りである。

また、近年、中山真治氏や小林謙一氏によって五領ヶ台式土器の細分に対して新たな見解が発表されている。それらを検討する時間的な余裕がなく、「五領ヶ台式後半の新しい段階」と言ったあいまいな記述しかなかったことなど、反省すべき点は多々ある。今後、この資料を活かして千曲川流域の縄文時代中期前葉の特性を考えていきたい。

註

- (1) ここでは、五領ヶ台式終末(直後)段階までを縄文中期前葉、勝坂Ⅰ(沼沢)式段階からを中期中葉としている。そのため、北陸や関東地域の研究者と区分が異なっているため、注意されたい。
- (2) 飯山市・深沢遺跡で出土した土器群の通称である。西沢氏の分類した2類については、高橋氏が仮称“深沢式”を提唱している。ここでは、1類から3類を含めて考えるため、通称である“深沢タイプ”を使っていく。
- (3) 深沢遺跡や姥ヶ沢遺跡(中野市)で見られるように、2類から3類へ移る段階、縄文が失われた体部は沈線や陰刻によって埋められる。
- (4) 小林謙一・塚本師也両氏のご指示による。
- (5) 三上徹也氏(1988)、寺崎祐介氏(1990)、筆者などが時期的な位置づけについて触れている。

参考文献

- 飯山北高校地歴部 1966 『深沢遺跡』
- 高橋 保 1989 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』4号
- 谷藤保彦・関根慎二編 1995 『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 寺内隆夫 1986 「飯山市深沢遺跡出土土器について」『研究メモ』234(下総考古学研究会内部資料)
- 1991 「長野県上水内郡三木村・上赤塩遺跡出土の縄文中期土器について」『長野県考古学会誌』61/62合併号
- 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線—焼町土器の成立をどうとらえるか—」『長野県考古学会誌』67
- 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』
- 寺崎祐介 1990 「上越市西戸野花立遺跡の中期縄文土器」『新潟考古学談話会会報』6号
- 西沢隆治 1982 「深沢遺跡」『長野県史』考古資料編 全1巻(2)
- 野村一寿 1984 「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類別の位置づけ」『中部高地の考古学』Ⅲ
- 三上徹也 1988 「中期中葉Ⅰ期」『長野県史』全1巻(4)

3 滝沢遺跡の縄文遺構について

小山 岳夫

今回、滝沢遺跡では南半分以上と北部西端が調査され、多数の縄文時代遺構・遺物が検出された。これらを第1節の綿田弘実氏の分類に基づき、時期別に概観してみよう。

滝沢Ⅰ期 縄文時代前期初頭

南端部から当該期の集落跡の一端が姿をあらわした。竪穴住居の検出数は2軒で、さほど大きな広がりを持つ集落とは思えない。J-1号住居址は不整な楕円形プランが想定され、J-2号住居址は長方形プランであった。出土遺物は微量ながら縄文前期初頭の「塚田式」⁽¹⁾に当てはまるものであった。

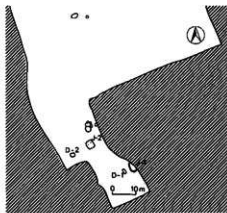
塩野西遺跡群では当該期の集落や遺物が塚田・下弥堂遺跡のほか川原田・中屋際遺跡などで数例見られる。このうち、塚田遺跡では12軒、下弥堂遺跡では14軒の竪穴住居址が検出されており、それぞれに数時期の変遷が想定されるものの、塩野西遺跡群内で当該期の一定期間に核をなした集落であったことが想定された。川原田遺跡では1軒しか検出されなかった。繁栄を誇った中期中葉～後葉の竪穴住居群に破壊され消失した痕跡もみられないことから、もともと縄文前期初頭の生活痕跡の薄い場であったようだ。中屋際遺跡は明瞭な遺構が検出されず遺物が出土したにとどまる。以上、滝沢遺跡を含めた3遺跡は塚田・下弥堂など核をなす遺跡の周辺集落であったとも考えられる。

滝沢Ⅱ期 縄文時代前期中葉

この時期の土器が遺跡内に散在する程度で遺構は確認されなかった。縄文中期～後期集落の中核と考えられる未調査部に小規模集落の存在が想定される。

滝沢Ⅲ期 縄文時代前期後葉

諸磯a・b式土器が集中的に出土する地点(第135図)があり、そこから唯一の時期確実なD-9号土坑が検出されている。仮に集中区が土器廃棄場であれば、集落の主体は北方の未調査区にあったと考えられる。



第224図 滝沢遺跡南部の遺構配置

滝沢Ⅳ期 中期前葉

重複関係をもつ当該期の竪穴住居址が3軒検出された。検出地点は中期～後期の複合集落の南西端にあたると思われる。同時期の住居は更に東に伸びることが確実と考えるが、この時期の集落は前期からしだいに大きくなっていくことが指摘されており、この集落もそれなりの広がりをもつことが予想される。

滝沢Ⅴ期 中期中葉

遺物が散布する程度で、遺構は検出されなかった。未調査区に若干の遺構が存在すると思われる。

滝沢Ⅵ期 中期後葉

加曾利EⅠ～Ⅳ式並行までの時期である。加曾利EⅠ・Ⅱ式並行段階は少量の土器の出土は認められるものの、遺構は検出されなかった。遺物量から推して北側未調査区に小規模集落の存在が予想される。

加曾利EⅢ・Ⅳ式並行期になると竪穴住居址等遺構が検出されるほか、遺物の出土量もかなり多くなる。今回の調査では集落の西から南にかけての縁辺部が明らかにされたにすぎないため、集落の全容については推し量るべくもないが、北側の未調査区には相当規模の集落の展開が予想される。

加曾利EⅢ式並行期の遺構ではJ-13号住居址とJ-10号住居址などがある。J-13はEⅢ式でも古い段階で、今回の発掘区では最も北西の隅から検出された。ここは中期～後期集落跡の立地する台地の南西端にあたると思われ、ここから北東に向けて相当規模の集落展開が予想される。なお、J-13の炉には南西側に石棒が立てられており、こういった類例は小諸市郷土遺跡ほか東信の中期後半の遺跡で増加している。本発掘調査では最古の敷石住居J-10号住居址は集落跡範囲の南東部にあたると考えられる。J-10は構築された地山南部が流出しているため、柄鏡形になるか否かを明らかにできなかった。また、敷石に用いた石材をいずこから搬入したのかも今後の課題として残った。

次期の加曾利EⅣ式並行期の遺構はJ-7・8号住居址がある。ともに集落跡範囲の南東部にあり、近接している。J-7号住居址は石囲炉と柱穴の残骸のみが検出されたため、石を敷いたか否かについてはわからない。また、出土遺物も炉内から微量検出されたのみであるため、時期判定も疑問符付で下さざるを得ない状況である。J-8号住居址は敷石住居址である。後世の破壊を受けているため、敷石の遺存状態は良くないが、柄鏡形にはならないようだ。

滝沢Ⅶ期 後期初頭

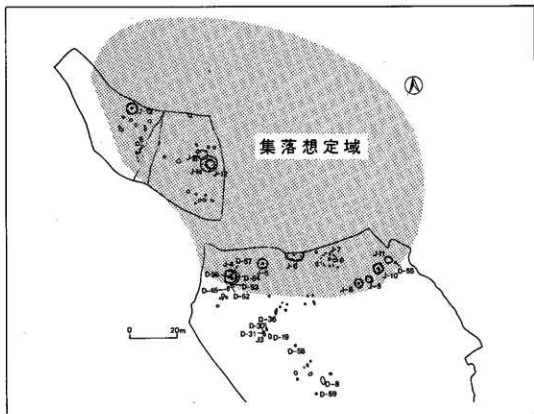
称名寺式並行期の遺構はJ-9号住居址、D-8・45号土坑などがある。J-9号住居址は敷石住居であるが、遺存状態は極めて悪く全容を把握できる状況にない。炉に土器埋設を行って

ること、埋葬の代わりに浅間火山の軽石製石鉢を使っている点を記しておく。

D-8・45は土器棺を利用した墓と考えられる。D-8は口径42cm、高さ45cmの大型深鉢を棺に用いている。棺よりもはるかに大きくて深い土坑内に土を埋め戻し、そこに正位に据えている。蓋は現存せず、有機質の蓋が用いられたようだ。棺内からは骨粉が出土し、副葬品は見られなかった。骨の人・獣の別、性別、単葬・再葬⁽⁷⁾の別など詳細はわからないが、仮に単葬であるとすれば、かなり大きな遺体の収納も可能である。D-45は棺身の深鉢底部に他の土器片で蓋をする蓋付土器棺と考えられるが、骨は検出されず、科学分析も未実施のため、確証はもてない。

滝沢Ⅷ期 後期前葉

堀之内1～2式の住居址は4軒あり、J-4・5・6・11号住居址が該当する。J-4・5・6は集落跡範囲の南端中央に接して分布し、時期も近く、堀之内1式新段階～2式古段階に帰属する。また、J-11はそこから少し離れた南東端にあり、時期も少し新しいようだ。J-5・6号住居址は数石住居址で、J-5には四方を軽石で囲む石囲炉、J-6には縁石をもつ土器埋設炉が付設される。J-4号住居址は数次の拡張・建て替えが行われたと考えられる住居であるが、その順序については定かでない。住居中央部の床面をわずかに掘り込む土器棺収納土坑が3基



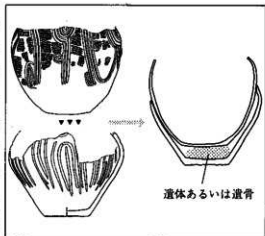
第225図 滝沢北部の遺構配置 (1:1,600)

(D-54・56・57号土坑)、住居南壁を壊す土器棺収納土坑が1基(D-53号土坑)あり、住居廃絶後、竪穴が埋まり切らないうちに墓地利用が始まっている。住居に絡む以外の周辺の土坑(珍品の瓦形土製品を出土したD-52号土坑もこの中にある。D-52は墓標的な立石が倒れた状態で出土している。)も多くは、墓址である可能性が高く、称名寺式から堀之内2式並行の時期までの墓域を形成していたようだ。これらの墓群から南東へ20m程の位置に生の人の歯、焼人骨・獣骨・ペンダント等を出土したD-30号土坑と祭祀的な要素をもつJ-3号竪穴遺構、ほかに3基の土坑がある。これらについては別に検討を加える。

また、この他に墓群を形成しない単独の土器棺も多い。中期後葉ではか-9グリッドからD-59号土坑の伏壔(加曾利EⅢ式並行の深鉢、骨片出土)、後期初頭ではか-8グリッドからD-8号土坑の単棺(称名寺式並行の粗製深鉢、骨片出土)、後期前葉ではく-6グリッドからD-55号土坑の2重土器棺(堀之内1式、下の土器内底部から鳥の焼骨片出土)などが出土した。2重土器棺は後期前葉を中心とする時期には本遺跡の特徴的な葬法(第226図参照)であり、D-53・54・57なども同様に2重構造をもつ。両者の相関について明らかにできないが、J-5住(堀之内1式新段階~2式古段階)の炉に埋設された土器はやはり2重構造であった。すぐ西隣の西苑神遺跡J-2住(称名寺式)の炉内埋設土器も2重構造であった。縄文後期を前後する時期の滝沢遺跡とその周辺には炉構築と土器棺墓作りに何か共通するものがあつたのかも知れない。一方、縄文中期後葉の住居に付設される石囲炉内にはJ-13住で深鉢単独の埋設が認められるほかは、J-7・8・10住など土器埋設されない場合が多い。炉内土器埋設の主流は後期に入ってからだったようである。

なお、土器棺の多くから骨片が出土しているが、個体識別できたのはD-55号土坑出土の鳥の骨のみである。今まで私は土坑に埋設された土器内から骨片が出土するとただちにヒトの埋葬址と考えてしまっていた。今回の発見例には見事にその思いこみが覆された。今後、縄文時代の土器棺ある埋壔といっているものの類を扱うに当たって安易な思いこみは慎まなければならない。当然、個体識別ができなかったほかの土器棺内の骨片についてもヒトの埋葬址であるという確証はないことになる。

滝沢Ⅸ・Ⅹ期 後期中・後葉 遺構は検出されなかった。



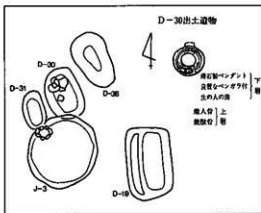
第226図 滝沢Ⅶ期の土器棺モデル

D-30号土坑と周辺遺構の検討 焼人骨葬は中部高地起源とされ、最古例は岡谷市梨久保遺跡、戸倉市幅田・円光房遺跡の縄文時代中期中葉・後葉の配石遺構に点的にみられる。したがってその成立については配石遺構と密接な関係をもつことが指摘されている。これを起点に焼人骨葬が東日本に広がって行くなか、縄文晩期前半の長野県南部では特に濃厚に継承され、配石遺構に伴う多人数の焼人骨葬が一般的葬法として定着する。一方北部での一般化は明科町北村遺跡の後期墓域で遺体を生で埋葬することが多い状況がみられるように骨焼きの盛行が遅れ、晩期後半になって定着をみるようだ⁽¹¹⁾。こうした趨勢下で滝沢遺跡のD-30号土坑から出土した焼人骨は配石との関係も看取されるなど、類例の少ない後期前葉の新発見の葬制として注目される。そこでもう少し検討を加えてみることにする。

D-30号土坑の状況 前述のようにD-30号土坑からは生人骨(歯)、焼人骨・焼獣骨、イモガイの切り口を模した彫刻を施した上に良質なベンガラを塗布した滑石製ペンダント等が検出されたため、特殊な性格を持つ墓であることが考えられた。また、構築時期は後述するようにJ-3号竪穴遺構と密接な関連を持つため、堀之内1式古段階と考えられた。D-30の覆土は2層に分層され、下層(II層)は黒色土で生人骨の一部(上顎第3大臼歯一本)が検出されたほかII層最上面出土の滑石製ペンダントは表面を上にもむけて副葬されていた。人の歯については解剖学的な位置をとどめているとは考えがたく、選択された骨が埋葬されたものと判断される。

次の段階では土坑中央北寄りの底面からII層最上面にかけてペンダントを覆うように6個の大型礫が集積されていた。大型礫の集積が終わったのち、ニホンジカ(96.7g)・イノシシ(72.8g)の焼獣骨と少量の焼人骨(頭蓋骨・下顎骨18.5g)片が多量(総重量534g)に含まれるI層を埋め戻し、土坑の埋設を終了している。焼獣骨についてはニホンジカ・イノシシともに肉がついた状態で焼かれた可能性が高いが、焼人骨については細片かつ少量のため判断できないという。また、焼骨の破砕の有無についても判断できないという。

J-3号竪穴遺構と配石の状況 D-30に接してつくられたJ-3は直径180cm内外の小型の円形竪穴で、北側には付属施設とは断ぜられないが石囲炉状の配石が存在する。配石に使用された安山岩及び配石内底面の被熱の有無については定かでない。配石内には破砕された堀之内1式古段階の鉢が納められていた。また、配石とその周辺にはD-30のI層と同じく焼骨片を混じる黒色土が覆っており、上位に位置する



第227図 D-30号土坑と周辺の遺構分布(1:100)

D-30からの土の流出によって埋められたものと考えられる。これが正しければD-30が埋められた時点では配石は埋まらずに露出した状態だったことになる。

周辺の状況 この他にD-30の周辺にはD-19・31・36号土坑などが取り巻くように分布する。長辺はD-19が197cm、D-31が94cm、D-36が183cmでいずれも底面が平坦である。焼土・炭化材等も検出されなかった。D-31からニホンジカの焼骨が1点出土しているほかは人骨・獣骨は出土せず、時期判定にたる土器等も出土していないが、墓であるとすればD-19・36は伸展葬、D-31は屈葬可能な土坑である。また、これらの土坑内には遺体はいったん埋葬されたものの、祭祀行為等のため再び掘り出されたため、もぬけの殻になってしまったことも考えられる。

以上の状況からD-30号土坑へ焼人骨・焼獣骨収納に至る埋葬過程を復元的に考察する。

- ① 一次葬 D-19・31・36号土坑へ数人の埋葬、おそらく土葬。埋葬時はそれぞれ異なる。伸展葬・屈葬の可能性。
- ② 骨あげ 骨化した遺体、あるいは腐乱状態にある遺体を各土坑から取り上げる。腐乱状態の場合、遺体の解体を行う。
- ③ 二次葬 D-30号土坑底面へ生骨を納骨する。この際、抽出骨と残余骨の別が生じる。
- ④ 祭祀行為 ベンダントの供献、集石による魂の封印等儀礼が執行される。
- ⑤ 焼骨 かたわらではJ-3号竪穴遺構の配石とその付近にて人の残余骨とともに獣の骨を焼く。獣は犠牲獣か？ 豊饗祭祀、祖霊祭祀などを目的とするか？
- ⑥ 遺棄 同じ場で焼骨を破砕？し、D-30を完全に埋める。

あくまで仮説に仮説を重ねた推論に過ぎないが、D-30号土坑への人骨と獣骨の同時埋納を理解するために踏み込んだ私論を展開した。事実はまったく異なる葬法や儀礼が執り行われていた可能性も否めない。異論も多いと思う。



第228図 焼骨埋納までの過程
想像復元図

大方の御叱正を賜りたい。

まとめ 滝沢遺跡D-30号土坑とその周辺状況を再述したうえで、縄文後期当時の葬法を復元的に考察した。長野県内とその周辺では焼人骨は配石に伴って出土するものが多い。また、特に長野県北部では焼獣骨がこれに伴出する例が多い。D-30の場合、多くの焼獣骨が焼人骨に伴出する点では長野県北部の様相と一致する。しかし、二次埋葬の第一段階は生骨(歯)の安置をし、その上に石をのせてから、細片化した焼骨を納める葬式は県内で見られる配石墓とは異なったあり方を示す。結論から言うともまったくD-30と同様な葬法は管見では知り得ていない。

D-30の周辺に目を転じるとJ-3が直近く存在する。戸倉町幅田遺跡では縄文中期後葉の石厨炉状の配石内から焼骨・焼土が出土した。これを焼骨の場と仮定すれば、滝沢遺跡のJ-3の配石もその系譜を引く同様な性格をもつものと考えた。ただし、最終埋葬の場と、遺骨処理・焼骨の場が間近に存在する例は聞かない。類例が少ない段階で飛躍した考察は危険だが、広域な視野でこの葬法の系譜を考えてみる必要がある。

例えば時期的な整合は図れないが、設楽が単発的で系統については不明瞭とした岩手県八天遺跡⁽¹⁸⁾のような東北の焼人骨葬との共通要素にも注目しておきたい。現実に滝沢遺跡では東北系と考えられる後期前葉の土器片(第184図5)も出土しているし、やはり後期前葉と考えられる耳形土製品も出土している。管見では顔の部位の粘土細工が出土しているのは、岩手の八天遺跡、東北の数例のほかは本滝沢遺跡だけだと思う。現段階で両地域の強引な結びつけは慎むべきだろうが、まったく絵空事とも思えない共通要素があることも指摘し、今後の検討課題としておきたい。

注

- (1) 下平博行 1994 「塚田式の設定とその様相について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- (2) 御代田町教育委員会 1994 『塚田遺跡』
- (3) 御代田町教育委員会 1994 『下弥堂遺跡』
- (4) 御代田町教育委員会 1997 『川原田遺跡』(本文編)
- (5) 御代田町教育委員会 1995 『東荒神・西荒神・下大宮・岡屋・中屋敷遺跡』
- (6) 長野県縄文文化財センター 1992 「郷土遺跡」『長野県縄文文化財センター年報9』
- (7) 再葬・単葬の定義については 設楽博己 1993 「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集に従った。

再葬—「いったん遺体を骨にしてから再び埋葬する葬法を複葬と呼ぶ。考古学的な事象からは、死の確認や一次葬など複葬制全体を明らかにすることは困難で、最終的な埋葬遺跡で複葬制の存在を確認する場合が多い。そうした墓を再葬墓、その過程を再葬と呼んでいる」—7P

単葬—「再葬を経ないたんなる埋葬を複葬に対して単葬という」—40P註5

- (8) 岡谷市教育委員会 1986 『梨久保遺跡』(本編)

- (9) 森嶋 稔 1982 「稲田遺跡」『長野県史 考古資料編全一巻(二)』
- (10) 森嶋 稔 1990 「円光房遺跡」戸倉町教育委員会
- (11) 馬場保之 1994 「縄文晩期葬制に関する一考察」『中部高地の考古学Ⅳ』長野県考古学会
- (12) 国立歴史民俗博物館 西本豊弘先生のご教示。
- (13) 国立歴史民俗博物館永嶋正春先生の同定。本書477頁に掲載。
- (14) 縄沢遺跡D-30号土坑出土土人骨及び獣骨については本書4項で京都大学茂原信生先生に分析をしていただいた。詳細は471頁を参照。
- (15) 二次葬までのプロセスについては設楽博己 1993 「壺棺再葬墓の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 10P掲載のモデルを大いに参考にした。
- (16) 前掲(11) 馬場によれば頭部は生で供し、体部は焼くことが多いという。
- (17) 阿部義平 1983 「配石」『縄文文化の研究 9』
- (18) 前掲註(7) 31P
- (19) 林 謙作ほか 1979 「八天遺跡」(『北上市文化財調査報告』第27集) 焼人骨が出土した2基の土坑は選骨して埋葬されたものであるという。

参考文献

- 石川日出志 1988 「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74号
- 群馬県 1988 『群馬県史』
- 明科町教育委員会 1991 『ほうろく屋敷遺跡』
- 平林 彰 1993 『北村遺跡』朝長野県埋蔵文化財センター
- 長野県立歴史館 1996 『縄文人の一生』
- 馬場保之 1994 『中村中平遺跡』飯田市教育委員会
- 坂井美嗣 1995 『辻田遺跡』東部町教育委員会

4 滝沢遺跡（長野県御代田町）出土の動物骨

京都大学霊長類研究所
茂原信生・木下 實

(1) はじめに

滝沢遺跡は長野県北佐久郡御代田町にある塩野西遺跡群に属する遺跡で、平成4年4月から同年10月にかけて御代田町教育委員会によって発掘・調査された。この遺跡は縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡であり、今回報告するのはこのうち縄文時代後期前葉から出土したヒトを含む動物骨が主である。出土した骨のほとんどは火を受けており、焼かれていないのは中屋敷遺跡出土の加工品とヒトの歯、およびシカの歯の3点だけであった。30号土坑と4号住居址からの出土がほとんどで、30号土坑ではヒトと獣骨が混在していた。この土坑から出土した焼骨は細片で、四肢骨はヒトか獣骨かは判定できないものが多い。ヒトの頭蓋骨および大腸骨片は火を受けており、歯は焼かれていない。

火を受けた骨は表面に液型の亀裂が見られるものが多いので、ほとんどは軟部組織(筋肉など)がついたまま焼かれたものであろう (Stewart, T.D., 1979)。

(2) 出土動物骨のリスト (表223・224)

ヒトを除く動物骨で同定できたのは1綱1目2科2種である。

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

ニホンイノシシ *Sus scrofa leucomyustax*

鳥綱 Aves

小型のトリ (種不明)

出土した部分はいずれも細片で、厳密に言えば種を同定できるようなものではないが、出土した地域・場所などを考えてニホンジカ、ニホンイノシシとした。また、シカとカモシカは1本の骨が丸ごと出土すればまず識別できるが、今回のように焼かれておりしかも細片の場合には区別

するのは難しい。したがって、ニホンジカと同定されたものの中にはカモシカがまじっている可能性は否定できない。

(3) 出土動物骨の特徴

同定されたものの出土点数ではシカが38点でもっとも多く、イノシシは15点である。加工痕が見られたのは1点だけであった。

1) ニホンジカ

30号土坑からの出土がほとんどで、4号住居址からは5点ほどが出土している。四肢骨の骨端が化骨していない若い個体のものが多く見られた。大きさや形状から同一個体ではないかと判断されるものもある。

一般のこの時代の遺跡でよく見られる鹿角はまったくみられない。鹿角はかなりの細片になっても識別が簡単で同定しやすいことを考えると、全く出土していないことは興味深い。別の場所へ遺棄されたか、あるいは別の場所で加工されたか、あるいはまた遺棄されたものの中でも焼かれたものだけが残ったなどの可能性が考えられる。加工品は隣の中屋際遺跡H-5住(平安時代)カマドから出土した中手骨を削って作った1点だけ(第229図一C)であった。

2) イノシシ

イノシシはやはり30号土坑からの出土がほとんどである。骨端の化骨していない若い個体のものが多く、同一個体ではないかと思われるものもある。

3) トリ

鳥は鳥口骨片と尺骨片が出土しているがいずれも焼かれており、大きさはニワトリよりもかなり小さめの鳥である。種は不明である。

4) ヒト

ヒトは30号土坑から頭蓋骨片が6点、下顎骨片が1点、歯が1点出土している。特記すべきことはない。他に多分ヒトであろうと思われる頭蓋冠片が6点出土している。やや下層から出土している歯だけは焼かれていない。上顎左の第3大臼歯歯冠である。咬耗はしているが象牙質の露出はなく、まだ比較的若い20歳前後の個体のものであろう。性別は不明である。

加工品が少ないこと、ほとんどが焼かれた骨であることなどから考えると今回出土したものは食されたあとにごみ捨て場などに遺棄されたものではないし、使用済みの骨格器などがおもに捨てられた場所でもないと考えられる。例えば食されたあとに炉などに遺棄されたものである可能性が考えられる。火を受けた人骨に関しては、資料が少なく判断できない。

第223表 滝沢遺跡出土の脱骨破片(出土位置別)

グリッド区	番号	動物種名	骨名	部位		左右	状態1	状態2	備考
2D	30号土坑	イノシシ	肩甲骨	遠位部		左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	イノシシ	肩甲骨	近位部	関節部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	イノシシ	上腕骨	近位骨端	大結節部	右	破片	焼骨	骨端不完全化骨
2D	30号土坑	イノシシ	上腕骨	近位骨端		右	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	イノシシ?	上腕骨	遠位骨端	後面	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	イノシシ	中手・中足骨	近位半		不明	破片	焼骨	目あるいはH骨
2D	30号土坑	イノシシ	中節骨	遠位部		不明	破片	焼骨	
2D	30号土坑	イノシシ	大腸骨	遠位骨端		左	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨端		右	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨端	後面	右	破片	焼骨	
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨端		右	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨端		左	完形	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	外側部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	外側半	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	右	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	不明	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	不明	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	桡骨	遠位端		左	完形	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	橈骨	遠位半		左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	橈骨	遠位端	内側部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	腕骨	遠位端	外側部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	遠位部		左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	近位骨端		左	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	近位部	関節部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	種子骨			不明	完形	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	腕手根骨			不明	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端	基部のみ	不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	中節骨	遠位端		不明	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中節骨	遠位半		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	中節骨	遠位半		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	中節骨	近位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	大腸骨	遠位部		不明	破片	焼骨	骨端未化骨完了
2D	30号土坑	ニホンジカ	大腸骨	骨端	中央部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	脛骨	近位端	内側半	左	破片	焼骨	骨端未化骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	脛骨	遠位端		左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ヒト	頭蓋骨	額蓋片		不明	破片	焼骨	6点
2D	30号土坑	ヒト?	頭蓋骨	額蓋片		不明	破片	焼骨	6点
2D	30号土坑	ヒト	下顎骨	下顎体	斜縁部	不明	破片	焼骨	
3D	30号土坑	ヒト	歯	第3大臼歯		左	完形	生骨	歯冠のみ
4D	31号土坑	ニホンジカ	中足骨	近位部	外側半	左	破片	焼骨	
11J	4号住居址田区	ニホンジカ	尺骨	近位骨端	関節部	左	破片	焼骨	
11J	4号住居址田区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
11J	4号住居址田区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
11J	4号住居址田区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
11J	4号住居址田区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨
11J	4号住居址田区	ヒト	大腸骨	骨端中央	後面腹縁部	不明	破片	焼骨	
11J	4号住居址田区	ヒト	頭蓋骨	額蓋片		不明	破片	焼骨	
18D	55 2樓室内	トリの一種	鳥口骨	遠位部	関節部	左	破片	焼骨	小型のトリ
18D	55 2樓室内	トリの一種	尺骨	遠位部		左	破片	焼骨	小型のトリ
19D	55樓外周	イノシシ	中節骨	近位端欠		不明	破片	焼骨	
19D	55樓外周	ニホンジカ	中足骨	中央部	前面	不明	破片	焼骨	
22D	55樓室内	ニホンジカ?	大腸骨	遠位端	関節部	不明	破片	焼骨	剥離片
26J	11号住居址田区	ニホンジカ?	歯	臼歯片		不明	破片	生骨	剥離臼歯片
30%	10田区品	イノシシ	中節骨			不明	完形	焼骨	
34つ	13V区品	イノシシ	肩甲骨		肩甲縁中央	不明	破片	焼骨	
34つ	13V区品	イノシシ	脛骨			不明	完形	焼骨	剥離破あり
中層掘り	5カマド	ニホンジカ	中手骨	近位半		左	破片	生骨	人工物

第224表 滝沢遺跡出土の焼骨破片(種別)

グリッド区	番号	動物種名	骨名	部位		左右	状態1	状態2	備考	
2D	30号土坑	イノシシ	肩甲骨	遠位部	関節窩 大結節部	左	破片	焼骨	骨端不完全化骨 骨端未化骨 日あるいはN指	
2D	30号土坑	イノシシ	肩甲骨	近位部		右	破片	焼骨		
2D	30号土坑	イノシシ	上腕骨	近位骨端	左	破片	焼骨			
2D	30号土坑	イノシシ	上腕骨	近位骨端	右	破片	焼骨			
2D	30号土坑	イノシシ	中手・中足骨	近位半	不明	破片	焼骨			
2D	30号土坑	イノシシ	中腕骨	遠位部	不明	破片	焼骨			
2D	30号土坑	イノシシ	大腸骨	近位骨端	左	破片	焼骨	骨端未化骨		
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨幹	右	破片	焼骨	骨端未化骨		
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨幹	左	破片	焼骨	骨端未化骨		
2D	30号土坑	イノシシ	脛骨	近位骨端	右	破片	焼骨	骨端未化骨		
19D	55埋壁外周	イノシシ	中腕骨	近位端欠	不明	破片	焼骨	骨端未化骨		
30ち	10田区黒	イノシシ	中腕骨		不明	破片	焼骨			
34フ	13W区黒	イノシシ	肩甲骨		肩甲骨中央	不明	破片	焼骨		
34フ	13W区黒	イノシシ?	胫骨		不明	破片	焼骨	解体済み?		
2D	30号土坑	イノシシ?	上腕骨	遠位骨幹	後面	右	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	果骨		外側部	左	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端		左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	外側半	左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	右	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	上腕骨	遠位端	内側半	不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	果骨	遠位半	内側半	不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	基節骨	遠位半		不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	基節骨	遠位半		不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	腕骨	遠位端	内側部	左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	腕骨	遠位端		左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	遠位部	外側部	左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	遠位部		左	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	近位骨端	関節部	左	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	尺骨	近位部		不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	種子骨			不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	橈腕手根骨			不明	破片	焼骨		
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端	基部のみ	不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中腕骨	遠位端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中腕骨	遠位半		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中腕骨	遠位半		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	中腕骨	近位骨端		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	大腸骨	遠位部		不明	破片	焼骨	骨端未化骨完了	
2D	30号土坑	ニホンジカ	大腸骨	骨幹		中央部	左	破片	焼骨	
2D	30号土坑	ニホンジカ	脛骨	近位端			内側半	左	破片	焼骨
2D	30号土坑	ニホンジカ	踵骨	遠位関節面		左	破片	焼骨		
4D	31号土坑	ニホンジカ	中足骨	近位部	外側半	右	破片	焼骨		
11J	4号住居址Ⅲ区	ニホンジカ	尺骨	近位骨幹		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
11J	4号住居址Ⅲ区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨幹	関節部	不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
11J	4号住居址Ⅲ区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨幹		不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
11J	4号住居址Ⅲ区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端	不明	破片	焼骨	骨端未化骨		
11J	4号住居址Ⅲ区	ニホンジカ	中手・中足骨	遠位骨端	不明	破片	焼骨	骨端未化骨		
19D	55埋壁外周	ニホンジカ	中足骨	中央部	前面	不明	破片	焼骨	骨端未化骨	
中園跡H	5コマD	ニホンジカ	中手骨	近位半		不明	破片	焼骨	人工物	
22D	55埋壁内	ニホンジカ?	大腸骨	遠位端	関節部	不明	破片	焼骨	偽骨頭	
26J	11号住居址Ⅱ区	ニホンジカ?	臼歯片	臼歯片		不明	破片	焼骨	偽骨頭臼歯片	
2D	30号土坑	ヒト	頭蓋骨	頭蓋冠片	斜顔部	不明	破片	焼骨	6点	
2D	30号土坑	ヒト	下顎骨	下顎体		不明	破片	焼骨	6点	
2D	30号土坑	ヒト?	頭蓋骨	頭蓋冠片		不明	破片	焼骨	6点	
3D	30号土坑	ヒト	歯	第3大臼歯		不明	破片	焼骨	歯冠のみ	
11J	4号住居址Ⅲ区	ヒト	大腸骨	骨幹中央		後面粗線部	不明	破片	焼骨	
11J	4号住居址Ⅲ区	ヒト	頭蓋骨	頭蓋冠			不明	破片	焼骨	
18D	55 2埋壁内	トリの一種	鳥口骨	遠位部	関節部	左	破片	焼骨	小型のトリ	
18D	55 2埋壁内	トリの一種	尺骨	遠位部		左	破片	焼骨	小型のトリ	

(4) 他の遺跡との比較

滝沢遺跡に近い遺跡に小諸市の石神遺跡がある。この遺跡の縄文時代後期および奈良・平安時代から出土した獣骨については金子(1994)が報告している。縄文時代後期の住居址からは比較的多くの動物骨が出土しており、キジ、オオカミ、イノシシ、ニホンジカが確認されている。しかも焼かれたものでないことは今回の滝沢遺跡のものと異なっている点である。

長野県の戸倉町の円光房遺跡からも焼けた獣骨が出土している(金子:1990)。この遺跡のうち、縄文中期末から後期にかけての遺構では、獣骨の主体はイノシシであり、ニホンジカは少量と記されている。本遺跡は全体の量が非常に少ないので推測にすぎないが、ニホンジカが主であった点で円光房遺跡とは異なっているらしい。また、円光房遺跡ではみられているノウサギ、タヌキ、ツキノワグマはみられない。

(5) まとめ

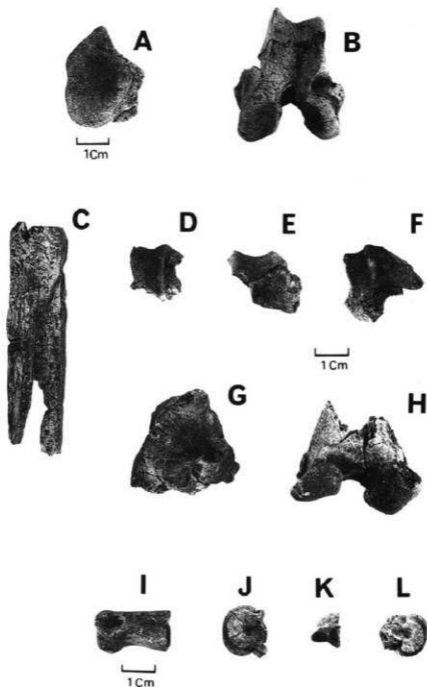
本遺跡の同定された動物骨はそのほとんどが30号土坑から出土したものであり、しかもほとんどが火を受けたものである。30号土坑からはヒトの頭蓋骨片なども出土しているがやはり焼かれている。これらの骨や歯がなぜ残ったのか、なぜ遺跡のこの部分にあったのかなどに関して詳しく論じるには資料が不足している。

全体の出土数は少なく出土した哺乳類も一般的に遺跡でもっともよく出土しているニホンジカとイノシシだけであり、一つの遺跡の動物遺存体としては貧弱である。

この資料の観察の機会を与えて下さった御代田町教育委員会の方々に心から感謝いたします。

参考文献

- 金子浩昌(1990):円光房遺跡における焼獣骨の調査。「円光房遺跡」、戸倉町教育委員会:189-204。
金子浩昌(1994):縄文時代後期の住居址から検出された貝片・骨格器(獣骨片)の分類・同定。「石神遺跡」、小諸市教育委員会:343-347。
金子浩昌(1994):縄文時代後期の住居址から検出された貝片・骨格器(獣骨片)の分類・同定(第2報)。「石神遺跡」、小諸市教育委員会:348-356。
小山岳夫(1993):滝沢一塩野西遺跡群一、発掘調査概要報告書。御代田町教育委員会:Pp.42。
Stewart,T.D.(1979):Burned Bones. in"Essentials of Forensic Anthropology" Charles C.Thomas, Springfield,59-68.



第229図 滝沢遺跡出土の獣骨

C以外は焼かれているものである。A～Bはイノシシ、C～Lはニホンジカである。なお、A・Iと他の写真とは縮尺が異なっている。

A：イノシシ右脛骨近位骨端内側半、B：イノシシ大腸骨遠位骨端、C：左中手骨近位部、D～F：左上腕骨遠位端、G：左脛骨近位部、H～J：中手骨あるいは中足骨の遠位骨端、K：基節骨（近位部欠損）、L：大腸骨遠位部

5 滝沢・宮平遺跡出土の赤彩資料、漆資料について

国立歴史民俗博物館
永嶋正春

(1) はじめに

滝沢遺跡からは、縄文時代前期後葉から後期前葉にかけての赤彩された土器が出土している。すべて小断片ではあるが、当時使われていた赤色顔料の種類や赤彩技法を知る上では貴重な資料と言える。これらの赤彩資料に加え、同遺跡では縄文時代後期に属する石製ベンダントが出土しており、これにも要所に赤色塗彩が認められる。装身具への赤色顔料使用の観点からも、興味を持たれる資料である。

これらの資料については、顔料使用の歴史を検討する立場から、非破壊的な手法による顔料の同定分析、微小な試料を採取しての層構成あるいは膠着剤（接着剤）の調査を行った。有意義な結果が得られているので、ここにその概略を報告する。

また滝沢遺跡とは異なるものの、ほぼ時代の近い資料として、宮平遺跡からも赤彩土器片が検出されている。御代田町地域における縄文時代の赤彩技術を総体として捉える上では、これらの資料の赤彩材料や技法を検討することも重要であり、あわせてここにその調査結果を報告することとしたい。

(2) 滝沢遺跡出土赤彩資料

石製ベンダント（縄文時代後期、第121図参照）孔の内面などを中心に、非常に顕著で良好な発色をした赤色顔料が付着残存している（第230図1）。光学顕微鏡で見たその微視的な外観（第230図2）は、赤色顔料がかなり粉状に存在していることを示しており、漆塗りのような塗膜層を成すものではない。赤色顔料の残存する個所を中心とした蛍光X線分析の結果、有意に認められるのは鉄であることから、この赤色顔料はベンガラ（赤色酸化鉄）であることが知れる。念のため実施した文化財用折返装置による結晶性化合物の同定分析においても、赤鉄鉱のピークが検出されており、結晶性の良好なベンガラが使用されたものと判断できる。

発色、結晶性共良好なベンガラの場、その粒子形状が問題となる。縄文時代から古墳時代にかけての発色が良好なベンガラは、その粒子形態に注目した場合、たんなる不定形のもの、きわめて定型性の高いパイプ状のものに分けることができる。これらの内、パイプ状のベンガラ

は、非常に特殊な成因のもとに生成した天然のベンガラとして、現在ではまだその産地が特定されていないものの、きわめて限られた露頭において採取されていたものと想定しており、この種のベンガラを通して、縄文時代から古墳時代にかけての日本全国にわたる広域的な交流や流通を考えるべく、その事例の確認やベンガラ露頭に関する情報収集に努めている最中である。

ところで本資料のベンガラは、その付着部を更に高拡大で検鏡したところ、まさにこのパイプ状を呈するものであった。本資料は貴重な資料であるので、針の先ほどの量を採取して念のため観察したところでも、良好なパイプ状ベンガラであることが追認できた(第230図3、第230図4)。

そー17G II区出土浅鉢断片(縄文時代前期後葉、第185図1参照) いわゆる北白川下層II式に比定される土器断片で、その外面の淡黄褐色をした精緻な器表面には、非常に発色の良い赤色顔料が、うっすらとしかし良く密着して残存している(第230図5、第230図6)。赤色部を微小に採取して層断面薄片試料に調整したものが第230図7、第230図8であるが、この層断面試料からは、赤色顔料が胎土と良く一体化して存在することが明瞭に読みとれ、しかも赤色顔料としてはパイプ状ベンガラが使用されていることがわかる。なお、この赤色顔料がベンガラであることは、非破壊的な蛍光X線分析の結果としても確認されている。

以上のことより、本資料は焼成前の段階でパイプ状ベンガラを塗彩し、焼成によって器表面に固着させたものであることがわかる。関東における浮島式土器の赤彩も全くこれと同じであり、しかもパイプ状ベンガラを使用している点でも異なるところがない。

その他の赤彩土器片(第185図2~10) 滝沢遺跡から検出されているその他の赤彩縄文土器片について、赤彩部を高拡大で検鏡し、さらに同部の層断面薄片試料を作製して観察したところ、J-9号住付近出土の深鉢片(縄文時代中期、第185図6)1片を除き、すべてにパイプ状ベンガラの使用が認められた。すなわち、表採の浅鉢断片(中期中葉、第185図2)、J-9号住北出土浅鉢断片(中期中葉、第185図3)、J-8号住II区出土浅鉢断片(中期中葉~後葉、第185図4)、J-9号住付近出土の他の深鉢断片(中期、第185図5)、ちー18グリッド出土深鉢断片(後期初頭~前葉、第185図7)、J-10号住III区出土深鉢断片(後期初頭~前葉、第185図8)、ちー14グリッド出土深鉢断片(後期前葉、第185図9)、J-9号住南出土深鉢断片(後期前葉、第185図10)の8例については、付着残存する赤色顔料がパイプ状ベンガラと確認されたわけである。参考に、これらの内1片(J-9号住北出土浅鉢断片)について、その外觀を第231図1、パイプ状ベンガラの状況を第231図2に示したので、参照されたい。

パイプ状ベンガラが検出できなかった1片の赤彩(第185図6)は、赤彩としてはきわめて悪い発色であること、胎土の割れた断面にも同一色調のもの付着が認められることなどから考えると、赤彩の痕跡と見るよりは、むしろ埋没中に鉄系の赤褐色物が沈着したと見た方が自然である。

よって、滝沢遺跡で検出された発色の良好な赤色塗彩物のすべてについて、パイプ状ベンガラが使用されていたことになる。しかしながらその塗彩技法については、赤色の残り方が少ないことや傷みの進んでいることなどが考えられるため、焼成前塗彩、焼成後塗彩の問題も含め、にわかには決しがたい資料が大半であり、更に今後の検討を進めることで間違いのない結論を得たいものと考えている。

(3) 宮平遺跡出土赤彩資料

宮平遺跡からは、2点の赤彩土器片が検出されている。赤彩の外観は2点共に近似しており、やや明めの赤色を示すと共に、やや塗膜状を呈している。参考に第231図にその外観を示したが、第231図3は、む-11グリッド出土深鉢断片（縄文時代後期前葉）の外側、第231図4はむ-11グリッド出土深鉢断片（縄文時代後期末葉）の外側である。

両資料の赤色顔料付着部位を中心とした非破壊的な蛍光X線分析によれば、両者共に水銀が有意に検出されているが、鉄については胎土面との差異が明瞭ではない。したがって、両資料とも朱（赤色硫化水銀）が塗彩されたものと判断される。朱については焼成前の塗彩は無意味（分解消失してしまう）であるので、焼成後に何らかの接着剤を用いて塗布したことになる。

第231図5～第231図8に、赤色塗彩部から採取した微小試料についての層断面（薄片）を示したが、これらによれば、朱は漆によって塗られていたことが判明する。朱粒の周囲を充填するようにして存在する透明性のある淡黄褐色～淡赤褐色の物質が漆である。すなわち、これらの土器には朱漆が塗布されていたのである。

第231図5、第231図6は、後期前葉の土器片の赤彩部層断面であるが、土器の表面にはかなり粗い粒子を含む朱漆の層が1層認められる。朱粒は層中にほぼ均等に分散しており、朱漆塗布後、漆の硬化に至る間、比重の大きな朱の粒子が漆の層中で片寄りを生じないように配慮していたことが類推される。すなわち、朱漆としての良好な発色を確保するため、土器に朱漆を塗った後、漆が乾燥するまでの間、土器をゆっくりと回転して動かしていたことが想定できるのである。

第231図7、第231図8は、後期末葉の土器片の赤彩部層断面であるが、漆層としては3層の存在が確認できる。土器の表面にはまず漆（赤色顔料を混和していない漆、恐らくクロメ漆）が塗られ、それが乾燥した後で、次に朱漆が塗布されている。この朱漆中の朱粒は、どちらかと言えばやや下方に片寄っていると思われ、混入量が若干少ないこととあわせ、あまり良好な発色が得られなかったものと考えられる。そのためか、その上に細かな朱を中心とした朱漆をもう1層重ね塗りしており、結果として、第231図4に見られるような良好な朱漆としての外観を示すこととなった。なお中層の朱漆層中には、パイプ状ベンガラ粒子が汚れ程度には混入しており、興味が

持たれる。

以上、調査中途の状況ではあるが、とりあえずの報告としたい。

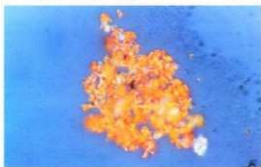
※宮平遺跡出土資料は昭和57年（1982）に発掘調査された際に出土したものである。宮平遺跡遺構編は昭和60年（1985）に刊行されているが遺物編は未完である。



1 石製ペンダント 後期 2×



2 同左 赤彩部 50×



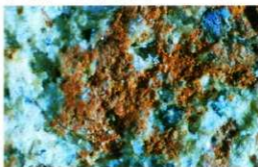
3 同上のベンガラ (パイプ状) 500×



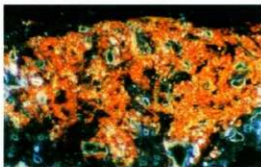
4 同左 パイプ状ベンガラ 500×



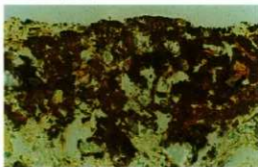
5 そー17GIV区 浅鉢 前期後葉 2×



6 同左 赤彩部 50×



7 同上 赤彩部層断面 500×



8 同左 パイプ状ベンガラ 500×

第230図 滝沢遺跡出土赤彩資料 (縄文時代)



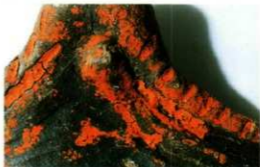
1 滝沢J-9号住北 浅鉢 中期中葉 2×



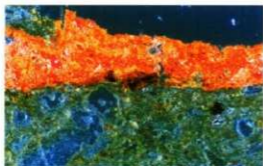
2 同左 赤彩部 (パイプ状ベンガラ) 200×



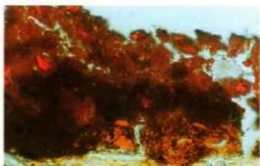
3 宮平 浅鉢 後期前葉 2×



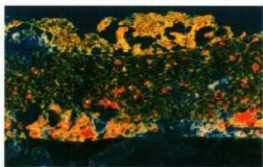
4 宮平 浅鉢 後期末葉 2×



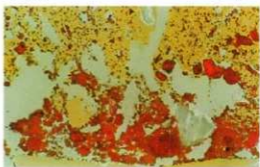
5 宮平 浅鉢 (後期前葉) 朱塗層 200×



6 同左 500×



7 宮平 浅鉢 (後期末葉) 漆・朱塗層 200×



8 同左 パイプ状ベンガラ混入の朱塗層 500×

第231図 滝沢遺跡・宮平遺跡出土赤彩資料 (縄文時代)

V

写真図版



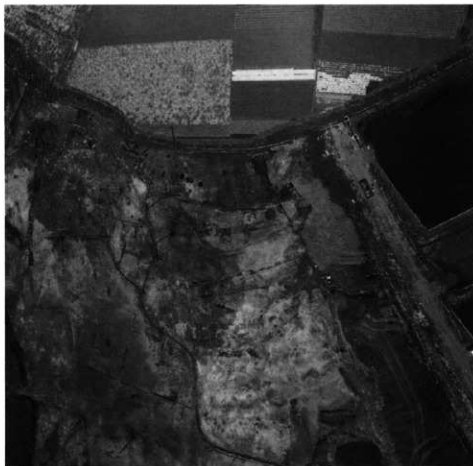
平成4年度 滝沢遺跡空中写真 (株式会社 協同測量社撮影)



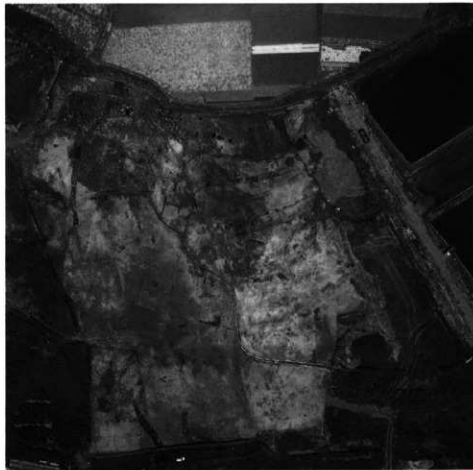
平成4年度 発掘調査遺跡 (東荒神・滝沢)



平成4年度発掘 滝沢遺跡 空中写真



平成4年度発掘
流沢遺跡空中写真



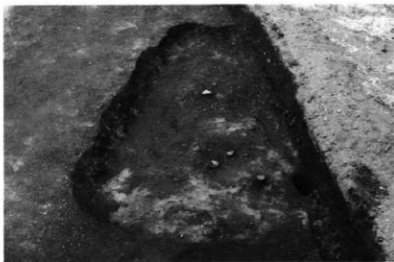
平成4年度発掘
流沢遺跡空中写真



平成5年度 発掘調査 滝沢遺跡空中写真（株式会社 協同測量社撮影）



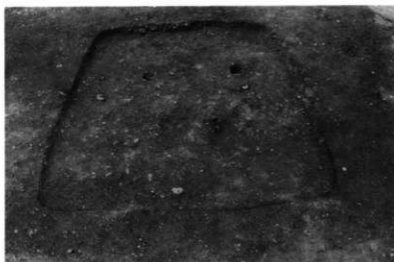
平成5年度 発掘調査遺跡 東荒神・滝沢・関屋遺跡



J-1号住居址



J-1号住居址遺物出土狀態



J-2号住居址



J-3号竪穴遺構



J-3号竪穴遺構



J-3号竪穴遺構と石組



J-3号竪穴遺構と石組



J-4号住居址



J-4号住居址 (中央部に3基の土器棺が分布している)



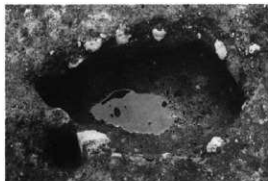
丁-4号住居址遺物(蓋)出土狀態



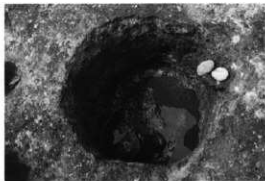
丁-4号住居址遺物(石棒)出土狀態



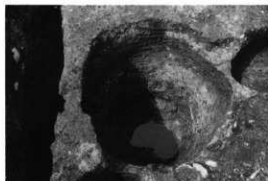
丁-4号住居址遺物(手捏わ土器)出土狀態



D-55号土坑



D-59号土坑



D-58号土坑



J-4号住居址の発掘



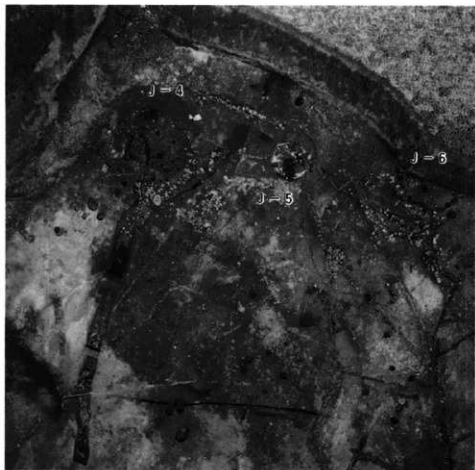
J-4号住居址礎分布状況



J-4号住居址礎分布状況



J-5号住居址



J-4-6号住
居址分布状况



J-5-6号住
居址分布状况



J-5号住居址



J-5号住居址



J-5号住居址掘り方



J-5号住居址



J-5号住居址炉上部に土器片が散乱している。



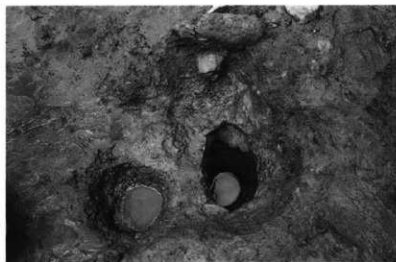
J-5号住居址炉の二重埋設土器



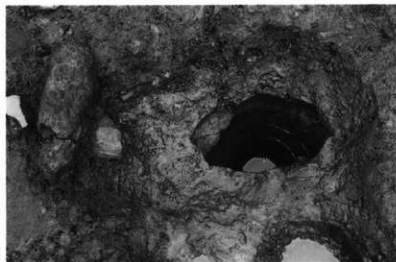
J-5号住居址炉の上の埋設土器を除去した状態



J-6号住居址



J-6号住居址の炉



J-6号住居址の炉



J-7号住居址



J-7号住居址の炉



J-7号住居址の炉



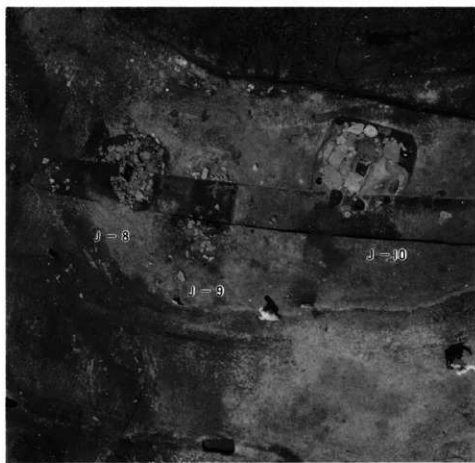
J-7号住居址の炉



J-7号住居址の実測



J-8~11号住
居址分布状况



J-8~10号住
居址分布状况



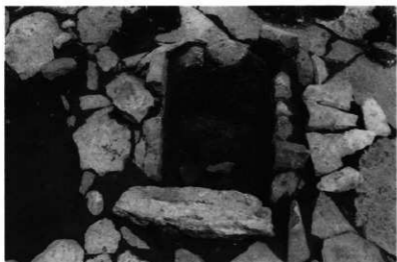
J-8号住居址



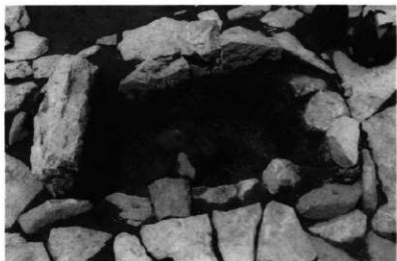
J-8号住居址



J-8号住居址の炉



J-8号住居址の炉



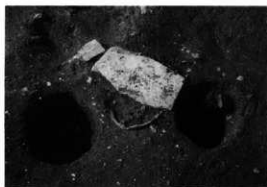
J-8号住居址の炉



J-8号住居址の掘り方



J-8号住居址の掘り方



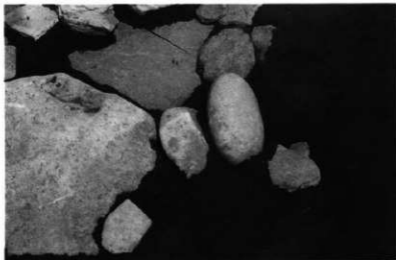
J-8号住居址敷石下埋甕



J-8号住居址敷石下埋甕



J-8号住居址敷石下埋甕



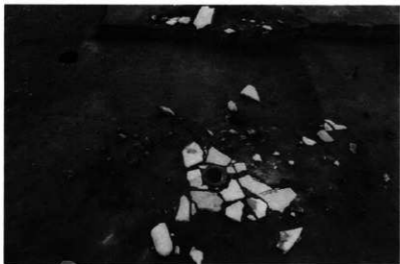
丁-8号住居址磨石出土状况



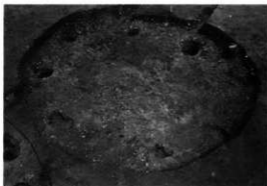
丁-8号住居址磨石出土状况



丁-8号住居址磨製石斧出土状况



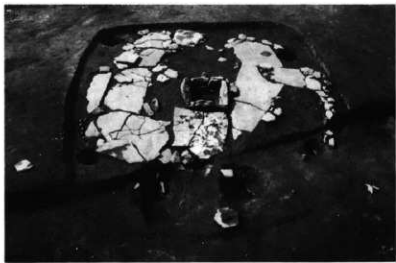
J-9号住居址



← J-9号住居址掘り方

↓ J-10号住居址





J-10号住居址



J-10号住居址炉と埋室



J-10号住居址埋室



J-10号住居址跡



J-10号住居址掘り方



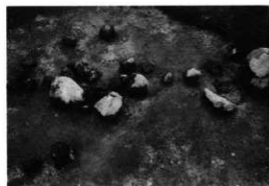
J-10号住居址の発掘



J-11号住居址



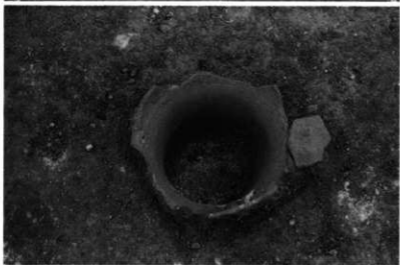
J-11号住居址



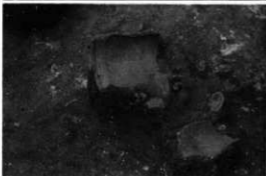
J-11号住居址出土狀況



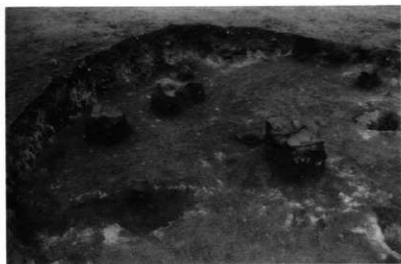
J-12号住居址



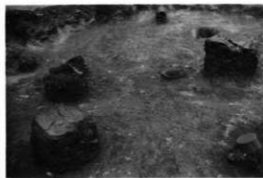
J-12号住居址の炉



J-12号住居址
遺物出土状況↓



J-12号住居址遺物出土状況

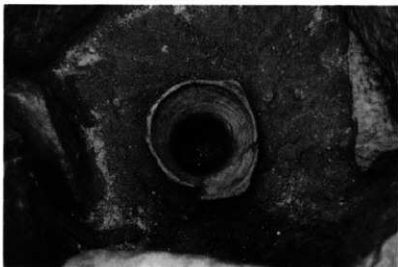




J-13号住居址



J-13号住居址の炉



J-13号住居址炉内埋設
土器



J-13号住居址



J-13号住居址の炉



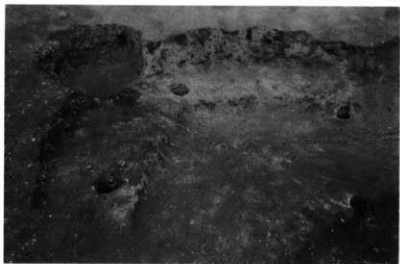
J-13号住居址の炉



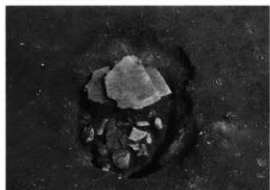
スナップ (住居址の発掘)



J-14号住居址



J-15号住居址



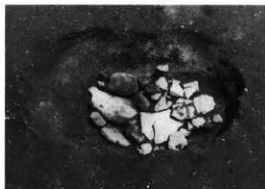
D-1号土坑



D-1号土坑



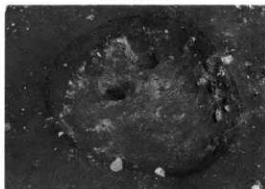
D-1号土坑



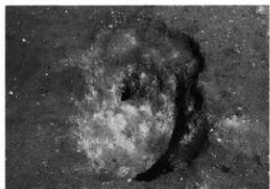
D-1号土坑



D-2号土坑



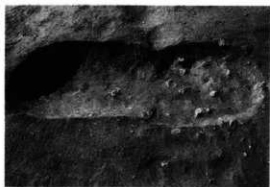
D-2号土坑(礫を除去後)



D-3号土坑



D-3・4号土坑



D-5号土坑



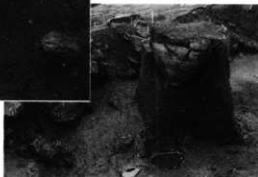
D-6号土坑



D-8号土坑



D-8号土坑内土器棺

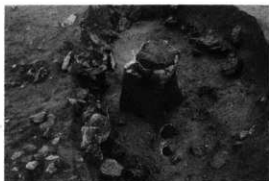




D-8号土坑土器棺検出状況



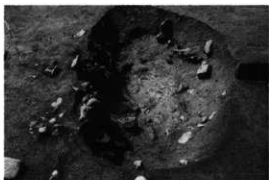
D-8号土坑土器棺検出状況



D-8号土坑土器棺埋置状況



D-8号土坑土器棺除去後



D-8号土坑土器棺除去後



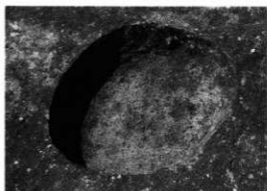
D-8号土坑土器棺除去後



D-8号土坑の発掘



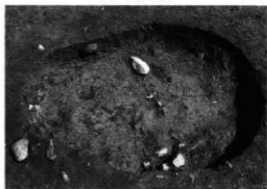
D-9号土坑



D-10号土坑



D-3·4·11·12·13号土坑



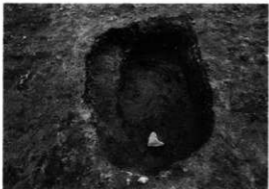
D-14号土坑



D-15号土坑



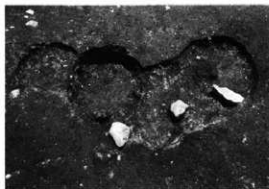
D-16号土坑



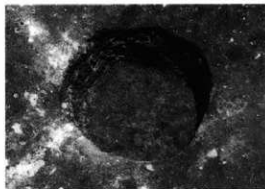
D-19号土坑



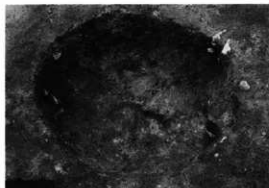
D-20号土坑



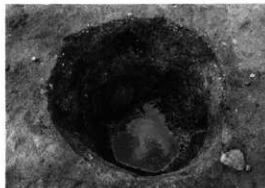
D-20·21·29·32号土坑



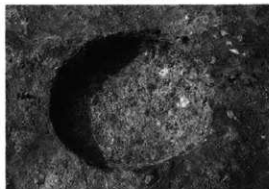
D-22号土坑



D-25号土坑



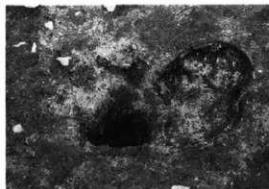
D-27号土坑



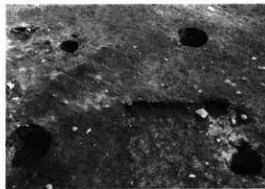
D-28号土坑



D-29号土坑



D-24·34号土坑



D-27·28·37·38号土坑



D-30号土坑
土層堆積状況
上層に骨片が散乱し
ていることがわかる。



D-30号土坑
石の配置状況



D-30号土坑
石の配置状況



D-30号土坑
石の配置状況

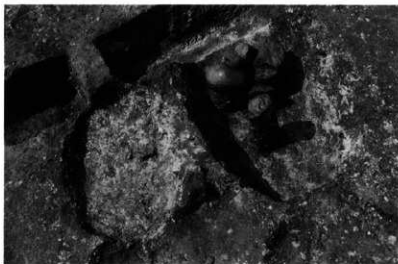


D-30号土坑
石を除去したところ、
石の下から滑石製の
ペンダントが出た。



D-30号土坑 滑石製ペンダント出土状況

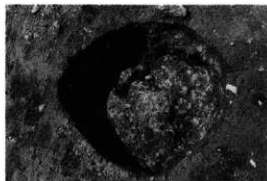




D-30・31号土坑



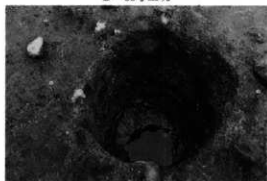
D-30・31号土坑の掘り上がり



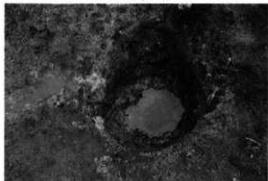
D-35号土坑



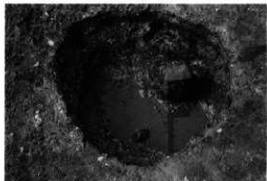
D-36号土坑



D-37号土坑



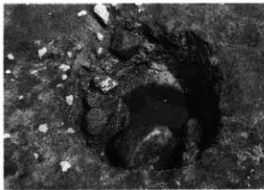
D-38号土坑



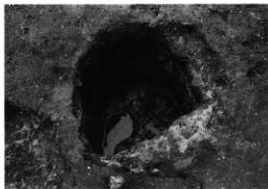
D-39号土坑



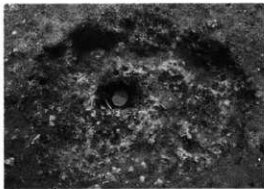
D-40号土坑



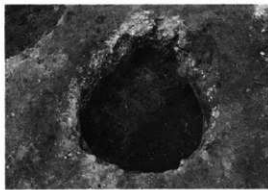
D-43号土坑



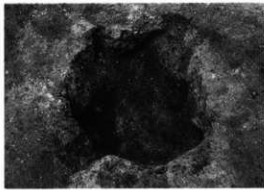
D-44号土坑



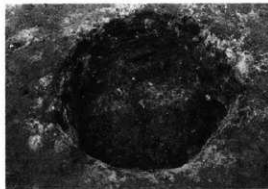
D-45号土坑



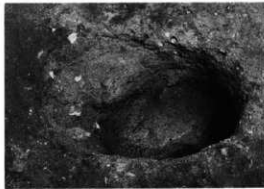
D-47号土坑



D-48号土坑



D-49号土坑



D-51号土坑



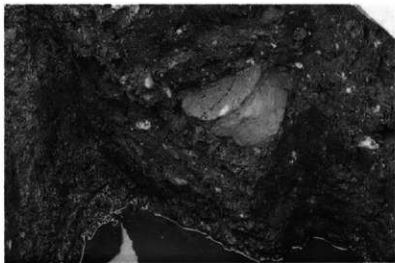
D-52号土坑



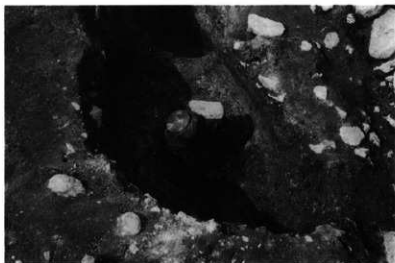
D-52号土坑



D-52号土坑



D-52号土坑
覆土中の伏甕



D-52号土坑
覆土中の伏甕



D-52号土坑
覆土中の伏甕



D-53号土坑の
土器棺出土状況



D-53号土坑の
土器棺出土状況



D-54・56・57
号土坑内土器棺
分布状況